四季部類

俳諧歳時記新菜草

下

俳諧歳時記新撰草　巻之三

京都　山口素堂　編輯

七月

㊐ 池之坊立花

（イケノボウノリッカ）

活の頂法寺雲林院ハ三条の事

もと用堂ゐる也二十三所順礼の一ヶ所ニ近世僧専光救品の花枝と一瓶の中にて山あの系家を模することをはじめ僧こまを立花とゝふ例年七月七日立花最初の物（キミソメ）を會有り是二世を供まつるの意ありよう

生身魂（イキミタマ）

盆の前後尊卑となく親族互に音信を通ず

盂蘭盆の修行ニ〔盆経〕願いくは現在の父母をして寿命百年病なく一切苦悩の患なからしむ是七月十五日僧自恣の日現在の父母寿命長久を祈る為願の文ニ是生身魂の修行ニ〔和漢三才図会〕刺鯖中元の日社頭にて但し誉ものゝ魚也

礪て割開きこれを焼て二枚を三重とおしまゝを一刺とす〇図ありて盂蘭の飯の考地の意前と法し又以て

の吟ニワキそゝ意を含けて温石さめてゝゝゝ乞ひ歩る事ゝ称門人の歩腸を述てゝゝゝもの如

第三暫して稲伯を伴ふる面風服の一件を言葉のゆもゝくさゝ句ゝ見込ゝ趣向をゝゝゝくおのゝゝゝむ協ゝゝゝ一句の俄意ゝ第三の手組ニ

是ハ名ゝ歌ニ 称ワキゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆふまぐれ雨の紫陽花の芭蕉ゝゝ
末摧の外も垣の芍薬
鈴の虫都ハ夏も用ゆゝん

題句ゝ秋風ゝ催ゝゝる芭蕉ゝゝ
まゝゝゝゝ雨の紫陽花ニ俄をゝゝゝ末摧
江垣ニ鈴をゝゝ也合ゝゝゝ閑引ゝゝゝ
風流せゝゝゝ一句の俄ニ

報ゝ三垣の外面の紫陽花ゝゝふ諸ゝ人情を起ゝてゝゝゝゝゝ逃さゆゝ
ゝゝゝ世ゝ里あるゝ都の方ゝて
打座ハ角の意ゝゝゝゝゝゝゝ

稲妻 稲つるゝ、

和漢三才圖會 秋の夜時ゝゝゝ

稲光ニ雑ニ 淳文 電ハ陰陽の激曜也

稲の花 夫木

稲の蝋 稲ゝゝゝ

続猿蓑 稲ゝゝゝ

ゆゝゝゝ浪ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

なるべきを用ひてよろしかるべし

○寒中連俳之事

前

山田の小田刈る鶉を刈残し

夕月さむらむれく渡る四十雀

是は景色を遁もらさず頓て彼八体さいふ時節なり

夕月や村むら渡る四十雀

秋をまきれてさそる戸ざゝ俤

是は前句の句のさまにきこえ情を向りかへて恋の八体の白髪なり

秋をうれひて寝る戸ざゝ風

目塞ぐ迄も薬をも食ず

前句秋を歎くといふ事を戸ざゝ俤とつゞまやかに続けたるもの

是は人情三句にやる頓て前句ばかりにあらず秋人の風雨をうれふる意味をつゞまやかに続けたるもの

人待月を受て後句に移すがしと人待月を受て後句を移すがしと

是は句を立一句の俤まで也の事を述してまさるもの

是七名目向附之

隣する声のもれ油煙

三尺つゞる雪のたそがれ

是は油煙さへ雪ぞうれしき時とくらべしらん一句の俤あり

是七名目之歌仙

鰯あぐる伊和之性柔弱故と俗字弱と以て学和之と訓乃ち相通ずる中略拝行して雪の海浪幾条と恒人縁知して魚を下し獲る鶉好んで鶉を究る為遠き者数百拝をなして浪撰のみしを見てかく脚を俵り多くして含ひ又時をえ殊に澄由とまた〇翔雲の魚を釣るの義製作するもの思力を用ふる五さいふ時節なり

秋天翺先とくらんとまつ雲一片の白雲有りつゝ雲段〻として渡のみしてこゝをいふ

六道参（ロクトウマイリ）　九日　迎鐘、摸賣、

[山楼名物十念]　名迄五条遠行寺の門の

前句八体と曰ふ人之

目ふさぐれて苦き薬を数る

雪深く戻を閉る冬之文

隣するくまやの煙の細き油煙

是人情三句にやる頓て前句ばかりにあらず秋人の風雨をうれふる意味をつゞまやかに続けたるもの

人待月を受て後句に移すがしと人待月を受て後句を移すがしと

是七名目向附之

隣するくまやの煙の細き油煙

三尺つゞる雪のたそがれ

是は油煙さへ雪ぞうれしき時とくらべしらん一句の俤あり

是七名目之歌仙

民家を指る景色をもつて念仏となす前項参照中止也

仏名（ブツミヤウ）　十月十五日より十日迄て寺々逆修の為に経を読む二条唐山の人情俗の日上巳祭禊にもあり

墓参（ハカマイリ）　七月一日より十五日迄て寺々逆修の為に経を読む二条唐山の人情俗の日上巳祭禊にもあり

和漢文撰　[漢文撰]　[漢文撰]　[漢文撰]

三又つまさきのくるそうな
鉏て劔る狼うそうこそ思ふらん
兎唇(ミツクチ)のまのゐまきと注

是ある白き三又の草にて花を鉏て劔く狼向を食くと見るうそうこそ思ふらんと俚せし一次の句前を猟人とるそうまきを句ひ一兎の唇とせしい猟人のうせまりの注きてあるくと猟を起しさい南を実う教生をまる業多加多多も此猟をかくまうまくと教も勢うそ〜紀事すと注〜まきの留守と注ある体と是前句を受けて猟の句頃と

ひるくらのまのの注まるし
鐘縁ある花の御寺を契夢て

是も人情三句ちてうる三新越の人い支下二多句の人い夢とそうまのの句を自下て猟〜そうの三教一句の契向も

萩(ハギ) 和漢三才図会 一文笹花い花史ニ云ふ如し掛まるに枝葉ふ長く垂地まる教ふ来の多を似くれるに花を着淳ふ多ニ葉ニ多ふ宮猟毎ニ光二里そうを萩生ふ青り山野にある白花の多有白ふ生ふ分の多有ふる 和漢 萩花紅ひて盛久し 萩殿、芒の戸、 梵網経 萩の戸ハ寺の門所まり 大和本草 萩ふ根くふ色ふ枝の花ふ多ふ載らる

情愛殿の西の方武間の地
廣徐ふ多、古枝葉、萩の異名 蓮の實(ハスノミ) 蓮類カ曰 ミを菊科

ふ多くまりくして水に浸む石蓮子ふまま〇山谷詩倒載叔達筍一ふ長ふ蓮の実の房中ふ掛ふくる穴ふ大勢くるを立 蓮(ハス) 和漢三才図会 山のふまを食ふくふ是ンーまるを 訛言(アラシ) 医書ふ山風ふ山のふまふ山のふまふ云是ン

今初秋以後朝夕山より吹風を俗ふらしふくふ 絡線虫(ハタリムシ) 多くさめ の中ふまる絡くふ

七月中旬ふて移義の中昼盛ふる声ギイ〜ふふふ如し二三の声の中チョンふ古打ふ多ふ俗是を蚤ふ云て山籬ふ入有ふ実る是ふそうまりンギイーふふふ機織ふ者チョンハ筵打者まるをスギスふふふ 蟋蟀(キリギリス)

つくふふふ云山雀の女をふんはて
ふうき世の中すも句まを果ふく意多の
罪障消滅のふ死縁の仏参ふ
多ふるふく髪をおろし尼ふ成ふ云
意ニ相叶句まふい花の空座に
ふうふうふく是非ふ花の句をせ句
はふふふ多ふ
はを起しまんいそまをふて
俳句いつふうもおーふく俳の名
称もおしゆまる多人の情をふ分
法性まふ依ふく縁仏参ふし
ふく花をふふ仏のたしーふもの二ふ
ふふうふ仏事まも山寺の花仏ふ
ーに仏ふ自然ふ多情ふ形まて
花の句にまる句ふ仕ふしい花
の名寺ふいんつふふふ処隠る
清形のふふくしまる

是多句い七ふの有ふふふ
隠ふふ多人まるも
鐘縁のある花の句寺ふ契夢て

の属長さ三四寸身ふ渡てふ方まる首両額ふ眼ふまる目
の上ふ二ツの緊ふるも翅次ふ裏赤ふ黒ふ背服の下白くふく
跳ふく捕 櫨(ハジ) 和漢三才図会 黄櫨以ふく多ふ和ふ海ふ渡ふ天
竺ふし子ふ内絶英櫨油ふふふ事ふ三ふ用ふ白
花ふふふく秋ふ至ふふく紅葉ふ
ふふふ多ふ海の影ふして葉ふ
称のふふふふ隠ふえふまふ今世子ふ採て多ふ燭燈ふ供
ふ依ふて平原の地ふ
うふふふ剥ふます 蕎麦(ソバ)秋物 籤芒(ハメスキ) 油中抄 花
芒ふそして
なふ同一ひふき二或ふ百葉悪ふふふ隠ふ
ふて雑ふふふげふふふ多ふ
花野(ハナノ) 子草の花野ふ多ふふふ仏ふ花ふふふふふふふ
花体ふまふて野ふ用ふふ花ふふふふふふふ
野体ふまふて花ふ
用ふふふぐし 芭蕉(ハセウ) 大和本草 本草綱目
ふ載ふ敏ふる地ふ植て
時易し妻ふ葉ふ生ふし秋ふ至ふふく止むふ根芒植ふ
年ふ発生ふふふ隠ふて大ふふ芽花ふ深ふく植ふる
緑二東福ふふふふ花ふ優
墨ふ華ふふふふふふふ 薑(ハジカミ) 和漢三才図会 生薑ふ姜
今俗多ふ姜字ふ用ふ
剣菱ふ音ふふ未ふふ騰ふふふぜふ一説ふ
往昔波之和美ふふふ辛き果ふ通ふふふ 鮒釣(ヘツリ) 和漢

妻の行 素往西方遠き所へ行くを
雅客庵の隣者うまれ遠方へ
是前句いろ〳〵種供養の花の事に
妻の夕雪とくり〳〵きくく酌流
なるべし 句あり
次も西方へ似くくとつくる句をとりて
西国三十三所の内 第〇番 〇〇山
〇〇寺 妻の〇〇〇〇を画む
おもうくくと句を結んしゝうの句
の機縁を含もくつゝもの
是等の事に係て附る
八体の句体
○
前
日ごとに一ぬらす又 数珠
兄しの妻の児縁を出よ堂供養
是前句日ごとに一ぬらしなるべし又ごとく
時のうつるをまつくきあの縁八重依
妻の袖と詠りある猛郎をあてゝ
叔兄しの心のごとくかもくとめる

三文亀會 弾琴魚、俗に波世、川の末海近き所に多くあり
常にあくまでを潜行小鰕を好くと餌にてつるゝ故の波を
まちとして
琴の事を作る 二三寸許の琴に弦の雄を附絃を着しも
ひ形くに似る 竿を揚くる秋月貴賤以くく遊興の一つと
納涼黒、亀鶴に似くよし 虎斑魚、琴の柱に似る
江次第 乞巧奠節所より第一飛を申下し東北
西の机上の真ごとく註 延喜十五年の例和琴
を用ふ裏書をこと柱をこと三様あるも常にまゝ呂ばかり律
琴根源 半呂半律ともに楽する
陰陽子 にんじん海
いと七月十五日

二百十日 雷正

二百廿日 風雨

廿六夜待 東武の俗

是前句日ごとに一ぬらす又 数珠
兄しの妻の児縁を出よ堂供養
是前句の児縁を出よ堂供養
時のうつるをまつくきあの縁八重依
妻の袖と詠りある猛郎をあてゝ
叔兄しの心のごとくかもくとめる

是七名日起情

是しの悪の児縁を出よ堂供養
時のうつるをまつくきあの縁八重依
妻の袖と詠りある猛郎をあてゝ
叔兄しの心のごとくかもくとめる

是前句の児縁を出よ堂供養
時のうつるをまつくきあの縁八重依
妻の袖と詠りある猛郎をあてゝ
叔兄しの心のごとくかもくとめる

是一句之目他の有心附

はふるゝ陣る人時きまり
なきよれの時まきまゝ世のいそ紀

是を一夜雲と空の間虎八云土人世々知ず
帯間虎八云土人世々知ず
審ならず
旅を刈
灵祠
妻いそ

齊諧記 天の河の東に織女あり乃ち天帝の子二様接勤
役しくて容を理るに遑あらざれば天帝これを憐
嫁せんとして河西の牽牛を夫とするに婚して
後竟に女工を廃せり天帝怒責て河東に帰らしめ
帳一年一會をもとす 星祭 星の手向 周處風土
記 七月七日の夜天を祖掃して灯燭を設香餌を河畔に
少納言 懸香薫 四民月令 七月七日織女を祭る
蜀俗風土記 星合の夜、

星合 星の契。

四季 七月 洛

此頃くさ〳〵つまらぬべし打越の句も是等を以よろしく付べし

盆市 ボンイチ

草市。蔭市。蔭の葉賣。[死事] 凡七月廿

麻がらうり

盆棚 ボンダナ

[和漢三才圖会] 世俗に本風と稱す草の注合

本風の實 ホンプウのミ

[和漢三才圖会] 世俗に本風と稱す草の注合

鳳仙花 ホウセンクワ

時珍曰其花之頭翅尾足具

南風 ボンプウ

時珍曰南風の種南蛮より三月種を下せば四五月開花

盆菓子 ボンクワシ

盆燈籠 ボンドウロウ

盆提灯 ボンチヤウチン

盆花 ボンバナ

盆茣蓙 ボンゴザ

盆筵 ボンムシロ

盆道具 ボンドウグ

盆用意 ボンヨウイ

盆支度 ボンジタク

盆仕舞 ボンジマヒ

盆の用 ボンのヨウ

盆の内 ボンのうち

盆の中日 ボンのナカビ

盆の入 ボンのイリ

盆の明 ボンのアケ

盆の送火 ボンのオクリビ

盆の迎火 ボンのムカヘビ

盆の供物 ボンのクモツ

盆の精霊 ボンのシヤウリヤウ

盆の月 ボンのツキ

盆の夜 ボンのヨル

盆の夜食 ボンのヤシヨク

盆の夜参 ボンのヨルまゐり

盆の夜詣 ボンのヨルまうで

盆の夜遊 ボンのヨルあそび

盆の夜踊 ボンのヨルおどり

盆の踊 ボンのおどり

盆の踊子 ボンのおどりこ

盆の踊唄 ボンのおどりうた

盆の踊笠 ボンのおどりがさ

盆の踊太鼓 ボンのおどりだいこ

盆の踊屋台 ボンのおどりやたい

盆の踊場 ボンのおどりば

盆の踊歌 ボンのおどりうた

盆の踊浴衣 ボンのおどりゆかた

盆の踊櫓 ボンのおどりやぐら

盆の踊輪 ボンのおどりわ

盆の踊笛 ボンのおどりふえ

盆の踊拍子 ボンのおどりひやうし

盆の踊提灯 ボンのおどりちやうちん

盆の踊囃子 ボンのおどりはやし

盆の踊見物 ボンのおどりけんぶつ

盆の踊見物車 ボンのおどりけんぶつぐるま

盆の踊見物人 ボンのおどりけんぶつにん

盆の踊見物席 ボンのおどりけんぶつせき

盆の踊見物茶屋 ボンのおどりけんぶつぢやや

盆の踊見物桟敷 ボンのおどりけんぶつさじき

盆の踊見物場 ボンのおどりけんぶつば

盆の踊見物舟 ボンのおどりけんぶつぶね

盆の踊見物船 ボンのおどりけんぶつぶね

盆の踊見物櫓 ボンのおどりけんぶつやぐら

盆の踊見物輪 ボンのおどりけんぶつわ

盆の踊見物笛 ボンのおどりけんぶつふえ

盆の踊見物拍子 ボンのおどりけんぶつひやうし

盆の踊見物提灯 ボンのおどりけんぶつちやうちん

盆の踊見物囃子 ボンのおどりけんぶつはやし

二の足を踏む 進まざる事にたとふ

是前句の心を思ひつゞけ案じ出すをいふ

古きたとへ歌にも「しかくおもひ出でて行きかねつ」と詠めるは二の足を踏むなどの今の世を通ぜて都近きを思ひつゝ後ろ髪を引かるゝ思ひを作るなり

作りやう 人二

二の足を踏む 進まざる事にたとふ

七夕 限の門 たなばた 書初 文始

前句を足とみて手と題を変化せしめ一句作る

前句 足 人体 白き物 呼ぶことの時を知る

七夕やきらきらの門たなばた

前句の心を越えて軍用の報と変化せしめ一句作る

前句 七夕 限の門 たなばた 書初 文始

前句の心を越えて軍用の報と変化せしめ一句作る

[増補俳諧歳時記] 近年民間に長竿を建てる事を禁ず 燈籠を掲げ紙を貼し 華て遠近より望む 流星 ながれぼし 凡そ星の流るゝ事 古来詩歌に詠ずる事多し 〇こゝに載するは 凡そ流星の大きさ 尾の長短 光の強弱 色の青赤 人なとの今の世を通じて都近きを思ひつゝ後ろ髪を引かるゝ思ひを作るなり

作りやう 人二

二の足を踏む 進まざる事にたとふ

七夕 限の門 たなばた 書初 文始

前句を足とみて手と題を変化せしめ一句作る

前句 足 人体 白き物 呼ぶことの時を知る

七夕やきらきらの門たなばた

前句の心を越えて軍用の報と変化せしめ一句作る

前句 七夕 限の門 たなばた 書初 文始

前句の心を越えて軍用の報と変化せしめ一句作る

[和漢三才図会] 蟲の種也 蚊遣火 蚊遣香 蚊遣の煙 人

前句の蚊遣を煙と詠ずるを変じ蚊遣の煙人と定めて詠む 蚊遣香 蚊遣火 蚊遣の煙 人

前句の蚊遣を煙と詠ずるを変じ蚊遣の煙人と定めて詠む 蚊遣香 蚊遣火 蚊遣の煙 人

[和名] 唐荘子云ふ 蚊睫雷を聞く 大なる事なり 蚊の睫 花 蚊の睫を抽

[和漢三才図会] 蚊の睫雷を聞く 蚊睫雷を聞く 蚊睫雷を聞く 蚊睫雷を聞く

しも面顔と髪のこゝろもとまでうるおひ一名の作こゝろくたゝくこゝろくふく髪のそゝけたるをそゝ俗氏もおどにもおくおくの句あり

是前方起ル

寒白くかゝる髪のふくたゝ
いと泪しと代りてお詩よゝ如ん

前句の人をおもひていくおしと詠を働おもく通ずる代作せしかしつまき人を約して頃しての二或を。猶ほ百姓と白蓮法ざまり自のの云本くゝゝ如らんと前ある所作ゝうさしゝゝ多く相あまい一句と自他すと苦ゝ百代りてくゝゝもいつゝ自分ゝ寒つゝあきんをふくま寒をゝゝくゝゝ如んとせしゝ初くゝ倭漢の酒句らんとの前ゝるゝ句心してそゝ彼中古の通ゝやゝ古風のはいうんまでていゝ婦ふ事ゝゝ

是前句の詞をゝゝ云ゝ署ニ向住ニ

○

蓑三秋物 律の調 シラベ

寺隠曰梭まゝゝ律十二有陽古を律と云黄鐘大呂、夾鐘、姑洗、蕤賓、夷則、無射、陰古を呂ともゝ大呂、夾鐘、中呂、林鐘、南呂、應鐘、是二名けゝく律とゝふ○真徳曰律の調ゝ如ゝゝ二ゝゝ呂の声ハ呂ゝゝ律ゝゝ律ゝゝ呂ゝゝ呂ゝゝ法ゝゝゝゝゝ呂ハ雑ゝす

蓑三秋物 零餘子 カゴ

野山薬と草薢と夢受葉の形状混雑して分別し

蓑三秋物 蒼 ちゝや

大和本草 白青木叶ゝ藤須云ゝゝ男をはまゝ針のゝし俗ゝゝゝを蒸料ゝゝ乳小児好ゝ食ふ妻ゝし血を破り血を止む

蓑 疏梁芋 リウキヤウイモ

大和本草 甘藷葉ゝ番草又蔵菜ゝ似ゝ根ハ瓜栝根ゝ似ゝゝ根の下ゝ短き薯ゝゝ根の藤の次ゝ此種ゝ緑のゝゝ琉球ゝ如らんと前ゝる所作ゝうさしゝゝ多く相あまい一句と自他すと苦ゝ百代りてくゝゝもいつゝ自分ゝ寒つゝあきんをふくま寒をゝゝくゝゝ如んとせしゝ初くゝ倭漢の酒句らんとの前ゝるゝ句心してそゝ彼中古の通ゝやゝ古風のはいうんまでていゝ婦ふ事ゝゝ

蓑三秋物 蒼 ちゝや

大和本草 白青木叶ゝ藤須云ゝゝ男をはまゝ針のゝし俗ゝゝゝを蒸料ゝゝ乳小児好ゝ食ふ妻ゝし血を破り血を止む

蓑 疏梁芋 リウキヤウイモ

大和本草 甘藷葉ゝ番草又蔵菜ゝ似ゝ根ハ瓜栝根ゝ似ゝゝ根の下ゝ短き薯ゝゝ根の藤の次ゝ此種ゝ緑

蓑三秋物 律の調 シラベ

寺隠曰梭まゝゝ律十二有陽古を律と云黄鐘大呂、夾鐘、姑洗、蕤賓、夷則、無射、陰古を呂ともゝ大呂、夾鐘、中呂、林鐘、南呂、應鐘、是二名けゝく律とゝふ○真徳曰律の調ゝ如ゝゝ二ゝゝ呂の声ハ呂ゝゝ律ゝゝ律ゝゝ呂ゝゝ呂ゝゝ法ゝゝゝゝゝ呂ハ雑ゝす

蓑三秋物 零餘子 カゴ

野山薬と草薢と夢受葉の形状混雑して分別し

前句

頭痛をしのふきさ日のゝ
鄙人のまゝとられ杉の葉

前句妻の日のゝくゝと暗きゝ仏ゝ
楽ゝもゝなくゝ沈もゝくゝ静ゝ
のゝ人ゝゝゝ迎ゝく倾城遊女ゝゝの図
をゝ客ゝ酒ゝきゝくゝ遠き國ゝ連
られゝくゝ去ゝ競車ゝの体ニ

是前句をゝ人ゝく王昭君ゝゝの体ニ

鄙人のまゝとられ杉の葉

水くゝゝし隋唐一朝
蓋神の都ゝ東吟の歌ゝゝく

前句ハお越の縁体ニゝゝ詠をゝ
の題向ハ波ゝゝゝゝくの家の流ゝし
中ニゝゝつゝ一朝のまゝゝし体ゝ
次の句ゝゝ波ゝゝ城郭在ゝして夜
明ゝくゝゝ水ゝを引ゝゝ
ゝゝゝ波ゝし家ゝのさゝゝ
込ゝゝゝ庭ゝゝを富のゝくゝゝをゝ
題向ニ掛ゝゝ元歌ゝの歌ゝゝ一句の作ニ

蓑 蔓荊實 マンケイジツ

本草 蔓荊子ゝゝ小ゝ実ゝ如ゝ胡椒ゝ如ゝ青黒ゝ色ゝ

蓑 蔓荊 マンケイ

本草 蔓荊ゝ叢生ゝ小ゝ木ゝ葉ゝ如ゝ牡荊ゝ如ゝ而ゝ歯ゝ缺ゝ

蓑 牡荊 ボケイ

本草 牡荊ゝ叢生ゝ小ゝ木ゝ葉ゝ如ゝ蔓荊ゝ如ゝ而ゝ歯ゝ缺ゝ

蓑 荊實 ケイジツ

本草 荊ゝ実ゝ如ゝ蔓荊ゝ実ゝ

蓑 荊 ケイ

本草 荊ゝ叢生ゝ小ゝ木ゝ葉ゝ如ゝ蔓荊ゝ如ゝ而ゝ歯ゝ缺ゝ

蓑 荊條 ケイデウ

本草 荊ゝ叢生ゝ小ゝ木ゝ葉ゝ如ゝ蔓荊ゝ如ゝ而ゝ歯ゝ缺ゝ

蓑 荊子 ケイシ

本草 荊ゝ実ゝ如ゝ蔓荊ゝ実

是八体白吟之頂

黄精の根を案内の鶏頭うく
蓼食の蕣御ゆるし玉

是前句の蕣を引て蓼食虫と転じ蕣を虫の体を一句と作りたる

蓼食の蕣御ゆるし玉
保昌う任もまやるらん

此句保昌が妻後の閨の事とおもひうく下知しく一人うく前句一任とうくうく云々
をもうく都より西国へうくうくうく事
有うくうくそ（今云縣令の任）

前の蕣を前句の蓼食虫を引返して保昌が任をまやるらんと云

此句の面白き上さやと疑ふべからん
歟ふく云ふ体の通う二句滑一句体の
蕣うく有うく無作一此句うく無向う所
やくんをおもひもよらぬうく云ふ体い
ふし巳前句をおもうくえうく止体成うく

源順詩出如蕙俗呼爲女郎者是ニ

蕙うく子を結ん花白き着男陪之とそうく

女郎花 秋の草

一蕙うくありまうくしうく山渡川うく外蕙うく有
ふし名にうくうく山を中実ニうくしうくとし此ハ中うく
蕙うく音まる成萩のまうくも萩の上風うくいふ

萱草 夏の草

大和本草 萱門冬の一種うく葉うく大并
の蕙門冬に同し蕾を煮及れ友の如く淡白

此句保昌が妻後の閨の事とおもひうく
下知しく一人うく前句一任とうくうく云々
をもうく都より西国へうくうくうく事
有うくうくそ（今云縣令の任）

萱草の蕣前句の蕙食虫を引返して保昌が任をまやるらん

萱草の蕣を前句の蕙食虫を引返して保昌が任をまやるらんと云

此句の面白き上さやと疑ふべからん
歟ふく云ふ体の通う二句滑一句体の
蕣うく有うく無作一此句うく無向う所
やくんをおもひもよらぬうく云ふ体い
ふし巳前句をおもうくえうく止体成うく

源順詩出如蕙俗呼爲女郎者是ニ

蕙うく子を結ん花白き着男陪之とそうく

女郎花 秋の草

一蕙うくありまうくしうく山渡川うく外蕙うく有
ふし名にうくうく山を中実ニうくしうくとし此ハ中うく
蕙うく音まる成萩のまうくも萩の上風うくいふ

萱草 夏の草

大和本草 萱門冬の一種うく葉うく大并
の蕙門冬に同し蕾を煮及れ友の如く淡白

要之ニ体共に作者の思ひ替ふく
付ニ此句ハ前の蕙食虫ニ対ふく
何うくのふうくうくうくうく旧保昌とおもひ
とうくしうくうく前句の云廻しをう
うくうくうくうくうくうくうく事一
是前句の体をうくうくて一句の
働をうく打法ニ

○

蕨

いそうく蕨白し山吹の枝
むくう雨の垣越春ほしあるう
ニつうくうくんうく泊るさ風に

蕨ハ春おそしの草山吹うくうくうく
て垣と結ひむくう雨ハ一句の趣向うく
雨蛙ハ時候のみ今也ニ体の情を起情ニ
前一句の蕨を趣一ある故文うく人ハ
を向ふむくうくうく趣をおくむくうく
句作の結ひあり

垣を越蛙もとくうくうくうく投るうく云
是七名ニ曰拍子ニ
ニつうくうくんうくうくうくうくうくうく

又藥師寺
とうくつく 旋覆花 蓮須曰二月以後苗を
生ずる多く水の辺に生

小田守 吹綿守。 元四を守う綿をもつい
山田守、 人畜の傷残うを防く二

手綿 吹綿曰七月取うく者を
う綿うく紙含うく丸べし 童相

扶桑略記 延喜元年七月廿八日童猶撲廿番
を内覧被行殿うく於うく此事有うく 古今著聞集

撲 越吹、 和漢三才圖会 を実撲の如しと云つ
中うく白綿を出すをを振吹うくふ説

車を終く中の子を採うく去り竹を以く
少うくを作り弦を弾く綿を風其を句うく

取 振 同上 拍うく天正年中南蛮の商船始く此種
を貢ふ以長崎の東の土山う植二月蒔を下ル

草 同上 拍うく天正年中南蛮の商船始く此種
を貢ふ以長崎の東の土山う植二月蒔を下ル

若煙

西國のまぼろしなどいふ小田のつま
夢白蓮をみるといふ秋くれてやゝ二四の人葉南陸に似たり長大七八尺葉をまるく三つ裂て夏月花莖を抽て高さ二尺餘に及ぶ花は百合に似て小也紅白あり根は蓮根の如し
是も秋之部

夢白蓼の穂
夢白蓼の花やさし

夢白問屋の表口の柱の書付ふと見えて葬禮を通るまるう藍向あり
是もやはりふと見しきとふもをかしたる一假之

是時分迄之

はつしぐれ葬の見さやさやと
片側も紺川流る秋の風

夢白の一條をまるく定めて紺屋町と藍向しに似たり
片側町と藍向しに似たり

又送てくだされ候し 君かすゝ絨盗出
もし蘇回をとゞむおらが春の俤とゞめ
ばかり

是春の旬の情を押出せる吟也

今やおらが春の俤うつらし
ふるさとの瞽の花のちらくと有る

打まゝの句也然るにおのづと感入
人を女となす迄うつしとれる新句也
ばかり 掛硯 懸(カケ)想(ソウ)いひ捨(ステ)にして
洞ともくいかの洞春をとぶらふ
昔の盛栄の今を顧の影もなき跡の情感
入道ともいふ人を事盤の前おもひ
浮ともそゝり給ひし跡いまは物のさま白
見迄ともふるふ藤ふーてう待ぐ意入
なる人の情ともとゞめ迄ともいひ捨る新句也
橋の景物のくさ〴〵をとりあつめ
ある句也 掛硯 懸想 いひ捨 洞 春
の女をとゞめ迄ともいふ情報おくふ
ひとゝ手綱をかの毒ともいひ捨
なる句也 ばかり

鶯 [石川丈山嚴棲集] 竹笛天籟上短くて下脩し指揮す
く首を下流と橋さゝる柘尾庄名を設く掟賂
[隠山の外] そもつゝ流ともと書て水辺ともよめり水
の力をかるく音を出ともいふ別
物二石川丈山嚴棲集 竹笛天籟上短くて下脩し指揮す
く首を下流と橋さゝる柘尾庄名を設く掟賂
[隠山の外] そもつゝ流ともと書て水辺ともよめり水
の力をかるく音を出ともいふ別
物二

[漢古今] 山田守る僧都の
[漢古今] 山田守る僧都の
[漢古今] 山田守る僧都の

○曇語之事

海棠の花 まがき 海棠の枝 まがき

赤白の海棠の花を銀瓶にさしたるうつくしき景色に投句 花の後の海棠の枝をきりてさしたるうつくしき景色に投句 海棠の芳枝をつく 花の後といふ 海棠の根のある事の前二句共正花を別に有りて海棠まがふかたく 一句の中に花の字摺の字捨てて句も花と摺とをきりて都て四字ともに正花とある事ゆるし

世の花さまざまにて一木山摺

是世の花いろ〳〵と一山摺ハ現在に道ありる花の山 おもかげ

是花の山ハ体に初摺ありそれ以下

又

らんとするやうに見ゆる山向にあるを 題目 踊 法花経目を習ひ通をおどりといふ 修学院村 灵神 御霊祭 捌経 灵神 御霊祭 捌経 柯著 枝豆 根芋 青蓼 茄子 麻 是を捌経といふ 家を捌く 善提寺の後にありて御霊祭 鷹の時 [赤漢三文図会] 四月初めより七月中旬迄の間 鷹の子摺 鷹の子捨 鷹の子 [月令] 鷹乃祭鳥 鷹巣籠 [大和本草] 其実に摘傷ると云 鷹の雛 [月令] 鷹乃祭鳥 鷹巣籠 [風江入楚] 竜田船 [和漢三才図会] 竜田姫 神 [風江入楚] 竜田船 [和漢三才図会] 竜田姫 神 [和漢三才図会] 竜田姫 神 [和漢三才図会] 竜田姫 神

せ車さうつして天上せしめりさるを花ざかりてく一句に作りうるに是なるい俳徒ら古今まるる有の情句そく得事の手段ふ習ふ画記事ふも習ふ作ふ多くく教示もべし

和歌連理枝

鶯哥 もべくそ 和名抄に鶯ふ黄鳥ふ三十一字の短歌ふ作ふ黄鳥ふ三十一字の長歌ふ作ふもありうぐひす 万葉集に鶯ふ梅の花ふ詠ふるもの多し 古今集に鶯ふ谷ふ出て鳴ふ集ふ梅ふ植ふるもの多し 又鶯ふ春ふ来ふ秋ふ去ふ鳥ふ詠ふるもの多し 又鶯ふ経ふ鳴ふ笹ふ鳴ふ竹ふ鳴ふ等ふ詠ふるもの多し 又鶯ふ老ふ鳴ふ若ふ鳴ふ古ふ鳴ふ新ふ鳴ふ等ふ詠ふるもの多し 又鶯ふ花ふ鳴ふ柳ふ鳴ふ等ふ詠ふるもの多し 又鶯ふ谷ふ出ふ鳴ふ等ふ詠ふるもの多し

凝顕哥 是万葉集に多し 三十一字ふ今一句を ほくろもの

うちやうにおそうくふくさるめもうもそのそのその

是ハ下の七文字ゐるき二
岩の上て松をたゝ松殿とのミして
ゐるてふ事ゐるものを
是ハ中の七文字をくてまの七文字
ゐるき二
白いあるてふ又たゞにとゝもいひてん小
町のふかう神の物二善忌ゐるてふ松
ゐるきゐるつゝもゐへまゐ古今序
ま一の給とくくるてふゐるつゝ

廻文

是ハ逆ま回一ゐうま
ゐるゐるき

むらくもゐるてふゐるあ なからそ
いくは那そこゝもそ那のさくら記
さゐるも

諧謔哥

是ハいとおもしろきことをいふてふ
ゐるつゝ諧謔を記ゐるき
ふ人もしろ有ゐるきいま代の人非
可定

又ハ指迷ゐ事載集ゐるてふ古ハ趣荘
の事ゐるきいまゐうの事をいふてふやうん

おとなゐるつめとゝ時移日拡まるゐ世俗佃堪雅ゐるゐ
大ゐるてふものゝを栗ゐるゐるものゝを稗ゐるいくら
ゐるとゝゐるき

無二秋物 梨子

時移日梨稗ゐるき二四月末
まるゐるてふ古ハ花ゐるき二月花
ゐるてふ

鳴子

鳴竿。秋の田畑ゐするゐるゐ秋
を驚ゐるゐ具ゐるき

蘭

宗祇曰葉ま門冬のやうにして濶く短
ゐるき葉長さ二三尺四時青ゐるき花黄
ゐるき

虫送

[記事]事ゐ依ゐく
田畑害をゐるき

松迎火

送り火。

木槿

時移日
秋花新

折句

ものゝ名を一字て上ゐ
ゐるきてふ

むらくら山。ゐるゐるしふく
藤のゐゐゐん秋を志ゐ人そなき

是オミナヘシの折ゐ

折句杏冠

白毎上下ゐ文字
を入ゐるてふ

をゐゐさゐゐ妖ゐゐゐゐゐゐそゐ
もゐゐ。ゐゐゐるまゐゐ志ゐ志ゐ。ゐゐ
きゐ

是ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
花世を智ゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐ

倒ゐ是を云ゐ回ゐ定ゐ事ハ古俳古
今可見ゐゐ

俳諧有様ゐ一俳諧二俳諧三俳諧
四滑稽五俳諧六迷字ゐ空戴八
鄙談九狂言 此ゐ字細ゐ弁之

折句

ものゝ名を一字て上ゐ
ゐるきてふ

むらくら山。ゐるゐるしふく
藤のゐゐゐん秋を志ゐ人そなき

是オミナヘシの折ゐ

折句杏冠

白毎上下ゐ文字
を入ゐるてふ

をゐゐさゐゐ妖ゐゐゐゐゐゐそゐ
もゐゐ。ゐゐゐるまゐゐ志ゐ志ゐ。ゐゐ
きゐ

是ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
花世を智ゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐ

無二秋物 虫

虫籠。

爾雅 足ゐる
を虫ゐゐゐ

さう助〳〵ふ助さをやはらかにいふ

つまらぬものをもてなすにもいふ

いろ〳〵の花をたてまつりくさ〴〵のこゝろをつくしまつりたまふ

物名 いかだし 疑ニ

うき草も菱もこゝろをなぐさむる古せりいかだふねのこゝちや白くこゝろん

いろ〳〵の言とゝのへり

贈答 いろ〳〵をおくりもらふ人ともに用ゐるもの

はじめて神さまの御供物を古今傳授の人をそのまゝ目のなくなる時まで

返シ おろそかなる供を神さまもおうけなさいませぬ

盂蘭盆 日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆

七月十五日に設け祖先を供養する事佛教に出たれども本邦にては上古より有しにや

報恩を報じ苦を救ふの勤うを目連の母をすくふを以て專ら修すと云地獄と云ふ盆

盂蘭盆の花 時珍曰檐金二種ありて檐金香ありと云

根を用ゐるものいまだ薑に似ざるを古非ず白く人以て湯し色を除き又煎ずる花白く

賀江ありまた秋に蓄心を出して實ふし嶺南の

追 やうせ 江東の俗スイトゝ云

はじめて神さまの御供物を上ること似ざるが如し

人をそのまゝ目のなくなる時まで

贈答 おろそかなる供を神さまもおうけなさいませぬ

盂蘭盆 日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆

中元の時夜盛に設て祖先を祭ること

養二秋物

鶺鴒 和漢三才圖會 揚雲六遊の原本にうく

甲州信州下野最多し最寒の地に住す

又あつまり回しくらす有ものゝ一事をいふ

○右は數人の家の古法として今の俚諺に入用あり然れども古今流行の變化をおもふべきなり

○右は數人の家の古法として今の俚諺に入用あり然れども古今流行の變化をおもふべきなり

盂蘭盆

盂蘭盆

鶺鴒 和漢三才圖會 揚雲六遊の原本にうく

甲州信州下野最多し最寒の地に住す

鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒

廻文
ちはやぶるかみよもきかずたつたやまもみぢのにしきおりかけてとは
ちはやぶるかみよもきかずたつたやまもみぢのにしきおりかけてとは

芭蕉翁古池之句傳

事如蕉翁根本寺俳頭長老博覧大悟之和漢而迎東江巨川之慶讃之師也而拙者迂愚不敏之身誤而忝拝其室之席雖然不可不伝其来由之故也仍而記之

栗奴 同上

煙草の苗に穂をふく時黒き虫の名 蝕 同上 俗字譽虫正字詳なり 蝕 同上 蒲萄の葉の虫 蝕 同上 蒲萄の葉の虫 蝕 同上 蒲萄の葉の虫

蟲 同上

蒲萄の葉の虫 蝕 同上 蒲萄の葉の虫 蝕 同上 蒲萄の葉の虫 蝕 同上 蒲萄の葉の虫

蝕

今も天下に宗匠なるべし 賀
像をかく 嵐蘭らん 水雪を俤
骨こつおとらず 陳綾ちんりょう

八幡安居の頭 やわたあんごのとう 十五日 [紀年] 元安居の頭を大経営二ねこころまで

前その頭人を指点せ 先考年の十二月朔日より翌
年十二月十五日に至りて八幡山下の郷家安居の
頭を勤むその七処中 [七処] 安居の頭人の宅をめぐる者二又十二月
八日今日石清水安居頭人の宅をめぐる 建所
小綱の神人長吏の補任を授けこれ故格部と
いふ又十二月九日頭人の宅を訪ふ 郷家 [京] 京を
し雑掌ありり 旧十三日頭人浄衣を着し奉供
まことに行粧をる古風にぞ [八幡山の事] 今八十二月十五日に

糒米 やきごめ [本朝食鑑] 今製する焼米は糯を以
蒸熟をさり炒りるてこれ搗き扁
米とまを此を焼米と好まを当住に摩洲荘野の
市上にく焼米を造るまる者を以くに俵をつくり
是を包みて四方に送れ

炙花 やいとばな [やいとぐさ] 蘇る夏草 小白の花をつくり内微紅に
児童此花をとるをく唾こくまめし莖有方を
上げてまた足或は頬に貼こさるるに炙の如に依るく

古池やとまおき作ふむこ行るに
歩ちつて戻しる

古池や蛙飛こむ
水の音

冥三秋物 あきのもの 著蕎 ちょろぎ [救荒本草] 著蕎渓の辺に尚を出し時く
風本に感して霰に変まる
ものをこるる人従くるも

焼鳥 やきとり [明恒秘蔵抄] 焼しめとい
馬もどの尾髪をきるてもきこをまりを焼て用
当るるりそ髪を焼くる疥のまる如二此を焼鳥とす

曼珠沙華 まんじゅさげ [本朝本草] 金燈花 鉄色 蒜とも三月今摩養に四
冬春葉成り夏月花生して葉死る花葉相離ら
ざる二此と花下品二そ葉石蒜に似くく一類二花を
開俗曼珠沙華と云翻譯名義に白曼珠沙華
薬軟又赤草とくく西陽雑俎曰金燈草俗人
呼ここまを種ふる

松虫 まつむし [和漢三才図会] きりくりるとく鳴ふ
その頭褐色まて長
き鬚股黄二野草及び松杉の葉を食り夜羽
を振くく鳴事知呂林古呂林といふふるしきを
優美二元松虫鈴虫盃虫得くくし夜燈火を照
も好る光を恋くくとてまる我捕ことまを竜二喜ふ

冥三秋物 十寸穂の芒 [多名抄] 薄の
ほさ一尺許

芭蕉翁廿徳稿

蓮の荳

丸く俤ゆるやかの句を誹諧にしてもいろいろ多くて誹諧多し　三ツ葉ばかりも白からく〳〵たらく錦ぎもの又婦のめく家をつゝむへらく汲又いたゞきても一句の探いもしなき心の深しくのきてんつゝまれ芭蕉の荳をおもてこゝろへし細いきれ易くしてもろもろの系なるもの〳〵ほし共めくお越をのうれ芭蕉のんをもろ〳〵

乞食の嚢

乞食の嚢もつまるは木の葉かな

○ 人の顔

人の顔も七五三迄二百年

小鷹狩

[清滅雑談] 初鳥狩 小鷹狩 おしろやりめのまいてくる

江鮭

[漢三才圖會] 鮏 いきこうを江鮭と云 或は仲哀鯉或は七女子魚なと云 近江鮭と云八九月精巣し大さ六七寸江海の交る処に泥味多く脂うるおし美と也 [漢三才圖會] 此魚形圓長 十六日

所柿

[漢三才圖會] 柿 大和国吉野村より出る 柿渋の上品なるもの

木練柿

[蕪二秋胸] 柿 芭蕉

小濱

[漢三才圖會] 鮞 いきこうを江鮭と云 或は仲哀鯉或は七女子魚なと云 近江鮭と云八九月精巣し大さ六七寸江海の交る処に泥味多く脂うるおし美と也 [漢三才圖會] 此魚形圓長

千歳不易一時流行

○他門の白い彩るあれし我門の白き黒を重ぬるもくろし又彩るのふきうもちろんしもちろんしもちろんし

○春門の風流を学ぶ事古今の名家のあゆみ百句冬の日猿蓑の句撰ことごとく熟覧まべし

○初心のうち自句をそまむべし其ときは師のおもむき大山をまし一向の発句にうつる事を忘れず六足を越んと欲する者はまた七足を画むべしされどもこれ古人の規矩なり古人の規中にあるべし

○俳諧を中人以下の物と誤まるは俳諧をよく知らざるなり俳諧はよく学問ある人の楽しみ古今集の心ともいふ支子ともいふ下士民すら味ふ事ゝ唐詩ほどの中華の豪傑まで感ずる所ゝんのいやしきを斥く

○季の題なきは其春の後を味ひ一字

歌さま姫　朝臣姫　衲被七姫のうちより

雲衣　八雲御抄　女雲衣とは秘そこの布ゝ

天の川　銀漢　雲漢　星河　河漢　字彙　天河其斗の間よりうそ長きこと天ゝ竟也　揚氏物理論　漢水の精こと雅俗ともに昇降して天河となづけて天漢ゝ云

花鳥井の蘂　掘の鞭　記事　掘鞭

家並ゝ雅俗鞭の字恒例一如俗語を字話とのゝ字ゝ云ふ所ゝ接きまうけいふ誠ゝいふ事集の心ゝ唐詩まで下士民すら味ふ事ゝ中華の豪傑まで感ずる所ゝんのいやしきを斥く

愛宕の地下のつゝ人　挿入　新撰増補

愛宕山ある所ゝ洛西ゝ山上ゝ愛宕の社ありて七月廿四日の夜ゝ愛宕詣とて参詣の人ゝ地下のつゝ人ゝ参る

火　日

秋さま姫　朝臣姫　衲被七姫のうちより

雲衣　八雲御抄　女雲衣とは秘そこの布ゝ

天の川　銀漢　雲漢　星河　河漢　字彙　天河其斗の間よりうそ長きこと天ゝ竟也　揚氏物理論　漢水の精こと雅俗ともに昇降して天河となづけて天漢ゝ云

花鳥井の蘂　掘の鞭　記事　掘鞭

家並ゝ雅俗鞭の字恒例一如俗語を字話とのゝ字ゝ云ふ所ゝ接きまうけいふ誠ゝいふ事集の心ゝ唐詩まで下士民すら味ふ事ゝ中華の豪傑まで感ずる所ゝんのいやしきを斥く

愛宕の地下のつゝ人　挿入　新撰増補

愛宕山ある所ゝ洛西ゝ山上ゝ愛宕の社ありて七月廿四日の夜ゝ愛宕詣とて参詣の人ゝ地下のつゝ人ゝ参る

火　日

秋

風　陽氏物理論　秋気動其風清　秋ゝ

河　漢　漢漢の間牛馬を詳そ　秋の川　漢

花　和訓栞　秋萩　尾花　平指斯可枝波者七草花　秋ゝ尾花ゝ花ゝ萩ゝ女郎花ゝ藤袴ゝ朝ゝ尾

[illegible]子の一連の連俳を押あるいは又[illegible]
[illegible]の葉鶏頭の風流を来つゝ[illegible]
[illegible]久しく盛るべく女をこゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

初めて咲みをとゝのへて導くを俗
する妻に用也牡丹芍薬おのおの
妻あり連理まれなる夏も用也又
若葉かげ〳〵ふたゝびも友あり
青葉若葉の若葉ふたゝびもの若
葉ふる雨風いと繁してこゝろさゝ
ぐ秋のくるまでも冬も用也
蓮の葉は雪中も採りしくゝみ
も葉も用也夏の暁いまだ暗き
中に採るべし昼は葉かたくな
りて用ひがたし
蓮飯 蓮の葉に飯を包みて蒸せる
なり
蓮酒 蓮の葉に酒を入れて飲む
なり
蓮の実 蓮の実をとりて煎じ
よもぎ餅あるいはだんごに
まぜ作りやうくおとしいれ
給ふ煮ごめ尾なく甚旨
蓮の葉 蓮の葉を干して冬の
あるを用ゆ
扇風 秋の扇をいふ
蓮の糸 蓮の葉の燃を濾も西王母降
蓮根 切子蜜煮。
蓮の茎 七月
蓮の茎にて風呂を焚用ふ神事延
喜式
蓮の茎 美なるも
蓮の茎 七月
蓮の茎 帝宮殿の内を掃除し雲砂の
蓮の茎 九枚燈。
蓮の茎 七月七日帝宮殿の内を掃除し雲砂の
蓮の茎 七月七日帝宮殿の内を掃除し雲砂の

蓮の茎入 七月

[名目抄] 今の俗キツカウテント云ふ不足言云ふまでもなかめ一を巧奥と
いふ人こゝを葉と巧あらんことを願ふ意ニ [年中行事] 七夕楼閣を飾りて金盒の中に鉛暁を穿て蛛線の梶
葉を観巧のの多きを以うらなふ也 [年中行事] 七夕婦人七孔の針を穿ち或
は五色の糸を以て瓜に献菓を盛て陳ね巧をこふ [新撰歳時記] 七夕婦人七孔の針を穿ち或
は五色の糸を以て瓜に献菓を盛て陳ね巧をこふ [年中行事

やうしく花園に庵をむすびて
春のうぐひす老極に移りて
林のうぐひすも初初老に
至る人里さる紙衣に老
の繪若き人紙衣なる
吟ずるに
吟ずるに
なる
水するまし友の
峰々社の夕も土のとまりく
笠もうるくまる
笠の
せくしくく
○法
向ふを
○奉納
則
社
之
部

霧 二秋 物

[和漢三才圖會] 霧の二種陸地の霧もあるもの
水氣天を亂して
吟ずるに
なる
霧の
霧の色。
霧の
霧の香。[所全] 霧

草 蔬菜木

[和漢三才圖會] 春の
連俳
霧
霧
霧

久世 譬、坂

西院 社、里

狛 里、氏

美豆 市牧、野、里

以上山城國

奈良 旧都、南都、國府、ならし、

巨勢 野

佐保 川、杉

三輪 社、杉、索麵

國栖 翁、魚、紙

輕 池、市

以上大和國

枚方 名 川

須广 上野、寺、宿驛ならん、

以上攝津國

昌陽 池

日枝 山、吉根、杉不二、

吉野 入江、浦

吉良 嶽、雪

吉野 川、さゝし

擣、螢、鹿、蛍、

朝日 旧號、市供丹、綱代

四季 十階藏寺記所乘草

二井寺女 江州長等山崇福寺又蓮福寺地福院を大津の側にを園城寺又二井寺とよぶ其西當に天智、天武、持統、三帝即位のとき此井の水を供ぐ天智、天武、持統、三帝の浴井龍華三會の義と此寺平日女人結界山なり只七月十五日女人參詣を許せ是を女人堂と云ふ昔し八隅入服令〇或說に御舟山の號ありと云ふ

御狹山祭 穗屋、廿七日 信乃諏訪郡

今在記 上源詩に建御方富命下の詩は八隅入服令〇或說に御舟山の號ありと云ふ昔し

穗屋 狹山を作る穗屋ありうらしい勅使をたてらるゝうの穗屋とくふい勅使を

入 混方生秋夜賦 氣入亂以淒凉混林黃柴甲子泥行 のまゝしをまろさ風のまゝむ身

蛬、蚓、鳴 歌女、 名 土龍、地龍子、寒蚓 まのあり〇時珍曰東方虹蜺云其鳴ことく長吟ねこゝ女とろ名く盃を

蓑虫 鬼の子、 前漢三七圓會 後漢の蜘の溝く舒老葉巻こゝる中こゝ虫を生ひ

▲以上 近江國

子賀 浦、磯邊、

十符 國、菅、蔣、

▲以上 陸奥國

木會 松笠、唐子笠

諏訪 社、湖、氷、八ツ目鰻

▲以上 信濃國

由良 湊、手彩長者

与謝 天橋立、内お濱、入海、切門文殊、

▲以上 丹後國

富士 山、宮殿、雪、煙、裾野、牧狩、

二保 國、松原、怪家

まで杖に遮う時く首を出して蝦蟇を含ふ甚のを執うひとうも養養する者と似るう 【養由述】 素堂

子賀 浦、磯邊、

このむしくく声の如何うるまをむるもしてなくいい孝こるまるいうにつくて鬼のうあん

十符 國、菅、蔣、

情女うさのさうなおす置あるもも督使を父うて舞あるも泊い馬の舞あんうか〇季冬云

▲以上 陸奥國

このむしくぞうるまい称之

木會 松笠、唐子笠

諏訪 社、湖、氷、八ツ目鰻

▲以上 信濃國

由良 湊、手彩長者

与謝 天橋立、内お濱、入海、切門文殊、

富士 山、宮殿、雪、煙、裾野、牧狩、

二保 國、松原、怪家

七夕 七日の夕 しち

【月令廣義】 焦抹大斗河鼓、牽牛、織女、犬飼星、記云天の河の両星

星 せい

牽牛、織女、犬飼星、

河鼓、彦星、ともそうつめ、

織女と云ふ世と雙星と云ふ 二星の屋形、唐の天宝年中宮中七夕と後綾をふくく結ひて携而をおうする百丈餘十人を容べし花果酒交を陳ね坐を設け祝く牛女の二星を祭る〇和訓式いおく呉服を設けつくくを向うをつふ七種の物を盛る 七種の丹いもこの宝を七重

▲以上 駿河國

不破 関、板庇、

▲以上 美濃國

佐野 池、雪原、

▲以上 和泉國

佐野 俊堂ばりハ 大和 今、丹榛ハ 上野

契古 川

曽根 社、松、

▲以上 播广國

那智 山、三重瀧

▲以上 紀伊國

鞆 浦、

▲以上 備後國

自一日至三十日、享保元年江戸吉原の遊女玉菊う追薦の為一七日中の間の揚屋名被義を出せ長ふ

例こまるりてくぐうこぐ男女群集しこまを見物も一時筆半

不破 関、板庇、

ふきまる花ぎく故ら塊然こく枝子の者くこ又

佐野 池、雪原、

東うあり 作者不知 **石蒜** 【大和本草】 光鶏蒜二志ゞとまるまこ二四月或八八

九月赤き花ぎく故ら塊然こく枝子の者くこ又

彼岸の花くもいふ曼珠沙華のうかよいしそうび

秋海棠 シウカイダウ 【名花譜】 一名断腸花、嬌姿柔軟真に美人の粧ひを捲がし性陰を好む日を見るう即痒く九月枝上の葉子を收め地上に仆れ春枝を発せ老根冬をるる多用花発き更

契古 川

曽根 社、松、

那智 山、三重瀧

秋海棠 シウカイダウ

椨 シブカキ 時珍曰椨柿一名漆柿昂ち枯こて皐

椨柿 シブカキ

三戈圖會 椨渋造る法初一斗当を生水二升五合ろて碓に搗く桶盛り一夜を経くこるを搾り生も

三字

北野　聖廟、梅、歌向祝、

大内山　梅

革堂　社、夜梅

貴布禰　社、川、螢

愛宕　梅ヶ原、かいつけ投

鞍馬　傍公谷、雪枝梅、炭、木の皆焼、石、番おどし里、精衣、鋼舟、油菓物、花火、

伏見　里、精衣、油菓物、花火、

木幡　宮、川、製紙場

梅津　御所、川、鮭筍

桂　幻窓、硎石、打盤摺、階子、豆汁、

高雄　

又あさおし二日を経て再び其を搾るを用ゐる多し 薫三秋物 篠（シノ）

芒（ススキ） 宗祇曰、芒のもとき、しげく繁茂して、淀を白文字をつくる、○綴芒（シノブノサ）、淀に同じ、芒のぶ草、細き葉の名、梅の若葉の形に似て、短き草、梅衣を着るがごとし、

忍草（シノブグサ） 芭蕉翁曰、古人多し、雑長谷を別つ、

鹿（シカ） 〔和訓栞〕鹿の性、怒れる烈、一年毎に角を換て、而して白鹿と化す、鹿と薬あるを鹿ありて、

〔大和本草〕鹿の角は、冬枯牡鹿の角、冬枯牡鹿の角、

人ごと九月より来りて、後腹脱帯の根及び胎鹿の皮或は蝦蟆の皮を以て、

掘人、専用の根及び胎鹿の皮或は蝦蟆の皮を以て、

つつらつつらつく北、鹿の声を偏る壮鹿来て竟に弥に慣る、

●鹿垣、此獣田園に多く穀菽を食ふ、農人甚だ之を防ぐ、

〔陳蔵器拾遺〕鹿の骨の如く、

んため垣を設く、

垣を設く、

鶏（シカ） 鶏の雄の如く、而長し、汎渠の間に在て鶏ら著き者は赤を多く、今田野の間にふつうにあり、いまだ雨ふらざるとき、つねに芝

〔和漢三才図会〕鶏、山、梅、清水に里、川、山科に

水、山、花

烝、涼、くさぐさし川

醍醐（ダイゴ） 水、山、花

乱（ミダレ）

小塩　山、花、

祇園　社、香陳梅、雨梅、二月、蛍、

稲荷　社、山、草、

八坂　塔、

小倉　山、紅葉、時雨亭

巨椋　池、蓮、菱、芡、菱、白鷺、小鮒、鮎

八幡　男山、社、梅、放生川、

笠置　寺、窟、捕石、

吉田　社、神楽岳、

音羽　滝、山、梅、清水に里、川、山科に

醍醐　水、山、花

乱　山、花、

小塩　社、香陳梅、雨梅、二月、蛍、

祇園　社、山、草、

稲荷　塔、

八坂　山、紅葉、時雨亭

小倉　池、蓮、菱、芡、菱、白鷺、小鮒、鮎

巨椋　男山、社、梅、放生川、

八幡　寺、窟、捕石、

笠置　

て鶏ら著き者は赤を多く、今田野の間にふつうにあり、いまだ雨ふらざるとき、つねに芝

〔和漢三才図会〕梅まるごと俗に略して梅の字を用ふ、蓋田舎の二字を相承よろづ、

辺原中に略して梅の字を用ふ、蓋田舎の二字を相承よろづ、

と回り風流の大勝を画るを設く近寄るまに勝さ、

めうるを止く、こに北大きく近くおりて竿洞を投てとる、

●鹿の雨捨、〔和訓栞〕鹿已に骨まで、

羽を去るく、雪のごとく、雪のごとく、

百羽捨てもまだ数捨てもまだ雪の如きのみ、

暁の車までつるおりとそ、

●鹿の宿猟、〔同上〕俗諺に、

その網代に落ちの宿 鹿（シカ） 九万疋、

〔和漢三才図会〕画面云字未詳俗云志比良、

御室　嶺、紅葉
東寺　塔、牡若、芹、芹、
（以上　山城國）
春日　社、里、野、むろの木、名所、鹿
泊瀬　川、寺、古川のべ、長谷の梅、牡丹、
十市　里、衣うつ、砧、
豊等　寺、鐘、
高天　寺、梅、雲雀
吉野　山、里、千本桜、川、滝、苔清水、帖、
龍田　社、川、山、紅葉、
名田　淀、宇治の舟、滝、
雪陀坐　雪詣、呼子鳥、

船に着くく入海まで夏月鴨日本にて多くく冬月翔中華の陵に多し　大和本草　猫ねずみを捕ことく味そらくく美あるくく

㊉ 椒の葉を戴　薬草　禁庭の時立秋の日京師椒の葉を宝祚の御門に奉る故事也　一葉落而天下知秋〇一葉の舟　一葉の舟、さく盆の水に浮したるを一葉の舟と云　一葉　桐一葉　淮南子　一葉落而天下知秋　大和本草　椒ぬかごくく猫

冷　雨冷　秋の事に　秋　花　楓

ヒサキ、キサーケ、カラテコブラ、ライテンキ、ハジカミ　品字箋　ヒサキ　椒

㊉ 桐の葉　大和本草　時珍曰桐生山中二十年方可伐作琴瑟　桐油　桐の実を採て油を製す　油煙墨　桐の花　桐の実　桐の葉　桐の木　桐の花　桐の実　桐の葉　桐の木　桐の花　桐の実　桐の葉　桐の木

堀江　跡、こゝかつくし、なま舟里、橋、人拉、

長柄　沼、五月雨、芦、かるゝ、

玉江　仲、浦、子ま、

鳴尾　温泉、鹽ヶ竈、筆綱ユ、

有馬　里、浦、子ま、釜、

芦屋　里、山、捨衣

名ごの湖　綱引、玄砂塊

敷津　社、山、虫、

廣田　社

高津　滝、杉、峯の庵

箕面　神、浦、浜庭

神守

上ヶ屋し經を誦し中央に移この供物を備ふ云〇施餓鬼ハ川の端にて修し法名塔婆等を流す

闘雞野　仲将、永室、

江口　時雨、宿、舟、あだ波君

一以上 摂は國

明石　浦、泊、霧、霧、鯛

飾广　藍、褶染、

蘇江　簡、跡、新納、蜑、漁舟、

一以上 播广國

三上　百足山ヒ

伊吹　山、艾、藥草

堅田　浦、浮洲堂、芦、雁、帰帆、ウ

矢走　翌、泊、出女

大津　

摂待

門茶、往来の人ニ茶を施をこゝ又ハ門茶ともニ云

施火

焼

大文字火、鳥居の火、紀津七月十六日京東船の火、妙法の火、山陰土寺の山上ニ薪を以て大字を点ず此字畫元筆の及ゝ処ニ依らず傳へ以て町家驚目の日遠望遊観のためなり我点せしむ故ニ一条通を正面ともニ一説ニ延徳元年七月十六日相国寺川勘尚昭てまきを作る是ハ軍ニ義尚追悼の営ニ此外北山松ヶ崎ニ妙法の字を点し舟形の大文字宮山ニある右形の火を点す法事ニの意也ニて諸人麻ゝを焚ニ罪を聖灵の送ニと云ニ

施餓鬼

施餓鬼　施餓鬼棚、紀津北川施餓鬼、自彩ニ

仙翁花

千秋樂

盤渉調の曲也

栗津 ▲以上 近江國
松原、古戰場、時雨、古戰場、
榛川 寺、八重櫻、たえ、後、杉、時雨、
長等 旧都、山寺、橋、

浅間 ▲以上 信濃國
嶺、連峯人、烟、山彦、繩掛、
伏屋 篇木、小笠掛、

児島 ▲以上 備前國
苫屋、浮洲岩、

二見 ▲備前國
浦、岩、貝、蜑、
鈴鹿 八十瀬、山、關、
香良洲 濱、燒蛤、

〔休源抄〕千秋樂 拍子八又十六拍子 ○王子降誕七夜ニ當リ試奏ス 題詠ニハ秋ノ部ニ載ス 萩女郎花ノ風ニ吹シクラルヽ 又ハ露ニ濕ヒ ○俳書ニ千秋樂ヲ出シテ万歳樂ヲ出サヽルハ社風ニ樂ヲ漢ノ武帝ノ時出テ秋ヲ專ニ詠ジソレ秋季ニ入ルヽ故ナリ

十九 水灯會 十六日

博多安国寺ニ於テ大和田芳山ノ夢中ノ建立ニ○華人黄蘗隱元琦禪師明暦年中ノ建立ニ○ヽ當寺ニ古川ニ船ヲ浮ヘ數百ノ灯籠ヲ点シ淀ヲ後陵シ ○ヽ後修ヲ行人毋ヲ浮ヘ見之

相撲 ズマヒ

部頭使 トリツカヒ 〔漢書注〕兩ヽ相當テ力ヲ技藝ヲ試ルヽ由ナリ

〔平原〕史記 秦ノ二世甘泉宮ニ在テ樂ヲ角力戲俳優ヲ奏ス漢ノ武帝ノ戲ヲ好ム即チ今ノ相撲ノ ○垂仁記 大和國當麻蹶速ト出雲國野見宿禰トヲ相撲シ蹶速野見ニ勝ヲ ○ヽ踏ミ折ラレテ死セリ 野見ハ當家ノ祖ニ○ 先ッ二三月ノ内ニ大相撲ノ庭ニ於テ相撲使ノ事ヲ定ム 洪國七道ヨリ選ミシテ相撲人ヲ召ス ○ヽ部領使トス ○七月ニ相撲ノ節ヲ行ヒ天子ノ御覽ヲ ○ヽ

▲以上 伊勢國

勢田 社、八劔宮、蓬ヶ嶋、
鳴海 浦、浪、鞠約、綾ノ神ノ ○ヽ

▲以上 尾張國

鹿島 神、宮、常陸ノ ○ヽ
筑波 山、神、男女ノ川、

▲以上 常陸國

雪井 宿、旅奴、
里、手枕、

駄上 川、渡シ、鵜舟、
長良

▲以上 美濃國

確氷 峠、坂、

○助手最手加手ト云ヒ多ク相撲ノ少ノ ○ヽ勝負ヲ ○ヽ助手トノ ○ヽ記ス ○ヽ ○ヽ ○ヽ

一 上野國

安達 原、黒塚、鬼

名取 河、月の出、老女

雄島 磯、海士小屋

信夫 壺碑里、浦、志のぶ摺、

一以上 陸奥國

敦賀 浜、浦、

一 越前國

有磯 海、濱、枕詞

一 越中國

生野 大江山、鹿、雪

一 丹波國

蒼七月 立秋節 處暑中

新秋、孟秋、文月、棚機月、女郎花月、涼月、盆秋、相月、桐秋、葉月、紫秋、肇秋、親月、

七月 小暑節 大暑中 土用

建勲祭、山ノ湊川祭ニツ

八月 ⑫ 十六夜月 (イサヨイ) 既望、[夫木]望やもんの心もあり

やうんのいまよりもさやけき程の物ゝ心地ぞするも〇いざさらば月見んとて庭の物ゝ心地ぞするも〇いざさらば月見んとて庭の物ゝ心地ぞするも〇いざさらば月見んとて庭

（筑前國）
松浦 神功皇后、鮒住給ヒシ所、

（肥前國）

四字

玉川 山吹、井出。山城 桂、井出。山城 萩、野邊。近江 卯の花、。持統 調布、。武藏 千鳥。陸奥 毒ある、うつぼ。紀伊 ▲以上 七ツの玉川

清瀧 初葉、柳、

鳴瀧 川、岩ある瀧、大和、

歌宮 別ち 雅言ある名 小菅垣、榊、 哥曲橋、藤

月の桂

伊須加島 正字未詳 同上 狀勢殆ど似て頸脊長く又腹德最赤く葉

微曲して項黒く腹灰青色羽の末黒く白き弧ありて背

豆甘美と名く俗呼て豆四ツと名く米と呼て春

月よく熟る比志利 古末利といふがごとし

八潮（ハツシホ） 田の

紀事 元安月朔の吉日として相

変もることく中華と同し 今日

は八潮（ハツシホ）

二階者くして齟齬又をあげ故と

物事よくそろひ整ふを伊須加の借字と云

実の多き事、憑の節供、

特怙の節、田面の節、

殊に八朔と称し又恃怙の節と称す又憑の節供と云

或ハ国の実の節と云世と又訓を借りて憑の節供

と称す又田の面の節と号す中世農民稲の初穂を

替ふ衰ふを賦す又君臣朋友相依て頼の義を取君臣朋

友の間互に贈答の義あること今日

貴賤老白帽子を着し互に慶ぶ

○また益立神秋の月ごろまでをさしていふまた宮ごもるくし

三四五日ごろまでを八朔の月と貴ぶ或

説

初月夜（ハツツキヨ）

十五日の夜を云一説

に社頭の初の字を

とるとあるは非

初潮（ハツシホ）

玉敷井 敷、月、鋪、

蓑岡 都の名、よく蓑の

類、時の如うさ、

大原 宮、行幸、神代の

事、

除州 里、鄙ふく、竹

屋焼、

山科 里、時ふる、楊、大石

邸址、羊屋縣、

廣沢 池、月、萬ノ菓、

芳川 行幸、若菜、

ものすべん、

太秦（ウヅマサ） 楊、牛祭、

石體義、

白川 楊、瀧、石工、

ものの車、

舟岳 塚。墓。

社、

化野（アダシノ） 墓、古塚、

▲以上 山城國

五雜俎 海潮八月猶大ある

ことの如し 潮の満ちるを應ずるの名月望るとき

葉月の潮ともいふ何ぞそれ

盛ンにして八月の

望尤盛なり

郡此社に參詣帝の祠に擣ち多く迭し〇神名式三座

中八瀧神 天皇 東に神功皇后 西に武内宿禰之仲哀

天皇三韓を討ちんと欲し北向て神功皇后ととも

に祈ふ擣日の宮と並び給ふ軍旅を停まるの時天皇崩御

あるを以て乃ち自ら男

子の貌をかへ髪を結ひ弓鞭をとりて皇后と共に

三韓を定一統基を得り

の後降誕ましまして三韓とともに帰り

て男子踏鞴ましまして

守給ふ邑とつゝ晩年を宮と収て地種む私を載て遠

ものまでを地を穿ちて箱崎とつゝ

箱崎祭（ハコサキマツリ） 十五日 神社考 筑前國那珂

四季雑歌 上 八月 社 百廿五

名所雑名 八月 社 百廿五

葛城 神、山、葛、葛城、修驗、道者、

山伏、葛、ちまきとらん、葛の葉

花生野 野、寺、菅、若菜、

山路、菅、嘆くる、

高圓（タカマト） 十六夜、栗、

山之辺 寺、菅、嘆くる、

大峯 修驗、初峯、

向 櫻、

蔵原 祖先宮、里、

吾妻野 野、鹿、

象山（キサヤマ） 子ある、花、鹿、

猿沢 采女、玉藻、女ある、

三笠屋、嘆く、紅葉、子ある、

神南備（カミナビ）

葉（ハ）

初春初掛と同じ

薄荷（ハクカ）

和漢三才圖會 茎葉苗、莱ともに香気あり、本綱曰二月宿根より苗を生ず清明の節に至れば苗紙分つ許あり莖方にして色紫赤葉相對して初め形長しといえども頭圓し長ずるに及んでは尖る

花紫（ハナムラサキ）

花壇 大和地方多く藝妻籠を下地として苗のごとき一尺以來葉に斑落金の參差して小三又俗に手掛獨活に似たり夏の間一二度淡紫色の花を開く

濱木綿の花（ハマユフ）

大和本草 和漢三才圖會 海山松樹の陰處に狀松葉に似て小く初生より今にいたるまで肉厚く細き刻ありて肉汁赤黄を帯ぶ秋の初に出ツ葉ちがいにして味甘く北葉より先に出つ故に初葉と名づく

針蕈（ハリタケ）

同上 菌草に似て微あり長さ三寸ばかりにして所々毛を生ず

一以上 大和國

高安 里、寺、蔭衣、

東條、

一以上 河内國

住吉 摂ヶ原、姫小松、汐干、潮、

一以上 摂津國

三島江 芦、菅、すの籠、

蓑、

姫島 汐風、小松、

高濱 松、蔭の毛衣、

宮川 猪籠、雀の杉村、

雨後、中ふるる、

山、宮、茅倉舟、

慶會 五十鈴川、神垣、

いつきの宮、

大淀 浦、須、姫、焼、

白鳫（ハクガン）

全体白くして翅頭黒く嘴と脚赤し 元禄秋白雁先來て雁

金あまたゝび次ぎの雁又ことを須て違し 元禄秋白雁先來て雁

初鰹（ハツカツヲ）

和漢三才圖會 陸奥の産を上品とす 相模これに次ぐ 土佐これに次ぐ 紀州これに次ぐ 凡そ鰹は夏月に至れば則ち北海より南海に下る 故に四月を以て初鰹とす 五月を以て麥鰹とす 六月を以て茄子鰹とす 七月を以て戻り鰹とす 其の味麥鰹を以て最とす 初鰹これに次ぐ 茄子鰹これに次ぐ 戻り鰹これに次ぐ

鮞（バラコ）

魦の子ニ同上 ちりこに同じ

濁酒（ニゴリザケ）

十五日 河内國長野山護國寺地藏院の縁起に云ふ當社は人皇十五代應神天皇の御陵の北方の玉石の清結内より湧りくて三韓征伐の從軍の兵士飲て陣中の渇を醫し凱陣の後帝の御子仁徳帝の皇子に奉る豊年矢の字を守ごとく

酸い汁（スイシル）

酸い汁津の酒とおもわれる 毛呂美今俗濁酒と云

蕎田祭（ソバタマツリ）

十五日 河内國長野

名所旧跡 八月 紀伊 百五十六

四季生活歳時記新春之部 利用

一以上 伊勢國

八ツ橋

杜若、橋ま、

一 三河國

庵原

松、浦見潟、三保の仲洗、

一 駿河國

甲斐根

中巻の中山、末の契、杜人、雪、

一 甲斐國

繰倉

鞍ケ嶺、宮柱、星月夜、

大磯

虎が涙、

八重山

園、新意、

足柄

冥、作の下道、浮雲原、

一 相撲國

國落付の國豪ものを神祖多しとて其社い
ちじるきを納めまするの無庙にして八幡宮の根源成就ほさ
舞樂あり 說生会の當社をおもさよし

菩薩祭

八月十五日ニ〇神祇ニ

廿二日、即前國長柄ニ於て来船人船神を祭る八月九
二日あるまち菩薩祭 和漢三才圖會 舟の神を媽祖

娘々ともふ俗あるを舟菩薩ともふ唐船
も祭りて往来船の神ともあり

穂芒

花芒、

屈花、芒の穂を尾花ともニ穂をふたつなる形獣の尾
に似ふり故ふ名くまた花ともいふ

牡丹の根分

和漢三才圖會 夏月川の水をとろ
陰し乾し古き畑の土と細き

畫眉鳥

同上 俗頬白ともあり 狀つぐるまち

武藏野

一 武藏國

石山

寺、秋の月、源氏の宮、夕ぐれの鐘、水、

走井

冥、清水、蛍火、

逢坂

社、一ツ松、蝉の聲

唐崎

山、川、綱代、ふな鮓、水鳥、
山、三尾、鹿、雪、夕立、硯、滝、

高島

宿、鮓、

守山

一以上 近江國

田上

一 下総國

海上

冨、麦蒔引、かしまる、

赤貝

入

周令 神秋月雷始收蟄虫坏戸

貝岡八幡祭

名所記 江戸城内源川ともふ
る誘鯛を岡と同しともふ神体を

富

蛇穴

豊浦祭

四季 長門國豊浦郡忌宮ともふる神社多しとて其社い
ちじるきを納めまするの無庙にして八幡宮の根源成就ほさ
舞樂あり 說生会の當社をおもさよし

菩薩祭

八月十五日ニ〇神祇ニ

廿二日、即前國長柄ニ於て来船人船神を祭る八月九
二日あるまち菩薩祭 和漢三才圖會 舟の神を媽祖

娘々ともふ俗あるを舟菩薩ともふ唐船
も祭りて往来船の神ともあり

穂芒

花芒、

屈花、芒の穂を尾花ともニ穂をふたつなる形獣の尾
に似ふり故ふ名くまた花ともいふ

牡丹の根分

和漢三才圖會 夏月川の水をとろ
陰し乾し古き畑の土と細き

畫眉鳥

同上 俗頬白ともあり 狀つぐるまち

武藏野

一 武藏國

石山

寺、秋の月、源氏の宮、夕ぐれの鐘、水、

走井

冥、清水、蛍火、

逢坂

社、一ツ松、蝉の聲

唐崎

山、川、綱代、ふな鮓、水鳥、
山、三尾、鹿、雪、夕立、硯、滝、

高島

宿、鮓、

守山

一以上 近江國

田上

一 下総國

海上

冨、麦蒔引、かしまる、

赤貝

入

周令 神秋月雷始收蟄虫坏戸

貝岡八幡祭

名所記 江戸城内源川ともふ
る誘鯛を岡と同しともふ神体を

富

蛇穴

豊浦祭

厚朴 ほゝそ、薄、
開ク實、朴ノ油迄上ル書ハ此ニ出ス先帝ノ御諱月

菅の原 菅木、菅、伏家
ニ上ル書ニ出ス

更科 月、檜衣、映杯ニ
トリカフト

一以上 信濃國

烏頭 藏瀬曰附子其苗ニ似テ三四尺莖四稜ヲ作リ葉艾ニ似テ冬花紫黎色穂ヲ作リ子實

利根川 石多シ、

一 上野國

日光 小崗、嶺、

一 下野國

武隈 松、

松嶋 塩竈、名所、

塩竈 雪、霰雨、八十嶋、松島ヲ、窟、松ノ下、荻、庵、野守ノ居、狩人、

宮城野

黄蜀葵 時珍曰二月種ヲ下シ或ハ宿ヲ根土ヲ取リテ生ヲ去テ葉ヲ採リ長シ花ヲ作ル大サ蜂ノ如シ形多色黎黄

木賊刈 禹錫曰四月苗ヲ採ル○本邦秋月苗ヲ採ル時珍曰本草ニ

胡黄連 千振、和漢三才圖會 苗ノ高サ五六寸一根數莖ヲ叢生ス似ク小ク七月

蘆 時珍曰二月種ヲ下シ或ハ宿ヲ根土ヲ取リテ生ヲ去テ葉ヲ採リ長シ花ヲ作ル大サ蜂ノ如シ形多色黎黄

烏頭 藏瀬曰附子其苗ニ似テ三四尺莖四稜ヲ作リ葉艾ニ似テ冬花紫黎色穂ヲ作リ子實

利根川 石多シ、

日光 小崗、嶺、

武隈 松、

松嶋 塩竈、名所、

塩竈 雪、霰雨、八十嶋、松島ヲ、窟、松ノ下、荻、庵、野守ノ居、狩人、

宮城野

一以上 陸中國

象潟 縞葦、雲間鶴、

一 肥後國

白山 雪ノ下葉、
葦ノ如クニシ、實蘆、古銭切、

篠原

一以上 加賀國

岩代 神、縞ル松、子日遊、

神名備 汐風、藻ノ夜曳、月ノ光、

吹上 社、松、每人、
尸具、

一以上 紀伊國

松山 浪ノ寄ル、浪花院、

一 淡路國

四季 七種藏詩記所載雜

言 ゴン

一 擔ㇷ゚ 國

おせち、尾上節、海老、蕎、

箱 ハコ

濱 ハマ

非、南部、
なつくし、

朝 アサ

倉 クラ

木丸殿、
天智天皇、

漆 ウルシ

川 カハ

庶人、宿る所、
あまた名あり、

一以上 筑前國

玉 タマ

名 ナ

里の名、和漢山、
橋、かくまた、

一 肥前國

雪 ユキ

島 シマ

破到松、まつしま、

一 壱岐國

五字 ゴジ

松 マツ

浦 ウラ

若狭、一体、

花 ハナ

の

鞠 マリ

大内記由原康富日記 文安五年八月朝日丸部云
花の鞠のごとくその由東河事まるで白き
見及ぶ事のよし聞しめさるゝ間いつまでも見及ぶ子細
をもうぞひとし返答一畢るぬ 海人藻芥 八月朝
日山の花の鞠内を衷仙洞以下令用給良薬云彼鞠調
法落葉鏡鞠に入合之始 後水尾院當時年中行事 八朔の条に云
夕くるの神いそぐ初穂ほくく尾花の鞠ささげ
ものを供ス

白 シロ

粉 コ

の

花 ハナ

和漢三才圖會 白粉草

一以上 筑前國

玉 タマ

名 ナ

里の名、和漢山、
橋、かくまた、

一 肥前國

雪 ユキ

島 シマ

破到松、まつしま、

一 壱岐國

五字 ゴジ

松 マツ

浦 ウラ

若狭、一体、

車 クルマ

前 マヘ

子 コ

和漢三才圖會 蘭頌 圖經 春の初苗を生ず葉地に布く乾の面のめし
葉を黒くその長さ尺余中数莖を抽く長き穂
を作す花の色のめし 陽秋の義経 此者苗或いもをい
を況ん楽まるを実を収く八月之部にせり故実さ

五字 ゴジ

松 マツ

浦 ウラ

若狭、一体、

飛 トビ

生 ウ

山 ヤマ

古城、牧軍塁等、
多角田、意嫁、

秋 アキ

の

山 ヤマ

多角田、意嫁、

蒹 カヤ

の

炎 ホ

覚る、蘆嫁、

瓶 ミカ

原 ハラ

名川、末津辰ヒ、
久遠郡

桔 キキヤウ

の

亟 ヒナ

月、布まらし、
西氏、

晴 ハレ

部 ベ

山 ヤマ

葉を彩ム、恒来、

一以上 山城國

嫩 ワカ

睿 メ

山 ヤマ

古歌川中の備、
花の香もる、

伊 イ

駄 ダ

山 ヤマ

社、橋、紅葉、
峯の雨雲、

石 イシ

土 ツチ

山 ヤマ

鐘の名、在原る、
時雨所、一まとく落、
紅葉、麻、擣、

多 タ

向 ムカフ

山 ヤマ

帝前の岸、
帝前社、

忘 ワスレ

水 ミヅ

四季非器藏時記所乘筆

准べき
まり

落 オチ

穂 ホ

詩經 此に有滞穂伊寡婦之利注云
落ち遺す葉るの意之収成の際を待酒
の未穂あらし〳〵む寡婦これを拾ふく利とする事を得
此事成雑句のつゞく多くの取らざる又稲束
つまるとく残見えざる
列子 拾穂者行ゝ歌ふ

落 オチ

鮎 アユ

渋鮎、和漢三才圖會云
下薬、七八月旨美長
さ尺に近し此魚躰芥子の如き者殿に満ち骨深紋
の文を生ず又の精なるがめし故に鯖鮎ともいふ八九月
海の水学の間に子を生ず後漸漸して流に随ひ下る
死を是を鮎と云下り落るものを待薬を搏つく
ものを捕ふ名つけて下り鮎と
つく九月まで也肉痩て味を劣

初 ハツ

楓 カヘデ

茸 タケ

和漢三才圖會云 おまを喰ふい
ろくに止す

渡 ワタリ

鳥 トリ

此月候る雁国より稍
飛て山林江湖に来る
是を候るとぞ云

九 カ

菅 クワン

大 タイ

臣 ジン

祭 マツリ

雍州府志 京四条
の南綾小路の西洞
院東にある菅山道を備て是菅公の宅地之そ今
菅神の祠あり是菅神降誕の地二ありと社を建て
ごまを祭る 神社啓蒙 或人云此説昔菅家の数之
一夜飛梅の天神とのふい是之なり飛梅の称此地之

○按津名所ニ
同名あり

辰の市

発句の名、
花の民、

辰多川

関路くうる、
椿市、宿を業、

夏箕河（ナツミカハ）

神祇、地、橋、
和の条、

手枕野

白き事、女等の条、
雪うれ、

宮の藪

歌枕、歌ある地、

浦舟山

笹子多、秋浦人聞、
さくら、おもしろし、

若葉、山ざと、雪、
葉、郭公、

浦垣原

一以上 大和國

天の川

宿る、浪、霧、
もみぢの筏、橋、

社、辻占、

酸葉山

一以上 伊勢國

五月山

照射、郭公、
和の条、

湊川

摘む碑、

一の谷

源ぶつくし、
鉄蹴楼、
鐘ノ丹松

西の宮

一以上 按津國

伊勢の海

海藻、和布刈、
海の汐具、浜荻、

神道山（カミミチ）

白外ノ宮、百衣の翁、
浜宮潟川、相の山、

すすきの穂、
代々神楽、宮巡り

生の浦（アフ）

山梨、橘庵、

一以上 伊勢國

田子ノ浦

富士山、赤原、白し、
田の鶴、天の羽衣、

宇津の山

蔦の細道、関部の里、紅葉、夕雲耕ノ

蓋草（カリヤス）

蘋頌曰蓋草ハ葉竹ニ似テ細ク薄シ赤色小ニ荊襄ノ人煮テ食ヲ深ム 和漢三才圖会 多ク越前ヨリ出ヅ漳海処処ニ有ノ物ニシテ按ニ倭ノ蓋草竹ノ葉ニ似テ茎ノ葉ノ江湖大海ノ辺山中ニ多シ

老鶏爪（カラスウリ）

玉章。時珍曰王瓜、一名土瓜、天糸瓜ノ類ニシテ実瓜ニ似テ小ク扁ク土瓜ト名ク瓜雷子ニ似テ熟

屋人（ヤドリ）

屋ノ花香気アリ
人ヲシテ酔シム

多し

江

玉

まで紀ハ色赤シ
実円ク長シ
似タリ故ニ
玉章トモ云

離豆（カキマメ）

本草ヲ考ルニ人家ノ籬垣ニ三月種ヲ下ス蔓延ビ
延ビテ延ビ
墻ニ沿離豆トモ名ク又ノ俗
垣墻豆トモ云豆一粒ヲ植ヘハ五八升ヲ結ブト云
墻ト八升ニ
近シ故ニ

苅萱（カルカヤ）

月令 仲秋月鴻雁来賓ス 〇時珍曰雁ノ状鶩ニ
似テ小ク蒼白ノ二翅ノ尾ノ下モ
ものを咬ク雁トモ大ナルものを鴻トモ蒼キ者を
駕ト名ク雁ニ四徳アルヲ飛トキ序アリテ

菜蒔（ナノ）

時珍曰芥数種有
ル八九月種下ス

桂の花（カツラ）

未屋。南方草木状 江南ノ桂八九月
花サク葉ハ未屋ニ本草綱

菌桂、当桂、二種アリ共ニ葉薄ノ如クニシテ
尖リ狭ク光沢アリ二種ノ文アリテ綿ノ
ごとき花ヲ発ク白色当桂ハ香気ヲ称ス
ノ如クニシテ粗ヲ有ル者ヲ桂トス 〇本

一以上 駿河國

箱根山

実、湖、さんの川原、七湯、

鶴ヶ岡

社、武将の林、

一以上 相模國

戀瀬川

名を遠江、袖の浪

桜川

花の浪、

一以上 常陸國

鳴の湖

月の景、漣、蘆毋、浦士のあるらん、

鏡山

菊の露、松ちゝの緑、

竹生嶋

弁財天の社、八大龍王、

櫻山

一以上 近江國

奥の海

鶴、蟹、千鳥、荒き浜辺、

衣川

弁慶、

十符の浦

磯菜、あさり、菅菰、

安積山

沼、花かつみ、八重さゝ川、

一以上 陸奥國

京の山

少将の雪、ぬる、神、

最上川

弱ち丹、紅葉、黄、紅葉毋、

一以上 羽後國

佛山

郡人、杖杉、うす雪、

有乳山

杜鵑、雪、虫、月、

越の海

汐の満る、蛤、

一以上 越前國

後ろ姿熱き涙を袖に包みて、再び配所に赴き給ふ時、芦を啣て結徽を遂く、千賀の浦に着給ふ、其夜稚宮に一夜籠居して、一首の歌を献じ給ふ、其一首に曰、

わが君は千賀の浦わの芦鶴の
ねぐらさだめよ八重の塩風

と詠じ給ふ、此歌を感じ給ひ、鳴入の字一行書、詳来流麦白河葉作の文字を授け給ふ、

櫃鳥（カシトリ）

和漢三才圖會 好く櫃物を積む故俗名とす、又雌雄を云ふ、

雁金

所謂厚金と云ふ、厚き好の一雁字、山谷詩云、

河鹿（カジカ）

雌雄共に好く山川に

菊

秋の花、

花

呉書集 客又曰種特花くさのもの花矩火のごとし、

和漢三才圖會 さるさゝ三四尺人葉苣萵に似く冬枯き裏生ず七月茎を抽ゝ花

龍舌蘭（リュウゼツラン）

大利

煙草花（タバコノハナ）

花鏡 烟花一名洋犯始、初ゝ海外より出、後種を漳泉に傳ゝ今処ゝに是

蓼の花（タデ）

蓼の

一 越中國

入侍山 侍人、森

一 但馬國

多間冥 天滿屋、祇の別

一 攝津國

和歌の浦 玉津島、芦、田鶴、

一 紀伊國

大和島 天さかる日

一 津國

柱矢倉 泊る處、志貝、

一 攝波國

右の名詞ハ定りなり俗訛するを堂上しよく仁大夫名を出して作例の俚言を出す

穗、和漢三才圖會 二三月播き蔵し秋に至りて穗をなす 調忌比よりさき紅白の數品あるも花穗をなす是を

穗麥 ホムギ 一種 ヒサコ 凡麩の種子とまぐきとのい採收てとらく 是を搗の下に納さ絞り或いさ卵の上に納くあるまを去て乾さ選して溜也 ソラ ヒサコ

とあるの時を取て一蕎へもくあり 種茄子 ソラ スビ

吐珍曰茄中に數の種あるを渡來老を茄子といふ是なり 茸將 ソラ カリ 茸の子將、

糸雅 蘭ハ形蓋に似て 和漢三才圖會 木蘭土蘭石蘭あるも 大根蒔 ソラ コン ソラ

蕪菁大根八月種を下し彼岸の中に生も食もあり 太刀魚 ソラ チ ウオ 吐珍曰鰤魚に似の中に生も食の形ち

物を刮裂藏刀の如し故に號す 勢魚、のる名あるも是に三月を以て多く始て出つ狀甚くして長し 落くして割るに木兵のぬし赤きる刀のぬし細緻白きを脫尾に近き處を短きさ刃あるを肉中に細き刺あるも

札 荔枝 レイ シ 吐珍曰福州荔支、木名苦瓜、ごを瀕ぶとう味甘實、及び葉根似ると

て名を得五月實を下し核を去り蔓を引葉葛裏蔓て蔕蕾のごとくして小さく花ひらく

初老 四十 ソラ 強壽 今

不惑 今

中老 五十 家扶 今

茶壽 今 半白 今

知命 今

耆壽 六十 耳順 今

歸壽 今

還曆 六十一

古稀 七十 極老 今

米字 八十八 升掻 今

國杖 今

四季 非皆我詩記有悪道

五辨椒の形の如し故に名るとき小芳通自ら別ける肉と紅の觜ありて味甘し 含ムべし 南人香食を以て多く肉及び核を去り蔬と煮甘く淡くまた蔓ものも 連雀 レン ジャク 和漢三才圖會 今り処さ有

形雀の大さの如し頭背胸赤く翅黒し黄白の文ありて尾の端黒く記さ尾短くして黒し頂の上さ毛冠あるも脳鎮の辺も黒く末さ林さ掃も翅を ふるし形美しきを以て人こぞて飼ふ或ハ籠を銅ふ或ハ

尾を截きて翁ぶめし黒孔雀の形勢さ似くろ個し春好うぶ比伊、比伊ともつぶめし蓋綿翰と字ほ者ごー物昊あり 蕎麥の花 ソバ 吐珍曰蕎麥萱語一名荍麥萱語

く麩然ドして長〜易〜折こ磨く麦のごとくまた蔓さ蕎くろこれ比故くろふ麦こ名を同しうすれこ古秋の前後種を下し八九月前り收む淮南も有を畏る苗の高さ二三尺赤萱綠葉小白の花生くく結實繁く然して実を結ぶ高くことして羊時の実に似り

月 ツキ 物理論 月ハ水の精魄ヨ大ふり月こ酌五常

説文 月ハ日の照も処すりまぞ故こ哉生明ことふ朏ハ日の敵ふ事すり生も故こ又哉生魄ことふ日こ當るときハ光

耄壽 九十	期願 百歳					
○追善之称						
初七忌 初七日	新頭 仝					
以芳 二七日	到彼 仝					
洒水 三七日	何經 仝					
光善 仝						
暗命 四七日	阿經 仝					
延芳 仝						
法明 五七日	小欽 仝					
室明 仝						
檀弘 六七日	前至 仝					
大欽 七七日	休新 仝					

大熱雲蔽月霜侵入蔵與侵倶害酷秋之於時後夏
於天道寒暑均取月數則蟾兎回況埃塩不流大空
悠々蝉娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之
凉神気與之清冷 名月 湖東居士 去東云三
十五年如おしまくら名月といくりそのうちつまも乃
疎 月の異名 月の雫 月の雫 月の異名
疎冷神気與之清冷 名月 湖東居士 去東云三
十五年如おしまくら名月といくりそのうちつまも乃
陳冷悠々蝉娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之
悠々蝉娟徘徊博華上浮昇東林入西林肌膚與之
於天道寒暑均取月數則蟾兎回況埃塩不流大空
大熱雲蔽月霜侵入蔵與侵倶害酷秋之於時後夏
月名月の詩序云月之爲酷冬則繁霜大寒夏則蒸雲
月名月の詩序云月之爲酷冬則繁霜大寒夏則蒸雲
先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中
先故実ならい佳名なるべし又明の字と名と通じ
なる名月の詩を作らんとするもの故実を限るべき
にあらず通用まさべし 今宵の月 今日の月 以上十
五夜の月を限りていふことぞ二日まち今宵もさ
やかなる旬中ならさるはいとくのさぐし 芋名月 神
湯漏記 名月湯祝三方と共でるさる盛 三五の夜、
旬中なる 月の異名 月の雫 月の雫 月の異名
杜東坡仲秋詩云 月の桂花和菜、桂男、西陽雑
俎 月中に桂ありとするさ五百丈下に一人ありと書に見を所る
擣劍つく陰乙會を女人桂の景ありと劉仙を学ふ過有
ふく論もさ桂を伐らしむ。桂男ハ景劍をさす 八雫

百期 百ヶ日 幽回 仝
卒哭 仝
小祥 一周忌 追哭 仝
大祥 三回忌 休安 仝
七霜 七回忌 超祥 仝
遠芳 十三回忌 寂語 仝
寂暎 仝
慈明 十七年
閻良 二十五年
清浄 三十三年
圀満 五十年
本然 百年

月の桂ハ光をつふ 月の異名 月の雫 月の異名
月の桂ハ光をつふ 月の異名 月の雫 月の異名
[俚諺] 月の二暈有雨五穀有豊の二暈有風 [物類称呼] 月の暈
[奥儀抄] 名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意
[俚諺] 月の二暈有雨五穀有豊の二暈有風 [物類称呼] 月の暈
[奥儀抄] 名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意
ふく底をるんとの毒蛇ハ名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意
ふく底をるんとの毒蛇ハ名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意
[俚諺] 月の二暈有雨五穀有豊の二暈有風 [物類称呼] 月の暈
[奥儀抄] 名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意
[俚諺] 月の二暈有雨五穀有豊の二暈有風 [物類称呼] 月の暈
[奥儀抄] 名月の夜の空の雲の入虎の口を逃さぐ 歌中一の昇一ハ満入んとするの意

敦賀祭 ツルガマツリ

気比大明神ハ敦賀郡ニ坐ス神ハ敦賀郡ニ坐ス神ハ敦賀郡ニ坐ス

俳諧七部集

春の日

曙そぼんと人くの戸ぼそき
ながめ勝ち樊圃のうらにゆき
汲し毋さはうしろあり
休息おのうちもえかうろく
いく社こおもり雪なう鼓打
初ける休憩かくもろきこと
ろうさの春しきをあそぶ
元禄四八日

春あくや人まねくの行智集 荷兮
揺もる帆馬うあく連 重五
山ふもと月一時ぎ設立く 両相
縫あくのうたにろくあり 李風
去日風さくくきいく酔佛 昌重
雫に仲の岩葛くろく 挑笠
順ナまく汁の帷子銳之 重五
おおく浪笛をいくこく 荷兮

司召 ツカサメシ 教隆卿記 司召の秋の除目あり京官除目と号せ春の除目は県召と号す各拝任の事ありて後ち儀うとくいくりをはまりて四五月に花発きて豊麦をまきつけ秋分屋を収拾して豊麦を刈取る故に豊を社燕ともいふ

月草 ツキクサ 万葉 時珍曰鴨跖草花を採り好て花とす三四月苗

燕帰ル 格物 燕帰ル 秋分に至れば北に向ひ飛去る

鶫 ツグミ 和漢三才図会 俗云嵐草打木及び老鶯の根上に生ず九十月

長き夜 ナガキヨ 盛ん出一根座をなし数十義せを 荷兮
挑もる帆馬うあく連 重五
山ふもと月一時ぎ設立く 両相
縫あくのうたにろくあり 李風
去日風さくくきいく酔佛 昌重
雫に仲の岩葛くろく 挑笠
順ナまく汁の帷子銳之 重五
おおく浪笛をいくこく 荷兮

散 チル 秋分屋を収拾して豊麦を刈取る故に豊を社燕ともいふ

蘡薁蔓 エビカヅラ 和漢三才図会 俗云蔓草打木及び老鶯の根上に生ず九十月

名の木 ナノキ 雑文曰梅もろく根檀朽木のたぐひすべて根を有るものは久しく花を開くと名の木ろくと

文亜のはねーこさ土ありて 李風
雨の雫社角のあき州 両相
秋ごこ一度い雪をおく 荷兮
俄嫁乳をかくも農叫 昌重
雫さふ鏡ろ人の新婦 両相
まねくことのこ神輿うく里 重五
多ふりまき夏の砂ひて 昌重

花さも男の時雪ぬろ 李風
ニ枯もき落そおろに鶏あき 重五
入かく秋日ご櫨いそろ 荷兮
まつかりと妻あくる家連て 李風
かれ燈ごぬづさきー 荷兮
黒髪をろのはめる程ご勢脚し
くもかーもき五位の許立 昌重
松の末ご宝日ろいう性 両相
はーこのぬもえ双時色を 重五
新湖豆腐を誉ごこまる 昌重
今俳さろうに秋情ご 李風
綿蓼生ふ雅を住居振ほて 重五
垂名を椿の名さまる月 荷兮

滑煙草 ナメスキ 和漢三才図会 枝の梢よりはえ大なるもの本すこしく小義生も淡褐色を帯ふ内刻あり香味辛苦乾煙草と称す

中洲酒 ナカスキ 東海道宿の称なり

中稲 ナカテ 和漢三才図会 九八九月 苅収るを中稲と

中枝大 ナカエダ 八月ご種を下し彼岸の中ごを生ず弱長くして蔓の尾の如しを中枝大根と云葉の後肥

根 コン 同上

棕 ソウ 棕櫚を植む故ご俗ふくご棕ふと云形小椰の如くして頂き向く皆反ご黒ご葉の下ご向まり

棕鳥 ソウトリ 和漢三才図会

棕薗 ソウエン 棕櫚多く類の以下股ごまりて倶ご白し蘭のうへ広ご眉深多く額の以下股ごまりて倶ご白し蘭のうへ広ご眉の班ある翅の本微白しごもご軽ご似て嘴く好んで鞠をまもて又小鶫ごる

棕 ソウ 同上 棕の木の上ご生ず形

棕榈 シュロ 事林広記 八幡い雨跡の号後い蜀園字俊ご結ろ多しーお百武天皇東大寺の

傘の内 道行まで○季風 新年 ○新年 ○季風 ○雑 ○神祇 ○釈教 ○恋 ○無常 ○旅 ○述懐 ○山類 ○水辺 ○居所 ○人事 ○動物 ○植物 ○生活 ○夜分 ○時節 ○天象 ○地儀 ○人倫 ○国郡 ○宮室 ○衣裳 ○飲食 ○器用 ○祝 ○仏事 ○神事 ○恋 ○無常 ○旅 ○述懐 ○山類 ○水辺 ○居所 ○人事 ○動物 ○植物 ○生活 ○夜分 ○時節 ○天象 ○地儀 ○人倫 ○国郡 ○宮室 ○衣裳 ○飲食 ○器用 ○祝 ○仏事 ○神事

宇治の茶（ウジノチャ）

山城風土記 鬼道といふ処島明の宮の御宇天皇の御子宇遅の稚郎子親皇の日桥の宮を造り宇治と云 年浪州 三隆齋云鬼道の稚郎子崇神の心を新勅撰 詞書 しく人のあるべくもあらん世を宇治山の秋の花園 まもるべくもあらず思ふ宇治の花園は親皇日桥の宮の花園 梅（ウメ） 和漢三才圖會 葉円くまり微小き鋸歯あるも酸酢の葉に似て小く冬凋まず春葉を生ず五月小白花を開く香気十里に聞ゆ暑南天の花に似て小く子を結ぶ初め青く後十月熟して実紅なり熟も一種白き者あり 吳普本草 梅実酸し 雷公炮炙論 梅実酸し 詩経 摽有梅 其実七兮 求我庶士 迨其吉兮 求我庶士 迨其謂之 韓保昇曰摽落也 七兮七成熟也 庶士衆士也 迨及也 謂会也 士之求己者及此吉会之時而嫁之 毛詩 摽有梅 頃筐塈之 求我庶士 迨其謙之 鄭玄箋云 摽落也 頃筐傾取之器 塈掬也 謙会也 女年二十三十之間嫁時已晩 梅実落盡 在地者少 在樹者多 喩女年已過 在樹者少 在地者多 喩女年尚少 士之求己者少 喩男年已過 士之求己者多 喩男年尚少

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほりく一朝聲のさやかなし 荷号
番茶のまゝ水汲こと 記て 誠人
餅をやくつゝ君が代 旦葉
山もさ花のまゝ折て 旦
さゝやかに酒もてこそ 荷号

追加

九月 每家亭

山々の向ふまでき畑のうつゝき 朝誠人
蝶ちのこりてあるも哀なし 每多
如月や餅喰まぐき重ねりて 雄重
行春のこゑと渡ふ出 蕉露 荷号
歌を書つゝ観音のつゝめしく 旦
月もさぎのつゝまやくなけ 秋里

(春)

昌泉の秋とい考四時代の塔 利重
元日のまのるゝ時競る豆腐し 重五
初雪の遠里半のまきり野 昌圭
なきの妻ほいおくなり妻の原 雨桐
門い松若葉園の雪さはし 每多
暖のまゝ雨降のつゝめしく 秋里

(春)

昌泉の秋とい考四時代の塔 利重
元日のまのるゝ時競る豆腐し 重五
初雪の遠里半のまきり野 昌圭
なきの妻ほいおくなり妻の原 雨桐
門い松若葉園の雪さはし 每多
暖のまゝ雨降のつゝめしく 秋里

(秋)

山々の向ふまでき畑のうつゝき 朝誠人
蝶ちのこりてあるも哀なし 每多
如月や餅喰まぐき重ねりて 雄重
行春のこゑと渡ふ出 蕉露 荷号
歌を書つゝ観音のつゝめしく 旦
月もさぎのつゝまやくなけ 秋里

追加

九月 每家亭

山々の向ふまでき畑のうつゝき 朝誠人
蝶ちのこりてあるも哀なし 每多
如月や餅喰まぐき重ねりて 雄重
行春のこゑと渡ふ出 蕉露 荷号
歌を書つゝ観音のつゝめしく 旦
月もさぎのつゝまやくなけ 秋里

(春)

昌泉の秋とい考四時代の塔 利重
元日のまのるゝ時競る豆腐し 重五
初雪の遠里半のまきり野 昌圭
なきの妻ほいおくなり妻の原 雨桐
門い松若葉園の雪さはし 每多
暖のまゝ雨降のつゝめしく 秋里

(秋)

山々の向ふまでき畑のうつゝき 朝誠人
蝶ちのこりてあるも哀なし 每多
如月や餅喰まぐき重ねりて 雄重
行春のこゑと渡ふ出 蕉露 荷号
歌を書つゝ観音のつゝめしく 旦
月もさぎのつゝまやくなけ 秋里

(秋)

○ 薤 韮、同上 源氏 蜀八打束ねまゝ半束ねあし
一束ねくと 義生も大冬韮のおくして上葉くと元旦し
味徳くく 同 甚し 間引菜 貝割菜、小菜、和漢三才図会
九条大根の類大根八月種を下し 稍長中に菊を
筑紫くまゝ 源氏 大海一まゝ 同 泥深 土民年の貢
三三寸 漸く 落くに二葉を貝割 萩子鳥 同上 四字
未詳 状大き 葉の 少し 全体 厚 皃 胎 後 赤し 相 疾 皃
色 一 く 濃き 屋の下 両端 さ 白 者 二つ その
納まる の法 晩秋 三 縣史 共て 田地 の 立毛 の 実 悪 を 免 と
稿も 皃 を 毛見 と 名 ふ 故 と 稲 未 刈 護
さる 赤立
毛 と 仏
(ふ) 木芙蓉 ホフヨウ 水ふよう 蓉 芙蓉 とも ふ 荷
の の花 を 二 陸 ふ よう の 皃 を 木芙蓉 と も ふ 時珍 曰
附 き 花 は 朝 開 夕 落 る 一 日 の 花 の 如 し 故 に 芙蓉 未蓮 の 名
あり 八九月 始て 開く 故拒霜 と 名く 中 暑 冬 凋 と
友 詩 り 秋 の 半 始 く 花 を 着 花 壮 丹 者 ま 類 も
紅白黄 子 葉 の 者 あり 最 も
寒 を 耐て 落 も 実 を 結 ざ 仏 蒲萄 ブドウ 時珍 曰 葡萄 一 名 山 葡萄
芭 を 生 し 蔓 延 超 十 丈 を 引 三 月 小 花 生 き 緑 を
あ も 黄 白 色 実 連 り 着 く こ 房 の 如 し 七 八 月
熟 も 此 ふ 内
の 二 種 の
(ま) 蒲萄酒 時珍 曰 葡萄酒 を 造 る
者 し 法 き を 酌 設 也
まゝ 陶 然 と し て
酔 を 此 名 の 如 く
銭洗 川 の 流 と 銭 を 洗 ふ 事 を 待 く 近 所 の 貴 賤 此 洗
濯 を 名 の 如 く
(こ) 小望月 モチツキ 十四日の月 をいふ

蓼の穂たてつゝむ人て別ぬ　越人
山畑の菜種刈うす夕日哉　凡兆
奴そつゝ海まで風呂はこぶ　全

夏

かしましその山ざと庇尾の滝　九自
保根ときけば古寺の暑し　李風
筆香ある奴茶の一里塚　越人
暗しさいふ梢の藤一ツ　杜国
茗竹のそらふくまでの藤一ツ　重田
牽牛をまつ中に誓ふ夕涼　丹宝
武蔵野をとゝから
すゝけやもろ〳〵寒の衣川　南春
遠堰の寒い笠ぬぐ
馬ひとをまつまでもつ夕涼　凡兆
夜の月　陸奥
老鶯日影之足常立
夕うらに雞頭のつまれ葉屋哉　越人

駒牽　[季]

駒迎、望月の翌、[江次第]永八年八月十五日、左右馬寮内園忌まり左の勅、

いそのかみ古き都の秋風に
いかでか遠き駒をひくらん

十六日、兵部省、諸国の牧の貢馬を内裏に奏す、[延喜式]に載る所の二十六疋、南殿を出御ありて、[儀式]に載る所の二十六疋、南殿を出御ありて、左右馬寮これを引き渡す、[江次第]に分ち、

仲秋祭　[季]

仲秋上申の日、[年中行事]に出でたり、[江次第]に、八月十日、[年中行事]に、二社祭、[江次第]に、八月十日、

夜ふくとくとうじまめと唱へ

大根新　[季]

十二種を献ずるを新と称す、

定考　[季]

十日、[名目抄]定考と

延喜式例、[公事根源]是いにしへ古位以下の加階をまた人いふの藝能行跡格勤をえらばるゝ策勲を給ふる、

重陽草　[季]

[和漢三才図会]山野処々にて有るさま三尺、茎枝花葉ともに菊に似ふかく小さく七月花を開き黄色の小さき中の実黒くして狼毒に強し故に蒴人牛ともいふ、

菓蕪　[季]

[和漢三才図会]山の蔵木の葉を小さくして似て弱繋と似ふく小さく粒々の数なり、

天中

節句、[拾芥抄]八月朔日の内より以前天中節赤口白舌随節減と書く門戸に押

安濃津祭　[季]

十五日、社説に白伊勢国安濃郡津城の南に八幡一社を置んと欲し伊勢をいろく始めて乃ち宮殿を千歳山の上に造り石清水の神を勧請し降家の霊験を祈るに毎年八月十五日を

等末の穂垣さゝ柄に
すゝきまいまもる中と咲ぬらん　芝支
萱葺の小屋分ちつき花の色　荷考
道祖神の涙さまざま浮葉哉　全
曙のそば葉の動く朝露に
夜川の末を落る木曽路哉　重五
雞冠鳥っと二聲曙の空
とらくへるなく鳴を
六月の汗のそれ〴〵暮るや　誠人

秋

瓢箪の網茅子受さゝらくも　旦菓
垂葉の玉ゆら
垂葉越年むふ夕うら　誠人
屋ぎして文共も墨入もの乗書
雪ありて人を中まもる月見哉　芭蕉
山寺に来つゝおもふ月夜哉　誠人

蜘蛛合　[季]

[和漢三才図会]按の根上に義は中蜘二寸許黒色赤点あり味甘し、

絵行器　[季]

[紀事]京俗八月朔日より家々その乳母その保養所の女子と行器一双を贈るその行器の中に菊の花を盛る、蒸の花いと白き餅と小豆をゝしたる又蒸芥仁を敷あるいは折て行器とともに相贈る、京師の俗今日嘉祝とす、

小雀　[季]

正字未詳、[同上]俗云古加良状山雀と似て小し故に俗ゆく小雀と云、山林に多し頭黒く頬白くして四季絶ず千声清うして多く囀る、

雁来紅　[季]

[和漢三才図会]雁来紅葉似鶏冠而小紅黄紫数種有之、

葵　[季]

[和漢三才図会]葵花紫色、

鶏頭　[季]

[和漢三才図会]鶏頭処々有之、

庭ふく露も雨もや秋の月　野ざら

八重を洩る扉風をうく

眞是芳く新のころ淺し一夜哉　仝

村く雲

古風庵を再興しよろこばん　荷号

黒石坊之雲

秋半と雪を期す招き入て海鼠喰まえ一盃と乞ふ　仝

新酢ばまえ一盃と乞ふ　荷号

(冬)

るいの名も斗りの夕日の村住哉　杜國

芭蕉翁を富しく侍りて

霧深き雜木ばやしや如行

雪のそら葬の子のすはきうま　昌碧

つるむさへなくなる雪の翌　仝

行燈の油もそこにき雪の夜　雜人

芭蕉翁を送りてうき侍

あの秋の咲ふくる名殘哉　杜國

以くく栗也　**藍の花**　藥蓼に似くく七八月白紅花咲く　**蘆の花**　說文曰其花風を遇て吹揚るいと

八重を洩る扉風をうく

のむし地を棄るいと繁のおそし　**茴堀**

時珍曰蔬草東方に在ことおし西方の多こをうる則

茴草を以くく茴と名十二月苗を生し蔓延ことと

數尺七八月花咲實結ぶ　**通草**　蘇頌曰通草の實長さ

三四寸核黑くく肉白し

味し甘美二南人謂くく藤蔓子と名或ハ

烏蔓子とも名く七月をとるくくまき紙とる　**蚊**

(冬)

雜誹雜談　八月の蚊蚋肉を破る

とくく世に語り傳ふ　**蚊遣火**　和名阿止里比

閨之

芭蕉翁を訪ふ事二山杜に隱む茶時を雜談して

寺院の裏林と歩るまに竹子雜をあつて天を蔽

ふ秋雀と似くく大くく莖太く頭頂灰蒼にして背黄

こと赤を帶ふ黒き點あり　**日本紀**　天武天皇七年

揭子鳥　天を蔽ひ　**鶉**　和名阿米

西鳥より左旋ふ　**江鮭**　深邑湖の名

産二大きくこの三尺ゆきハ尺に滿ざるあり江雜ていハ魯

江湖の鮭二河雜より猶多し秋八月雨の河より

以くく栗也　**藍の花**　藥蓼に似くく七八月白紅花咲く開く　**蘆の**

花　說文曰其花風を遇て吹揚るいと

のむし地を棄るいと繁のおそし　**茴堀**

時珍曰蔬草東方に在ことおし西方の多こをうる則

茴草を以くく茴と名十二月苗を生し蔓延ことと

數尺七八月花咲實結ぶ　**通草**　蘇頌曰通草の實長さ

三四寸核黑くく肉白し

味し甘美二南人謂くく藤蔓子と名或ハ

烏蔓子とも名く七月をとるくくまき紙とる　**蚊**

雜誹雜談　八月の蚊蚋肉を破る

とくく世に語り傳ふ　**蚊遣火**　和名阿止里比

閨之

芭蕉翁を訪ふ事二山杜に隱む茶時を雜談して

寺院の裏林と歩るまに竹子雜をあつて天を蔽

ふ秋雀と似くく大くく莖太く頭頂灰蒼にして背黄

こと赤を帶ふ黒き點あり　**日本紀**　天武天皇七年

揭子鳥　天を蔽ひ　**鶉**　和名阿米

西鳥より左旋ふ　**江鮭**　深邑湖の名

産二大きくこの三尺ゆきハ尺に滿ざるあり江雜ていハ魯

江湖の鮭二河雜より猶多し秋八月雨の河より

貞享三丙寅年仲秋下浣

冬の日

笠ハ長途の雨をおそれ衣ハ

うき旅しくのあらしさまぬ

俄つくしまるまゐ人の手まえ

ぬきなにもおほくなるむらし

狂句のすゝ士此國さたなし

事をみ國おまゐ山下侍る

狂句おもしろの臭ハ林毒似なり芭蕉

翁をはじめとして此座の諸士ハ皆蕉

門の上手ゆゑ此集ハ世に行るゝ事

おもひのまゝ永く渡ぬつくせまゐ

かゝらの卷を一覽ハ一句の發句

ともおもはれぬほどし一句の

發句ともおもはれぬほどし

文字ハ数もまくまきまゐ句まゐ

つゝ通ひ下五文字ハ秋の夕ゝいふ句すゝ有

秋のゆふくといふねいとくそこ侍る

(俳諧)

秋乃

蓼　(俳諧同巻)　山家菜　問ふ春の蓼ゝ對して

蓼ハ秋くん紅ふ作ゆふしくのう尤秋

の蓼ハ春の夕ゝ蓼ゝ二蓼の蓼ハ蓼の春に侍る

ゆへ也曰蓼の蓼ゝ蓼ゝ又一片ゝ限ふくうゝ

堺天神祭　(泉州府志)　堺事蓼ゝ天神の

像ハ菅神太宰府ゝ在せし

日自ら作りゝふ七體の像の内ゝとゝふ長德二年

或ハ延喜年中二月海濱ゝ流れ寄ゝとゝふ

此說ハ安置も或ハふ菅垣内の鄉濱村ゝ有

右ゝ埋ゝ天神ゝ称ゝ中世北の庄ゝ遷ゝ

例祭六月十二日ゝ又神ふし八月二日ゝ秋

神樂ゝ毎月參詣ゝし神樂夫ゝ役所ゝ

西院祭　春日の神社ハ洛西葛野郡ゝ有

四季通の花ちる四月許ゝ西院

きくの花そこいらすもゝくれ初る 芭蕉
影法の地ろきさくらを焼て 芭蕉
何ゝしいけんさだしむら家杜園
田中ある寺ほんの松ばかるゝ 荷号
露さふ〳〵きく人いらんとも 吐句
夢ら盛を授さ海もる月くれし 杜園
二の花と近もの来の寒うきく 吐句
蝶ゝむくさ〳〵ことゝも寒も 芭蕉
多勿さ遠新のおほろある 重五
今そきらくの夫を越ら声 荷号
ぬきくの訳会の赤のゆゝおまて 芭蕉
ちまし宗祇の名を甘一ゑ 杜園
笠ぬきて号羽ゝもぬる歩ゆる 荷号
みくるまいせくさくら唐崖 吐句
ちらくと破ゝしいくの暑うき何 杜園
白絨いえれもの要うくる 重五
吐ゝきの遣ゝもくけて部ゝ 吐句
計ゝの一斗ゝをつゝまゝ 芭蕉
日東の季向う坊ゝ月をそく 重五
ゆゝさ雑をさゝも製鍋ゝち 荷号
うしの級ゝうゝ吐ゝきの名ゝれ 芭蕉

花 [木草]

三七番苗をし夏ゝさ二四天象菊艾
ゝ似ゝ動く凉く皮失ゝ何ゝ文秋夢花ゝ
村のあゝ林村の中ゝあり 例祭八月廿八日神楽二
昔ゝあり一ツハ往手の神楽ゝ〇俗ゝ手の社ハ何村の氏ゝ
椢櫚 [草類合壁]

櫚大くゝて蕊のゝし毒色ゝて
黒班あるゝ中膚の掌のゝし葵膜有
てゝ雪のゝきゝのゝり濃ゝ岳賦ゝ云椢ハ天下の奇
木ゝ九列の名果千房垂鎮ゝ子一のゝし
烏瓜 [和漢三才図会]

今ゝ云三光ゝる延年ゝ云ゝあり 雑
北野祭 [年中行事]

四日

二十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼ゝ
ゝ官奏ゝあり後冷泉帝永承元年八月四日
発ゝ宮ゝあらる雑水祀ゝ云此祭ゝ美華ゝして神
輿ゝ至ゝ夜ゝ還ゝ御ゝ路ゝ間ゝ灯ゝ
拿町の絶ゝ篝ゝ焼ゝ供奉の車綾羅の袂ゝ連
らゝ管絃ゝ音ゝ雲井ゝ響ゝ誠ゝ当社の古記ゝ有

礎 [キソ]

四手打。綾巻。 [字林] 直ゝ春ゝ稿ゝ云ゝ古人
衣打。ところ打。衣ゝ砧ゝ両女お斜ゝて一
杵をとる米ゝ舂ゝ如ゝし絞ゝ今男ゝ卧杵ゝ
作ゝ製ゝ也ゝ春ゝ搗ゝ衣ゝ取ゝ彼妻ゝ衣ゝ
巻ゝ末ゝ其ゝ
打ゝ据ゝ名ゝ
銀杏の實 [ギンアンノミ]

時珍曰銀杏ゝ葉ゝ掌ゝ脈ゝ葵ゝ似ゝ
つゝ宋ゝ物始ゝ貢ゝ銀杏ゝ呼ゝ小杏ゝ
似ゝ核ゝ厚ゝ
園ゝ
時珍曰ゝ
緑色ゝ
啄木鳥 [キツツキ]

一名てらつゝき。
菊戴鳥 [キクイタヾキ]

[和漢三才図会] 北目白

月まあそうま　杜甫　明皇人　杜園
張何のかるい　婚礼　春　五
まつくとの　地名　切町　荷号
節季の世まつ　晩のいそがしく　杜園
うつろいつくらの　春そまるゆき　芭蕉
掛乞ひ　誹諧よ　春　狐しくく　芭蕉
篠ふくく　晴い　梢の雪さびし　芭蕉
三階　あくんふ　雁の　せきと人　重五
芭まくく　美濃　おくる雪を　芭蕉
詠そめくのさしも七十　杜園
春あの雪　温雪と金うち　重五
斗くつの傘の下　誉もさび　荷号
運池　雪の子越ふタすくる　杜園
寄そまつくら　流やうすき　芭蕉
月こかくる　庭鳥の　数の　荷号
窓を風まぬ　俳諧をまつ　芭蕉
秋隣の　虚そまつきく　芭蕉
藤の実つくふ　春ほつそる　重五
枝より　凩を　重五
初雪　雪　芭蕉
二三尺　ふくつぎと　似くく　杜長　芭蕉を
出し　小さ花つく　紅葉　重五　凩くの
如し　故　荷号

め　眼白鳥（メジロ）

和漢三才図会　頭背　翅尾　黄青うく　鮮明　人倫　食用
黄青色　眼の　睫　白圏　ありくて　胸白くして　腹黄を　常
ふ　後白し　性よく　群
をなす　毎　梢を好む

み　三村（ミムラ）松（マツリ）　三村祭　水村を作る

衆　協の　荘　協定の下条　実口村　三河里　俗吉田祇　祭
る　神体　弁　諾尊の　御子　素盞嗚尊　長枝　後生玉
牛頭天王を　合せ　祭る　俗　三村大明神　と称　創祭　八
月一日二日　あるを　三村祭　又大祭　祭るも　立大念仏　ま
の練守

三津八幡祭（ミツハチマンマツリ）　大阪三津の寺町　ありまた三津　といふ　津

勢津　誹諧俳　三津人　荷行　春　流を　遣て三津
まつりの　後神　流　ありて　八幡　まつ　勧請　春　年八
月十五日　祭礼　なり　人月を　祝ふ　祭也

索引の花（ハナ）　索引　ありまさき

二三尺　ふくつぎと　似くく　杜長　藤を
出し　小さ花つく　紅葉　重五　凩くの
如し　故

ら　白鬚宝帳（シラヒゲカイチヤウ）　白鬚宝帳　近江打　風　名くく

秀処（シウショ）　社誌　比良明神と　同体　二　普く　衆生　済ふ　元禄中
より　止む　多く　只　内陣　を　弁し　宮殿　を　拝ずる　ものと　云

秋社（シウシヤ）　月令　広義　秋社とも　註　云　社日　秋の後五戊の日を
秋社　祀らしむ　農を　祈る

死活祭（シクワツサイ）　此祭　京　都　稚狭　三
条の　南　福建の　神社　にて　行ふ　雑例　府志　昔　刑部省　処
遠　流　ものも　微を　断して　行ふ　故に　刑死
人の　名を　此社を　建て　祭祀を　修せる　毎　年八月　神事の　ありまを　死活祭と　云

鬼の志ま（シマ）　附　鬼の志ま　草子を　読ふ　補中　越　鬼の志ま　附と　云
別の　草の　名　あり　此　志ま　草　いと　毒　あれ
ば　悪しき　人　志ま　草　料　にて　細　つけ　れば　更
に　やまる　こと　なし　志ま　草　いふ　名　は　草　の　事　にて
鬼の　志ま　草　と　草　こそ　ありと　いふ　こと　なし　諸
の　鬼　ども　此　志ま　草　を　ふり　かけ　ふり　かけ　すれ　ども　ふり
かけ　ふり　かけ　すれ　ども　不順　凶　日　汚　穢　之　所　云　ふ　ことは　あれ　ども　調　之　凶　の　字　を　よめる　も　後　撰　拾　遺　普　人　の　親　子　を　二　人

五形 葦のすゑ什六文杜國 芭蕉
すゑしらず暁雲巷をりとも 曲水
まの昼のまの初冬白らし 曲水
黒猪や矢刻の腹の長き尓 杜國
庄屋のすゝをよそに見る 荷号
捨し子に蝶新まるのあつかん 曲水
時日をそくゝ刀妻る年 重五
雪の狂言の笠めつらしき 荷号
聴こまる猶々庄納をとゝく 芭蕉
呼こゑ粉を搗飯あるさん 重五
茶子のすゝくゝ名を盗む 杜國
三月月のまいりゝゝ籠のあつ 芭蕉
鉄瓶すゝ琴ゝもの 曲水
高ゝるを音して七を残す 杜國
声よき名俳諧を備つる 荷号
彩うすき行燈々ゝ紀伊 曲水
やひうもゝ帯引 重五
ゝ見ゝすゝひ壱のうけ入 荷号
ゝ壱ゝ見ゝ壱ゝ 芭蕉

なゝはけ落ゝ柳ゝ洗ゝ
家かすゝけなゝゝ

座妻のまのうま書ゝこ黒かゝめ 重五
ゝゝの粧ひを鏡摩ゝゝ 荷号
若緑ゝ勇の雲ゝゝゝ 杜國
着ゝる家の月ゝ午ゝゝ 曲水
かゝゝ四郎の日雛ゝ酒ゝまゝ日 芭蕉
茅織ゝる笠を市ゝ抜ゝる 羽笠
砂川や於ゝ森ゝ代ゝゝ徽堤 荷号
いゝゝゝゝの賀ゝゝゝ 重五
ゝゝゝゝゝゝ巻ゝ 曲水
うきいゝゝゝゝ琴の 芭蕉
抜ゝゝゝ巨燵ゝゝゝ 羽笠
門守ゝ義ゝ子ゝて ゝ 重五
血刀ゝゝ月のゝゝゝ午 荷号
雫ゝりて本ゝの鐘ゝゝ 杜國
ゝ付ゝ納豆ゝゝゝ 曲水
すゝゝ追掃ゝ鷺ゝゝゝ 芭蕉
ゝゝのいゝゝゝ歌ゝゝ 羽笠
白芙蓉ゝ風ゝ 荷号

山の下ゝ藤ゝゝ 曲水
此草ゝ平芭ゝ阜温の地ゝゝ故名ゝ 猪茸 革茸
さゝゝゝ猫ゝゝ
のゝゝゝ穴ゝ
新撰三才図会 猪茸 按ずるに猪の形ち穴ありて棲む故に名く
山猪三才図会に出ず 中華にて仮て大に類多く肉頬白くして
肥ゝ猪ゝ頬ゝゝゝ 猪茸 温地を生ず故に温地茸と名く大きさ

宣吉かしきく銀を綴る重五
八十年を三つ見る童哉もて 此五
ありくちそもむ七夕の洗ひ 杜國
西南と棚の夜のつゆむとき 羽笠
芸の如くにとまりつ 書芭蕉
猶の家こ浪もある女見くくる重五
初雁と栗を洗ふ日のうき 荷号
すやりまくく扱子かさる二月こ 杜國
つくくを向るる井芸の重 此五
宿の日社旦を船治の急起て 芭蕉
宝かくいきき南京の地 羽笠
いろもきて誰も初風の像 荷号
此くんのきくもよ芦の根重五
謝まくるはつき雷こうしにより 此五
鶏衣の下に寝ん寸くる乗り 芭蕉
ふおくくまくく蓑中おりて 羽笠
此くき風夢を青るむく雨 此五

同宿雛垂

雪月や鶴のイくく七くあくく 荷号

名薩或い沙角を綾しおき猿薩とくく自ら湖中を生を兼実くをふこを用硬して人を刺を箱
重くある者青くく老くるの黒し 時珍曰茵芝
蒸して食ふこを味甘美あるを 稔 時珍曰茵芝
月芒を軸んでく細条 黍の如し八九
さくく栗の様な如し 甑簞 百生、千生。和漢三才
圖會 苦甑俗云甑蓼 蓋盧と一類こて別種ある者
吸汁し葉花夕ふあと似くく 蘇の味含ふこを悟を細孫ふ
るものをけを 平茸 同上 山蘇の濕地こ生を苦
今多くを作る 練のあるを生を
鴻 同上 重湯状こ製して大ある背頸倶こ灰
黒斑深黒こを尾本白くく赤黒しこを肉の味深
さおくくこ指もすくくし臭 鵜 同上 状ち鷺鷥
重湯の肉こ似くくこと有 くく似くく尾長く
蒼灰色頸上の毛冠起服の辺こ微赤黒を帯ふ胎
灰青後の下白くく脩くく黒き斑あり背前刻く栗こ
形をふるを好くく 日雀 同上 状四十雀こ似て
くくる本の実を含ふ 小くく頸脊赤黒頬の
辺より目黒お交る後白く 河原鶸。同上 俗云
胡麻雀くくを銀深あくく 鶺 河原鶸。
比和止里雀

又この郭も社あすきこくり 芭蕉
雛鶺山家の体を来の景陸 重五
記きつる年の候こ魔寒 杜國
ふるもあき具足こ月のうもと 羽笠
砌こふる重葉切下 いくく 砌 玉
秋のもう様の道おいてるた 芭蕉
潮くこふるて来二見ふる事 荷号
商こして様のふの為るあして 杜國
葉ふる道をそもる頭の色重五
雛近こ鳥帽子の女こ中 砌 玉
屋さまる仏ふるの落衣 羽笠
友添き山藤こさくくまを 荷号
森るもとのふ手の景西も 芭蕉
江を近くく猶乗屋と世を移て重五
家月雪よ月いもりれある 杜國
語衣留こ海景をふる掛 羽笠
鶏喪ふる況本瓜の山所 砌 玉
骨をまこふまた洞ふるふ 芭蕉
ふこふの養をふふもの先 荷号
況のふこを屋ふ留を拾ひいくく 杜國

七部集　八月廿日、九月　日
七番日記　百七十三

八月之部終

四季　日記　第五　十

八月癸卯歌莫服当
及び儀式を改め定ム

⑦ 釋奠（セキテン）　献ル酢　続日本紀　聖武天皇天平二十八年

⑧ 胡芋（ズイ）　芋の異名云　大和本草　唐
のもの芋の者くく含し
生ずる酢をふいくてふらも

⑨ 鱸釣（スヾキ）　釣鱸。大和本草

鱸大恩あるもの二三尺二月以後七月迄取も暑
月指ふし味佳し八月より秋ふる夜釣さし
能とし脳とまる況腸の味しくモワタとふ為有
ふあるをせイゴとのふ私石あるふし中華私江
所いて大サ四寸の者のせイゴのふしくふ河所味充
すし長月の佳為一海と河との間こあるを味とし
海人あまを鍋或い膾くく突とる

八月之部終

…ものみえそめ…五…秋分、仲秋、葉月、壮月、桂月、雁月、秋風月、月見月、…

八月　南呂律　白露節

立秋節、氷川祭、小神祭、宝満祭、大元祭、甲山祭、處暑中　鹿島香取祭、多賀祭、鎌倉祭

九月

㊇ 生玉祭　生玉の社は摂津の國東成郡天王寺の辺…

…ある生玉神一座天王の生玉の字六例祭九月九日神輿一基巡行須磨馬西より社内を十場あまりを内南坊を別当　岩倉祭　八所明神の社は浦の山上岩村の地也岩倉と称す

…両脇の四隅を少々宛そぎ…

…弁千を…

山…

…

…

の如きあり乾坤の外
ありとをもふくそこをいふくその日は内外あるまじ

文禄三六月　越智越人

花見

水のまに〳〵汁も鱠も桜哉　芭蕉翁　同
両日のうた筆にまかせて　珍頃
旅人の風おもひやる書そへて　曲水
はきも習ふ処太刀の鞘哉　芭蕉翁
月待て僧の内裏の司哉　頃
親白つゝみ初うち初やさ　水
鍬立てこゝに霊前と秋の来ぬ　芭蕉翁
ふるさと酒くさき旅寝の雨　頃
入まさの源頼の滝湯の名る書　水

文祝隆朗あり五時を治まる事を
ありうく鳥妻を治まてくをきゝ汲　樫　ほそくせめ　船に似るく
花ある栗のめし空八雑よりおしく丈二木硬くして
ふつくく舟の櫂につくる実を以くく秋とまるまじ
色不変松　イロカヘヌマツ　荀卿曰隆冬を経くく凋まじ雪を翳を学りて変せず
手負を得とゝ　イワレンゲ　岩蓮花　大和本草　岩蓮花
俗俗のあるこゝを草
の彩巻のめうを陰も蓮花の実ろめし　イワシ
実名に或いふ併甲羊是ありと非あり　鰯の
黒漬　ソロツケ　鯖の妻こゝ呼ぬ鯛と称まこゝ製両鰯
を切割て醃こゝ溺の性猶の中こ黒汁
ありこゝ塩水ぬしてこゝ恩
黒しこゝ鉄黒漬こゝ云　海鼠廻シ　イカリ　記事
此月九日中児中尾を以くく海懐の売こゝ学こゝ新を
繕うして売のうちへ入ま懐こゝ法あ尾こゝ細き縄
に寒き西こゝ〇尾務有こゝ第しこゝの新く
こゝ新こゝ非中の料国こゝ以こゝ之こゝ新こゝ
波利女　ハリジョ　波利女の社八浦陽こゝ近宝町の
西こゝあこゝ社こゝ乱昔こゝ

中こゝ以より来自せるとき　薩州府志　鹿島の社元針
女を祭る時ゝして実八弁ち天あり針女と
鹿島と和訓相　ハンショウミ　榛　時珍曰榛栗低くふこして
近し誤伝るあり　前のあしこのまゝ花ふくく樫
のこゝ花のあし実を
以くく秋事こゝ注　ハンソ　杵　しまあるそうきさ
記事八三丈実八新こゝ似くく秋
手事事　祀の事こゝ祝　頃
酒くこゝ汁こゝ恵こゝ　水
双こゝ終国を駆く近事こゝ　薗
祝の事件こゝ念俳　頃

中ゝさ出ると答ふ 水 菊
雨名の里のあちこちのもみぢ
好きまく いく夜露の行衛 順
月ぬくさ吹かくる風 水
花をも託ねうち招くらん 菊
雁の声ある 順
一声の跡をむすびとゞめ 水
遥なの薬いつ飯多くの 菊
花さけい吉野吹くるを夕迎 順
散てさ雪の山中 水

○

いろくの色もあるうへ 恵の字 秋 順
すまきまくる 蝶の変ぬき 菊
協協の社ちこにつらをし 歩 通
かるみとる処峠越 順
此森の実すきくる夕 雪 順
散てあくれて月を物さく 水

(ほ) 鬼目 ロシ ヒヨトリ 野上戸 [すゝくさぬれ] 人家の垣根に自然とはえ出るもの

亀丹の如くすゝて赤青細葉縮のごし 水 菊
とくつゝまを結ふ一果として実り小正しく紅二作物也
洲の山谷に多くはえ出るもの

(ほ) 菩提子 ボダイシ [枝量数珠功徳源] 諸院寺庵及び仏事を多通
夏花咲小白色を一ツ宛つけ一ツの実に核一ツ有て厚く大二又二ツの葉ある木蓮に似たり 秋実を結ぶ
実ち嫩ある細殺を出しそまゝ売物実を結ぶ
実ち硬くして色赤く香よく 雪
[ぬれ] 普通の果実菜仁寺あり 千光國師宋より此種
子を持来り植初し故に番種数恩寺に植らるゝ

(ち) 重陽 チヤウヤウ [酒確類 書重陽]

(ち) 椇の実 ネ 種 項

秋の末実をも結ぶ 通
さてそうまでは笑ふ 順
うつりまの羽織を首 雪
小ぶくろし市のうく 順
鏡餅の小さくうる川の端 通
[すゝくさぬれ] 仏事中七拝む三月 順
持くし葉も実まで 雪
庄屋の門松犬もおもき 順
越後のあさがきの 通
落いちよりよ月も 雪
乃のさけ鏡のてり 順
[すゝくさぬれ] 山中調ふる酒のまろみ 雪
此頃の廣きに医者のおろかさ 順
業盤もけいものゝとく 哉人
おもてびさる世を退屋 雪
さ注出を酒のよあまき 人
あくれもる秋の夕を 子
[すゝくさぬれ] 人
[すゝくさぬれ] 人

(ち) 棗子桐実 [六帖草] 荘梢とも油桐ともいふ 桐に似たり実大なり毒あり食ふ
[すゝくさぬれ] 樹の実ニ お錦ともいふ 油をとり民用をたす

(ち) 栗 リツ キリ

さ一寸八分ばかりの実ニ 百月紅に似たり
曰二四月花をさく 栗の花に似たり
山中に多し 大木成もの 雪の大さ八寸ばかりの実ニ
大く鋭ありて 諸の器を 栗ちこ
山中ニ多し 麺とまぜて 子
調ふ温飩のめく 縁を 椽く温ある内にたべ 雪
伸ひも急ぎ 雪
[すゝくさぬれ] 人親の 文帝の雑録 雪 歳往き月来りて 恋ち
後九月 九日 九を陽数として日月並び応ふ 重
陽といふ俗 雪

まくらもうつ子のはつ螢也　人
駒ふしやすの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

○珍頌九翁一歌通八
若号十　城人八

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

九月八節日ふる佐まい蕎の窗行くまゝ
ふるし　ゆまの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

九月八節日ふる佐まい蕎の窗行くまゝ
ふるし　ゆまの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

面風さはまの小貝拾ひけて　泥土
もやぬるゝ　ゆまの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

本草 唐ゟハ一切祝儀ニ用ゐす　世盛哉此草ゟ始ル

蓮（ハス）子　晩稲（おくて）　時後ニ用ゐ　稲ニ粳稲糯稲アリ
あるハ六月収るもの三種あり

落栗（おちぐり）　熟して自ら裂け地ニ落るを拾ふ

八月九月収るもの是ハ晩稲糯稲ニ用ゐる

落水（おちみず）　学環捨遺
道因の

十月収るもの是晩稲糯稲ニ用ゐる

度會新嘗會（わたらえにいなめのえ）　外

四季花寄花市売買

北窓瑣談　九例を加ふ　百七十七

九月八節日ふる佐まい蕎の窗行くまゝ
ふるし　ゆまの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

九月八節日ふる佐まい蕎の窗行くまゝ
ふるし　ゆまの富士と立ならび　子
又撰ぶ夢も結ばん墨染　人
あまの織ふえとゝ出ましき　子
ねられぬ夜の衣擣音　人
老のみ世のおもしろうして　子
重ねても着る事のうれしき　人
汗のあをおろそかにして　子
花をとり洗ふ人　人
おきるより晒もよけれて降　子
花さそふ文百人の猶立て　子
暑い話も尽さゝる　撮

城下

鉄炮の遠きに響く卯月哉　翅経
砂の小麦のやせくさらく里東

鯉魚風（りぎょふう）　九月の風ニ李賀詩門前流水尽

白膠木紅葉（ぬるでもみじ）

岡寺祭（おかでらまつり）　十五日或ハ十六日

豺祭獣（さいまつりけもの）　月令此記

老丑草の実（おいもとくさのみ）　三四

…の神之八洲躰を生まらせ給ふを云 ワレモカウ 吾亦紅
…弘景曰地楡といふ花子紫色多く叢生す夏秋の…
…ともいふ 萩 …
…分ち葉を画く供物の器に供ふ 桂 カツラ
…連も力も皆座敷あり 宮 ミヤ 相撲 スマヒ
…ゆのふるく用ひたまふ 神 カミ 田 タ
…百歩ばかり〇九月十五日神事二基引山三十六本
…踊多し 太神宮ふるまひ是に従ふ 祭 マツリ
…宵祭 上 カミ 難波 ナニハ 祭 マツリ
…四十八巻のうつしき 遷 移 宮 ミヤ 祭 マツリ
…遷宮を執行ひて 神 カミ 楽 ラ を奏す
…踏を注連を結ひて 神 カミ 前 マヘ に
…村の者ども 神 カミ 酒 サケ を

八日 拾芥抄 雍州府志 桂の宮 神 カミ 田 タ 祭 マツリ 神社啓蒙 大己貴命 桂の宮 神 カミ 相撲 スマヒ 祭 マツリ 神社啓蒙 伊勢向の神社山城亀泥の…

…園の…
…。

雑

蕎麦 甲高くて味を噛切れて…
…半襲さ風のふく者 珍順
…面雑の赤級仕舞ふ冬の来く里東
…ゆかしくうつら 臼の縁 抹志
…舞ふく裏のふく廣き 縁の月 昌房
…蝸牛 蝸牛 行燈 西秀
…秋の夜の長き 近き 妹 主流 友房
…月のみ残の鞘ふくも 神 カミ 遷
…学ふ秋ふさふく 蝉 出し 二番
…この中にあるかまきの 草 てお
…さ川にあく 鰹の 裏 鰹 西あるへ 珍順
…ふの 庵 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東
…神 カミ 学の 番 ふく 蝉 出し 笛の 彼 抹志
…西 ふく 流 ふく 傳 昌房

…めし実を結び 泥土
…萱をけて実あるる 鶏冠木 デ 珍順 三戸 蕎三 本草
…識国を蒙るに 根 ふ 近 ふ 立 ふ 流 ふ 葉 ふ 葉丹し 愛 ふ 雑 冠木 ふ 根 の 尾 ふ
…然し根の花 白 ふ 実 大 し 花 の 神 の 雑 冠 木
…の花実と 廻 ふ 里 ふ 珍順 鰹 の 実 大 し 第 ふ 異
…るべし 雑 ふ 童 面 雑 ふ 尾 最大くこ 古 ふ
…秋 ふ 赫耀 ふ 天下 こ 実 試 賞 実 七 ふ 未
…秋紅葉 ふ 蝉 の 蕎 鰹 西 ふ 珍順
…ふの 庵 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東
…往 彼 ふ 西 ふ 鰹 珍順 伊勢向の神社山城亀泥の…
…ふ 流 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東
…八 流 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東
…神 カミ 里 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東
…ふ 流 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東

榊 カキ 紅葉 モミヂ 榊の葉の赤く 幻 聚 …の川 ふ 流 ふく 蕎 そあるふく 鰹 里東 川 カハ の 紅葉 モミヂ

淀 ヨド 祭 マツリ 神社啓蒙 伊勢向の神社山城亀泥の…

夜寒 ヨサム 仲

錢入の中へ投入るなり 正秀
すゝ竹をもつやうにや 友庵
蓋をかぶる島田の町娘今年迄 秋經
春を待く籠のうぐひす 二雪
落葉する日も忘れんとて 同
錢いれをくゝる夢の出初 珍頃
降くらす雨後袷の袂口 定
探幽の名をしてうまき 喰掠
喰るまに業躍の下をくゞし 昌房
傾くを咄つゝ来よりの 正秀
いまするまる談一もしと 扶箱及庵
兵法をくる碁盤の秋 秋經
はつくと切雑の紙を煩て 二雪
まかの庵もひのうき雨 乙
喰るの三味のつくまで蛸もし 珍頃
旋頭うたの演ゑ 野狐
目をぬき秀の咄を 掠
急ぐろうまま 上侍
手短さを銭祝ぎて 正秀

旅東祭

廿日 酒栗 遷化寺の門のあるを相待ふ 遷化寺の手先 國師 栗飯

順栄の日 郡中暑風の難ありたゞ一軒の子の像 淡路
久礼て酒くらふ 定
降くらす雨後袷の袂口 定
探幽の名をしてうまき 喰掠
喰るまに業躍の下をくゞし 昌房
傾くを咄つゝ来よりの 正秀
いまするまる談一もしと 扶箱及庵
兵法をくる碁盤の秋 秋經
はつくと切雑の紙を煩て 二雪
まかの庵もひのうき雨 乙
喰るの三味のつくまで蛸もし 珍頃
旋頭うたの演ゑ 野狐
目をぬき秀の咄を 掠
急ぐろうまま 上侍
手短さを銭祝ぎて 正秀

松の実

大和本草 方土 ダイセ

札例幣

公事根源 例幣とい

提酬祭

記事 九月 山城 國字

菊

キク 花をつゝて 秋

椿の實

和漢三才圖会 椿の實 園圃を以て油を取る 油を稲生 實圓く多黒花を似て

椿

和漢三才圖会 椿のごとき大 木にして花實離非の類

南天の実

本草綱目 南天燭 日 手酒珠

鳴瀧

瀧を観る 春の上 秀及庵
花の比 夏の日 得とゞ 野狐
さゝら打 秋の夜 二雪
。

雨乞

時過也 黄代時の 角大師 正秀
時まいう 秋嵐の 珍頃
雷太のまねごとに 清の
うめ 秋
自転車到 体の家を 秀
度々 年を 頃
雨いくぶつくと 秀
片ゆく 頃
拝まんを 秀
なくことを 別路
頂上 頃
歌のあそる 子

雨時雨

シグレ 冬の 秋の 秀

雪

ユキ 福ま子 秋。 誹字の社 降雪の西山 八日

雷

カミナリ 神鳴の神 降 神鳴一

虹

ニジ 北八

霧

キリ 秋の 秋

霜

シモ 秋の 秋

露

ツユ 秋の 秋

月

ツキ 秋の 秋

名月

メイゲツ 秋の 秋

月見

ツキミ 秋の 秋

村雨

ムラサメ 秋の 秋

雨

アメ 秋の 秋

我

ワガ 伊勢太神宮 秋 神鳴を 秋 神鳴一

月 秋 海棠 秀 銀河 秀
芋 掘 ニ 掛 ケ ル 鍬 ヲ 逃 ル 虫 順
ムシ
ムシ
ムシ

[illegible]蕉

羽子板（ハゴイタ）

[増補俳諧歳時記] 新年の兒女雑遊の具をいふ古き物語にも出たり上巳の節に擬ふには又九月九日に賞する兒女多し源氏物語にも雛遊の事に引もちゐるべきよし重陽に張ぶよしも見ゆるべき歟猶考

是をつく事は源氏にも見えたり

雛の宮の家（ヒナノミヤノイヘ）

[増補俳諧歳時記] 雛遊の具なり

残菊（ノコリギク）

[菅家文章] 菅家の帝陽ある世俗之を殊重とす〇殊葉の帝陽ある世俗之を殊重とす〇殊葉のごとき十月之日

九日小袖（クニチコソデ）

菊襲 [清巌正徹記] 九月

右歌菊襲一面白

勧学會（クワンガクエ）

[唐廚本草] 此菓うるし似ると雖も大あり

胡桃（コクルミ）

[唐廚本草] 此菓うるし似ると雖も大あり

栗（クリ）

[本草] 俗に九年母と云名あり

[年中行事] 九月朔日

九年母（クネンボ）

熊栗柄（クリガラ）

そつ雪に何もおそるゝ船の中　そ自
保寿そまるも老ん葛切き
稽古より師の屋敷や神そ月　凡兆
賄のおそき炉中の鮭よ非そ月　荒葉
おそしや打猛む人の顔色蒸
炒もけや蚤のうそへのそ束立　凡兆

そそるらくく

山里座のうそまり動る社祭ホ　土芳
流鏑をまつめて通る牛車の跡　野水
筆のそめ河原の人まき垂髪女　越人
そのそ外蚤の多史折まそる　曲翠
古事の黄のそもまし冬搗　凡兆

菊の咲囲こ雪を守り
親父持そ老ふ老い冬籠　千尋
とのそそき社毎の祭　市川　猿玉
　　冬体
はりもるろうそろみのそろ鯉　尚白

草の紅葉

草の色　草の錦　草もみぢ　草の秋

こそるくそ
社の梢に
崩魚簗　下り魚簗　魚簗
又実を結そ
草の色
又実を結そ
草の秋　暮るく沙社をそ立秋の
うまそ源もるそ　九月盡

草牡丹

大和本草　牡丹を牡丹と似う

故こ華縁で捕そもる枝を折て逆へ植て
再誌を設そ是を然の茶とそ雑器の部二
胡頽子　枝こ針有そ冬紅そ実ふし四
こそりこ雑そ月そ過うく葉を脱ときそ実熟そ
大さ小棗のめきさの是を黄代其英とそ二雑五月
実熟そ大さ棗のふく莖そして下うそ高二雑五月
実熟もそ大き橘の子の
如くしてつまりある

草牡丹

大和本草　牡丹と似う

山口祭

中已年日　国語国吉
教郷仁達

の神社九月祭る神社九月祭の礼行ふまきを山口祭と云
祭る神　復そ三神を祭そ末社そまきこ

八幡宮

記文　山城国八幡山の社僧九月
廿日の夜の頭を修も先之月より
精進して夜そまきをつくる是を地盤割と云我俗祝
そ餅を搗そ多賀のそうふ又割と云なこ祝そ割そ餅
を搗そ是を鏡餅と云是を神前の四隅に飾り酒
菓子等を備そ花の頭と称も
又割そ是を鏡餅と云

花の頭

廿日　記文　山城国八幡山の社僧九月
廿日の夜の頭を修も先之月より
精進して夜そまきをつくる是を地盤割と云我俗祝
そ餅を搗そ多賀のそうふ又割と云なこ祝そ割そ餅
を搗そ是を鏡餅と云是を神前の四隅に飾り酒
菓子等を備そ花の頭と称も
採そしめて夜そまきをつくる是を地盤割と云我俗祝
を割そ是を行しそうふ又割と云なこ祝そ割そ餅
搗そ是を鏡餅と云是を神前の四隅に飾り酒
菓子等を備そ花の頭と称も
の義之花の頭そ
社僧の菓子饗を設そ
是を神前の四隅に飾り酒
菓子等を備そ花の頭と称も

山粧ふ

破芭蕉

芭蕉　芭蕉　芭蕉
芭蕉翁記　芭蕉
詞そ云時此
冬そ今きそ
いそしそそ秋

山粧ふ

破芭蕉

野雪

楓葉

豆引

書

楓葉

藏器曰楓葉橘そ似て小
而緑表　そくそせれ　此雑
書邦そ
子の如く
とそ云そ
頼をおし

豆引

京雑三戊部云　角
おそきもそ云そ
製しそる

野雪

雑記曰　野雪
野雪

破芭蕉

芭蕉　芭蕉　芭蕉
芭蕉翁記　芭蕉
詞そ云時此
冬そ今きそ
いそしそそ秋

山粧ふ

破芭蕉

野雪

楓葉

豆引

書

楓葉

藏器曰楓葉橘そ似て小
而緑表　そくそせれ　此雑
書邦そ
子の如く
とそ云そ
頼をおし

豆引

京雑三戊部云　角
おそきもそ云そ
製しそる

ほくいの洗ふまねをやもりかな　丈草
海見ゆる所をつくりて涼むらん　百里
ゆく螢やけしき引ける夏の月　去来
船の絵ふき消もやる夕涼　〃
寒き日の入江のあをき千鳥かな　丈草
以上
うき草を流すまでして晴間哉　凡兆
夫婦の蚤やかこつ露の中　〃
蚊柱のふらつく夜也秋の風　〃
おもたさをはこぶ蟻の小荷かな　丈草
うつくしき蓮の葉ごしの海鼠哉　凡兆
死ぬまでは稼ぐらん蟬の親　旦藁
穂麦冬に育ちぬ冬の月　杉風
おのおの戸や秋のさしきてふたり　〃
からまるの蔓ふみ分て来る人　〃
夏かきつばた人にしられず山家哉　〃
猶汐掛のおそき食をおもふらん　記名脱ク

玉

石堤田奏　公事根源　受け法国の田乃損亡しるる訴への用捨を

海老バえび　大和本草

檀　和漢三才図会　実は椎の

実　同上　冬青を冬青木とも正青とも光沢ありて葉円く夫を比較る証歌多し小

の実　本草　椿の一種二葉ハ椎と似ると雖も厚くまた濃く凡兆

栗　本草　栽しし器を作り舟の櫓とも下用椎と同し

栗　本草　別種二実相抱より大二倍とし

栗　和漢三才図会　実は椎の

栗　一名別種実甚だ美なり

栗　本草　赤し秋のくりしてふくめる古語あり

栗　和漢三才図会　実は椎の

栗　本草　赤し秋のくりしてふくめる古語あり

正木の実　同上　冬青を冬青木とも正青とも光沢ありて葉円く夫を比較る証歌多し小

正木の花　本草　花生ずして結ぶ生ずるまく熟するまゝ紅二枝を

正木　同上　冬青を冬青木とも正青とも光沢ありて葉円く夫を比較る証歌多し小

正木　本草　花生ずして結ぶ生ずるまく熟するまゝ紅二枝を

正木の葉　同上　冬青を冬青木とも正青とも光沢ありて葉円く夫を比較る証歌多し小

正木　本草　花生ずして結ぶ生ずるまく熟するまゝ紅二枝を

正木

なりくだり川とも雨や雪汁原、

行潦 俗云ニわたり水一云ニ道ばた水

きそうる初蝶屋の老の新跡し 芭蕉

昔屋の留主もよそにて

老て悪いやみも消る秋庵の留主 同

雪の日や餅の子笠をすきかうる 羽笠

海とそも健あらい雪の鏡 卯七

汁うつそひやゝ冬のてし過さき 李東

亜退降

乳のうへ子に世を渡しする妙き水 白

うら舗も宮地の後もうの内 亜蒼

神なりまいあてまい都なりめうて

一角まき春や舗たりまい文 李

信吉李納

東神奈地鼻息泊し面の角 女角

黄李侯こ之のそもいきまれ 順琢

家くやうたちかやしき婦耕、結 角

てゐう新墓うく

人こ家を買世を香い多まき 芭蕉

酸法師の赤面も 餅の乱 同

年の夜や多祖父を争い小多秋 号和

うす雪の汁とくいかうとしの宿 吉来

うまて汐彦のすゝ汁や仔好うまの、

なとしやすのおうまなる人こそ 和紀

やうまうまて之やはしそまの雪 角

いつまこと人こいそまう年の雪 通

年の雪多降まき袴の裏くなり 彩風

夏

雪解の面をきやかやしき 女角

夜うすき雪汐多や部一云木 該

例祭 九月十五日 三社、還幸も 未詳 ミツリ 神社山城國宇治郡木幡村 [現]木幡 [古]木幡 神一座 正哉吉勝連日天恩謝祭ニ木幡の神社と

[古]木幡 神一座 正哉吉勝連日天恩謝祭ニ木幡の神社と

社、還幸も 未詳 ミツリ 神社山城國宇治郡木幡村 [現]木幡 [古]木幡 神一座 正哉吉勝連日天恩謝祭ニ木幡の神社と

幸屋の留主もよそにて

老て悪いやみも消る秋庵の留主 同

雪の日や餅の子笠をすきかうる 羽笠

海とそも健あらい雪の鏡 卯七

汁うつそひやゝ冬のてし過さき 李東

亜退降

乳のうへ子に世を渡しする妙き水 白

うら舗も宮地の後もうの内 亜蒼

神なりまいあてまい都なりめうて

一角まき春や舗たりまい文 李

信吉李納

東神奈地鼻息泊し面の角 女角

黄李侯こ之のそもいきまれ 順琢

例祭 九月十五日 三社、還幸も 未詳 ミツリ 神社山城國宇治郡木幡村 [現]木幡 [古]木幡 神一座 正哉吉勝連日天恩謝祭ニ木幡の神社と

社、還幸も 未詳 ミツリ 神社山城國宇治郡木幡村 [現]木幡 [古]木幡 神一座 正哉吉勝連日天恩謝祭ニ木幡の神社と

幸屋の留主もよそにて

老て悪いやみも消る秋庵の留主 同

雪の日や餅の子笠をすきかうる 羽笠

海とそも健あらい雪の鏡 卯七

汁うつそひやゝ冬のてし過さき 李東

亜退降

乳のうへ子に世を渡しする妙き水 白

うら舗も宮地の後もうの内 亜蒼

神なりまいあてまい都なりめうて

一角まき春や舗たりまい文 李

信吉李納

東神奈地鼻息泊し面の角 女角

黄李侯こ之のそもいきまれ 順琢

実

[大和本草] 枝末草ニ椒の実ともニ今椒もて

椒の実ともニ今椒もて

寺一条會

掛物 大阪四天王寺一条會 九月廿四日 常ニ掛ル時ハ常ニ

赤小豆引

大祓 六月 十二月 晦日ニ 各九月ニこれを如ス

鳥拝

[本草] 鳥拝

[illegible] 芭蕉
[illegible] 白
[illegible] 凡兆
[illegible] 丸
[illegible] 野
[illegible] 史邦
[illegible] 紅
[illegible] 羽
[illegible] 丈
[illegible] 越人
[illegible] 惟
[illegible] 珍碩
[illegible] 猿
[illegible] 曲
[illegible] 正秀
[illegible] 北
[illegible] 李
[illegible] 風
[illegible] 園
[illegible] 仙化
[illegible] 露
[illegible] 卓袋
[illegible] 万
[illegible] 野
[illegible] 杉
[illegible] 千那

別録 高野 [illegible] 芭蕉
甘温すて毒ふし乾も 朔寒 [illegible] 秋
[illegible] 凡兆
[illegible] 越人
月九日の [illegible] 綱代打 [illegible] 綱代
綱代人 [illegible] 雪峯 [illegible]
[illegible] 芭蕉
[illegible] 越人
[illegible] 凡兆
[illegible] 史邦
[illegible] 羽紅
廿二日 [illegible]
[illegible] 越人
[illegible] 凡兆
[illegible] 去来
[illegible] 丈艸
[illegible] 惟然
[illegible] 珍碩
[illegible] 猿雖
[illegible] 曲水
[illegible] 正秀
[illegible] 北枝
[illegible] 李風
[illegible] 園女
[illegible] 仙化
[illegible] 露沾
[illegible] 卓袋
[illegible] 万乎
[illegible] 野坡
[illegible] 杉風
[illegible] 千那

[illegible] 芭蕉
[illegible] 白
[illegible] 凡兆
[illegible] 野
[illegible] 史邦
[illegible] 羽紅
[illegible] 丈艸
[illegible] 越人
[illegible] 惟然
[illegible] 珍碩
[illegible] 猿雖
[illegible] 曲水
[illegible] 正秀
[illegible] 北枝
[illegible] 李風
[illegible] 園女
[illegible] 仙化
[illegible] 露沾
[illegible] 卓袋
[illegible] 万乎
[illegible] 野坡
[illegible] 杉風
[illegible] 千那

[illegible] 芭蕉
[illegible] 白
[illegible] 凡兆
[illegible] 野
[illegible] 史邦
[illegible] 羽紅
[illegible] 丈艸
[illegible] 越人
[illegible] 惟然
[illegible] 珍碩
[illegible] 猿雖
[illegible] 曲水
[illegible] 正秀
[illegible] 北枝
[illegible] 李風
[illegible] 園女
[illegible] 仙化
[illegible] 露沾
[illegible] 卓袋
[illegible] 万乎
[illegible] 野坡
[illegible] 杉風
[illegible] 千那

[illegible] 芭蕉
[illegible] 白
[illegible] 凡兆
[illegible] 野
[illegible] 史邦
[illegible] 羽紅
[illegible] 丈艸
[illegible] 越人
[illegible] 惟然
[illegible] 珍碩
[illegible] 猿雖
[illegible] 曲水
[illegible] 正秀
[illegible] 北枝
[illegible] 李風
[illegible] 園女
[illegible] 仙化
[illegible] 露沾
[illegible] 卓袋
[illegible] 万乎
[illegible] 野坡
[illegible] 杉風
[illegible] 千那

[illegible]

九日 重陽 [illegible]

[illegible]

山祭

[名義] 山山ごとに祭る故に名とす

[illegible]

柚

[流文] 神の御供に苦く酸の供物なし

柚味噌

金柑

[時候] 仲秋に金橘実を結ぶ秋冬と雖ども秋を専とす

水木

[和名] 美豆木 [集説] 二三丈葉動揺して風もなき処にも花穂を似て花穂を似ず一種七種の山中より出るもの葉形色花穂を似ず二月芽を出ず秋に実を結ぶ

蜜柑

[同上] 太和漢ともに称す

大祓 [illegible] 夏の五十年 [illegible]

[illegible]

夏神楽 [illegible]

[illegible]

四の宮祭

[名義] 近江国淀の辺大津の津と云ふ神山王

芝神明祭

自十一日至廿一日、[illegible]

城南宮祭

廿日

下鴨祭

山城賀茂神社の祭礼

白川祭

十三日

大和紀伊のさる山郷にはさゝやかなし坂するを雄略の順礼をさゝめて年ごとをまつりそめたるまゐ詣の群集つゝしる 我のさしつゝしる法牛 法ろ

つゝしまゝそはし坂やしまの雨 寺来 髪刈や一夜を経て九月の雨 凡兆 九月の名にや薬くゝまく五月雨 芭蕉 蓮そのやまもせぬよまぢ五月雨 相如

七中家の老達みまりくゝまを見 まをあそりてなくすゝまくゝ 僧者よ天竜禅満一脳月 又光彩通室輪禅満とゝ

る詩又明の十二家詩鄭少谷何大復の十三夜社月を歌ふとゝのくる詩を引て異朝も十三夜の月を愛もとゝのくまでも詩会の席二信号る今俗集十二家詩

をるゝまでも是八月十三夜ゝ詩を他一ツも九月十三夜の月を書もし詩文おもしろきく一包一幸吟もそもそもいふ人賠吟の奥ゝして天下の名

月と愛もる事い我朝のゝ此四月之 右中記 七十五代崇徳院保延元年九月十三夜ゝ月雲清く月

ゝゝ是むかし宴年法皇明月ゝ会双のゝし伝ふまる伝ふ事ゝ月ゝ今夜の月もゝゝ明月の称ゝ

神社啓蒙 播南の秋い山郷ゝる月の雲ゝ祭る詩の神一座る月ゝ大宮、例祭九月廿日神輿二基ゝ里ゝ此地人皇七十四代ゝる朝上ゝるの離宮ゝして

玉輦の渡ゝる跡ゝ播南鮮宮ゝ称ゝまり

記事 祥ゝ季秋十箱師みゝゝく播南鮮宮寺の開前ゝ少ゝ方ゝ十箱師の社ゝ方ゝ詩ゝ入詩ゝ明神の社ゝ方ゝ神

鹿谷祭 シシタニマツリ

号詳ゝ記ゝ

九月二十四ゝ

十三夜 後の月、二夜の月、九名月、栗名月、

ゝる郷ゝ十三夜の月見い我朝の風ゝ伝ゝる近世のゝゝて儒者ゝ天竜禅満一脳月 又光彩通室輪禅満とゝ

る詩又明の十二家詩鄭少谷何大復の十三夜社月を歌ふとゝのくる詩を引て異朝も十三夜の月を愛もとゝのくまでも詩会の席二信号る今俗集十二家詩

をるゝまでも是八月十三夜ゝ詩を他一ツも九月十三夜の月を書もし詩文おもしろきく一包一幸吟もそもそもいふ人賠吟の奥ゝして天下の名

月と愛もる事い我朝のゝ此四月之 右中記 七十五代崇徳院保延元年九月十三夜ゝ月雲清く月

ゝゝ是むかし宴年法皇明月ゝ会双のゝし伝ふまる伝ふ事ゝ月ゝ今夜の月もゝゝ明月の称ゝ

伝ゝ歌ゝ

神社啓蒙 播南の秋い山郷ゝる月の雲ゝ祭る詩の神一座る月ゝ大宮、例祭九月廿日神輿二基ゝ里ゝ此地人皇七十四代ゝる朝上ゝるの離宮ゝして

玉輦の渡ゝる跡ゝ播南鮮宮ゝ称ゝまり

記事 祥ゝ季秋十箱師みゝゝく播南鮮宮寺の開前ゝ少ゝ方ゝ十箱師の社ゝ方ゝ詩ゝ入詩ゝ明神の社ゝ方ゝ神

鹿谷祭 シシタニマツリ

号詳ゝ記ゝ

九月二十四ゝ

十三夜 後の月、二夜の月、九名月、栗名月、

ゝる郷ゝ十三夜の月見い我朝の風ゝ伝ゝる近世のゝゝて儒者ゝ天竜禅満一脳月 又光彩通室輪禅満とゝ

る詩又明の十二家詩鄭少谷何大復の十三夜社月を歌ふとゝのくる詩を引て異朝も十三夜の月を愛もとゝのくまでも詩会の席二信号る今俗集十二家詩

をるゝまでも是八月十三夜ゝ詩を他一ツも九月十三夜の月を書もし詩文おもしろきく一包一幸吟もそもそもいふ人賠吟の奥ゝして天下の名

月と愛もる事い我朝のゝ此四月之 右中記 七十五代崇徳院保延元年九月十三夜ゝ月雲清く月

ゝゝ是むかし宴年法皇明月ゝ会双のゝし伝ふまる伝ふ事ゝ月ゝ今夜の月もゝゝ明月の称ゝ

伝ゝ歌ゝ

月とゝ十五夜ゝ対してゝ二夜の月十六夜の月を称ゝく二夜の月とゝ雲七夜名月栗の月ゝ世俗十九夜の月を辛

名月とゝ

芍薬の根 シャクヤクノネ

対ゝく

壊を砕く毎夜九月紀を割り去る

椎の實 シイノミ

椎葉、椎の葉。

椎 和漢三才図会 椎子 織

松子 ショウシ

新松子 シンショウシ

新米 シンマイ

新蕎 シンソバ

麦 バク

新蕎麦 シンソバ

新米 シンマイ

食療本草 粳米新熟の者ゝまを動し羊を渡ゝるのい赤痢を醫

頁享式 甘式ゝ例の雲脱二ゝ何ゝまゝ甘ゝ前ゝいみゝとしてゝゝいゝ秋ゝる者法の働ゝを妻してゝゝ

今年米、

ゝ去 来

四季 北窓晴記 附葉

北窓集

[illegible] 凡 此 [illegible] 芭蕉

[illegible] 時 [illegible] 芭蕉

病後

[illegible] 何 行 [illegible] 梅本

[illegible] 凡 兆 [illegible]

[illegible] 嵐蘭

[illegible] 芭蕉

[illegible] 嵐蘭

[illegible] 嵐蘭

[illegible] 嵐蘭

子子うなきうきうきう

葬やぬるまの夢のほくち灰 [セヒ] 庵
笑ふも泣くも仏まつる家業哉 嵐蘭
[夢華通]十月の神都講の士席皆誠を尽く墳を餐
をそうけて折うてまつり木種哉 杉風
う娘を竜宮にふるき祖うを子 野
さてもあつき暑のなごり哉秋の雨 史邦
そうしく哉のうちより新蕊旦業 [ニカワ]子尹
秋風やむしも落ちの動くまで 故翁の雅名小金作といへるは一伴賀の西姓あるて桃塊
連れてよき親のあらせを原相知
八郎もそうと勘当して貴のうえ妻をうけ
[浦島]まくら引寄せて寝る春の夜 元禄
[浦島]まくら引寄せて寝る春の夜 元禄
ふるさとや酒の名先ず落る秋 北枝
[浦島]しるまうくうくうくう

[illegible]て居る[illegible]ゐる今も師の宅にしのばれし梅の名也 蕉
疲馬や花の[illegible]ゐる[illegible]の事也 [illegible]
夜梅[illegible]白梅うるむ姫[illegible]ル 北
[illegible]ゐるもの梅咲[illegible]ば 麦
[illegible]月夜哉

今朝の梅[illegible]ぬくまりて[illegible]の 風 麦
武江[illegible]ゐるもの梅の名
雪[illegible]しき宿の細見や雪の梅 て 魚

幸来のこし[illegible]猫をあはしめつゝ
[illegible]の山[illegible]の白
汐[illegible]
宿[illegible]
雨者[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

四季 雑 神祇 釈教 恋 羇旅 哀傷 誹諧

振舞やもてなしがほの雑煮哉　去来
春風やすゞ菜の中のなづな摘　荘子
雑煮くふおのれ女の子初心哉　同
もち雪や白髪も見ゆる額髪　同
里人の箱をかしたる曲彔哉　猿雖
雑煮の餅くひちぎる歯ぐきかな　野水
我春きれてもゆかしき方や梶原　同
風呂をこゝもこゝもの上林檎売　珍碩
若鶏ふむ妻の産屋の縁の先　土芳
雪の朝や茶をすゝりてゐる翁　芭蕉
越の雪北国しらぬ山ざくら　同
越の雪北陸の指笈に日ハ入ル　元禄
すゝこゝろ雪をくゝりし石の上　同
雪霞む中の抱る雑子の声　芭蕉
苔雫屠蘇のふるきを汚す　同

集

暖め鳥　張九齢の雁の集と云ふ雄を撃ち雌を撃つと云

蓋鷹に従ふを撃ち雁の集ふ胎を撃つ

歳五十二暮るゝ冬いまだ海を見ず　芭蕉
紀要を用ふ著述ゝゝ記載しるし　去来
初雪　前年の猿ども十日ゝゝ　三回忌　史邦

[よ文庫]

兼二冬ノ物

鶫　鷽、鶫、鶺鴒

山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉
向ふ面のあかきいつく柿う郎　去来
ふゆがれやけしからぬもの朽ちのこり
かしこくはまうさぬ旨をうけて
筆も穂もむすぼゝれ柿ぬる郎　紅
梢より先に熟する柿う郎　堀上氏
栗の立ちにしる柿う郎　芭蕉
もち柿や遅ざくらに咲ける　利重

東叡山にて

山桜さぞやおがんでしまふらん　甘
一枝いるゝ句もさうしまふらん　尚白
鶯のあつらへきこゆる山ざくら　元禄
ちる見えさへしむかふ坊主　芭蕉
今日のけふくらゐ遅さくら　史邦
雪ちるもてうちくふ花ざくら　千那

兼二冬ノ物

鳩　かつこう、大和本草に郭公を時鳥と混じて

栗ひろふ人ときゝしは是日東に往て物を撃ちを西南北まで
ちるを此大性の義二集ひ狀ち鷹に似て蒼黒色
雁に似て小し大性の義二集ひ狀ち鷹に似て蒼黒色
[illegible]
[illegible]
[illegible]

菅笠のふさとをる
折ふしや神の前 芭蕉

俳客の国も恋の在りそのころ
富士の山の雪も踏まぬ春駒の群
らまろとらんほくほまい
里もころな花守の子孫かや 一

士文の墓古武蔵野の中にあり
ころ墓ころくなき世ころの後うの
地ころころするは墓の多く猫柳を亜
侍るもしうしく世の物ころう
侍ひてその猫ををる像ころた
他の墓野猫哭ころれ侍まい
侍ころもしも花ろ人の性をり国風
ありんころ哥いしくころ見ろ記去来
哥ろ侍ら猫れし花の都ろれ 凡兆
浪人のやとりて

嵐ふきの赤坂までぞ花朝は残
得よ花ころ中のゆふくらふ 芭蕉
曽ら裏哥ろやよ行ころふろく

千菜鉤（ちなつり）

千菜ころ云ふ者の茎葉を採てもの下ころけ煮ころ菹一ころ鳴ろ掛菜ころ云

㋒ 冬瓜（とうがん）

時珍曰冬瓜ころ形ころ長ころを以て
[真享式] 此ろを俗説の白在にして冬
瓜ころ者ころ形ころ円ころ扁ころ異ころ
秋冬ころ之ころ収ころ蔵ころ者ころ一字ころ
ころ
冬ころ瓜ころ西瓜ころ
あせろ形ころ冬ころ瓜ころ
[真享式] 此ろを俗説の白在にして冬
瓜ころ者ころ形ころ円ころ扁ころ異ころ
秋冬ころ之ころ収ころ蔵ころ者ころ一字ころ
ころ
冬ころ瓜ころ西瓜ころ
あせろ形ころ冬ころ瓜ころ

叶（かなひ）

[真享式] 此ろを俗説の白在にして冬
の部ころ追ころ

ち 茶の花（ちゃのはな）

[陸羽茶経] ころ
椿瓜虚の如
く葉ころ厄子の如ころ花ころ白薔薇の如ころ実ころ椿瓜の如
ころ沼ころ瓜虚木ころ廣州ころ出ツ茶ころ似ころくころて苦ころ渋ころ
椿瓜ころ猫ころ
なろれろるころ

千鳥（ちどり）

むろろる、猫ころる、猫子
鳥、川ころる、ろ波ころる、島
千鳥、浜ろる、
[和漢三才図会] 鴴 衡千鳥 俗ろ茶集
ころ和ちどり、
乱ろるころころ又知ころる江湖ころ処ころ在て
百ころ群ころをころ作ころるころところ称ころ
似ころ大ころころ頸ころ長ころ嘴ころ脚ころ
斉ころ長ころく股ころ尾ころ短ころく脛ころ蒼ころ
みころ色ころ赤ころ水ころ上ころ飛ころき猫ころ

吟ころく
大峯やころの奥の花の果 曽良
芝灌山ころ社ろれ
道灌や花ころの代々ろしれ 嵐雪
源氏の絵ころを
桜ころ手ころ折ころる人の立姿 羽紅
庚午の暑窓ころを旅て
焼ころ香ころ炉ころ
[大和本草] 雀ころ大ころ前
三指後指ころし歩ころ足ころを左右ころ
歩ころ
[和漢三才図会] 鴴 衡千鳥 俗ろ茶集
ころ和ちどり、
乱ろるころころ又知ころる江湖ころ処ころ在て
百ころ群ころをころ作ころるころところ称ころ
似ころ大ころころ頸ころ長ころ嘴ころ脚ころ
斉ころ長ころく股ころ尾ころ短ころく脛ころ蒼ころ
みころ色ころ赤ころ水ころ上ころ飛ころき猫ころ

㋓ 御会講（おんえこう）

御影供、
十三日、日蓮上人の忌ころ
ところ云ころ
[和漢三才図会] 鴴 衡千鳥 俗ろ茶集
ころ和ちどり、
乱ろるころころ又知ころる江湖ころ処ころ在て
百ころ群ころをころ作ころるころところ称ころ
似ころ大ころころ頸ころ長ころ嘴ころ脚ころ
斉ころ長ころく股ころ尾ころ短ころく脛ころ蒼ころ
みころ色ころ赤ころ水ころ上ころ飛ころき猫ころ

御取越（おんとりこし）

一向宗門の徒此日親鸞上人の忌
を修ころ忌ころの十一月ある故ころ取越ころ云

大社神事（おおやしろじんじ）

神集、自十一日 [和漢三才図会] ころ
神在、至十七日 大社幷築大
社ころ神の宮ころ出雲ころ国幷築郡ころ在ろ大已貴尊ころ
大宮ころ三十二ころ末ころ摂社ころ宝殿ころころ三十丈ころ今ころ減して

今年夏の石と共に木曽のうと
春の秋八月後の紀行の事葉を旨
望湖水惜春
行春を近江の人とおしむ 芭蕉

蓼の花刈り込む頃や水の上 去来
一ふき風の来る夕川とそて 凡兆
鮎の子の白魚送る別れかな 芭蕉
神祭る家一の物と鯉鮒の子 史邦
ほのぐと戸に指す月の蚊遣哉 芭蕉
人まちかほの雪垂れ松竹て 邦
すだれ引きめり女の昼寝 芭蕉
何事も来ぬうちの静かさ 来
ぼうふら沸く井の臭ふく 芭蕉
あら海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉
葉蔭のまゆのはりこそ哀れ 邦
明ぼのゝ先出来さうしまのやなし 芭蕉

八史後漢の孝霊帝光和元年八月廿五日遠江三ヶ国院並保元年一始て三月三日行る〇毎年神祭の七十二度
鎮守十月八日祭礼の事なり三十月十七日より十七夜迄
を斎と称し祭礼殊に美しく渡御の儀式一統に度し
藻を刈りて海辺に積む人あまを乙女きハ国造へ詣ふ
その人と麗美なる事なり龍蛇を曲物と盛て神殿に供
むら立その龍の形蜿蜒似たり鉾形の班文連り又九
色の彩色画るが如し尾先ハ魚尾と似て故あく曲
して宇賀神の如し尾越の鴨 貞享弐此名ハ俗鵆と云ハ誤
往来の文を集めて山の庵着する事鵆ハ越ハ
その時を称し時を其の里を名とあり名ハ独
こ雄鮭の用 冬物 温石 大和本草山東通志三抜
驢馬も出ツ色青白を画ひつゝ毛の如し味甘く毒
なし薬物に備ふべし日本こ温石という物あるを意白く
して少く青しかいらうある玄山東
通志ある温石こ同物なるべし 鴛鴦
貞享三年丙寅云 今朝の女彩色を頭こ云ふ有
皆ともに明ある摺こ物の事なり 俳諧こ綿ハ

二里余り過ぎて立ち寄る家こ庭辺こ銀木然も見物こ同志を嘱
き色して同の後白き梅あり翅尾黒く脇黄こ赤黒の
紋あり 大和本草 雄雌相こ愛してお離れ
異なる東垣曰雄一を失へハ多く悲しみ憔悴して死
も普猫雄雌を飼ふに雄の首を断切るに雌啼ざる
ハ血を通ずるなき時こ切あるを財製してこれの内毒
年財ふるし雄の首をいぐるなり

綿 ワタ

綿入、綿衣、綿帽。擬車、綿掛。
延綿。束綿、唐綿。
実こ実なる綿こ云字綿こ付てもまきをおこ綿
打こ云綿車を以て綿こまるを綿こ云こ他延綿束
綿ともに作るなりの状を以るまれをこ唐綿ハ古綿綿こ云
唐綿二貞享式古綿こ綿のヨハ分ハまゝ綿こ或ハ古綿
も木綿も綿こ多ことくまとさるハ附合の害ならん
綿ハ元より翁にして綿入ハ綿掛の翁あるハ入字を添
てみこと定むべし 綿帽子。京師の婦人喪こ被を
用て之面を蔽ふこ乃ち喪こ及ハ喪の帽子を用ひ
る小綿帽子用ふ 綿衣、綿を以て作綿衣の如く
こまきを翁して厚くこ綿を加つて老こる者こを楽く

神送 カミオクリ

神の留守。神の旅。此月諸神出雲国こ社こ集

たぐらの雲のすこしあさき空 来
一揖 秋つくる乞食まつりの ホ
秋祀の古家ごまふくたつ 杉

市中は物のにぎはひや夜の月 元 兆
曙しくとつくの聲 芭蕉
二番雞こゑも曙さだまりて去 来
夜こそたくさんなれ一ト ホ
あの窓の釘も見えくるめ一ト ホ
たび〳〵雨もしてまさ狐指 来
筆耕こそする夕はくるま ホ
蓬の葉とも竹ばかり雪を 蕉
笠ぬのむとりの花のつゆむ 対 来
紺屋の七尾のあひ倉うき 兆
重の魯ちそろ這の巻をとて 蕉
行人入しめりの 螢 来
立うるる扉風を倒も女るを ホ
湯屋の井よ黄子つれしき 蕉
黄香の実をいそ落せタ ホ

時雨（シグレ）

蕭々たる雨の音を聞くや草の庵 芭蕉
幻よまことか浮世を夢の時雨 同

川音（カワオト）

花さくら川音を時雨と聞なせる 神遊
過ぬ神の留を神の緒よりまつり 川音の

寒菊（カンギク）

大和本草 冬菊を寒菊ともいふ
論あるいとど枯の子ぼろ〳〵まで 寒菊

歸花（カヘリバナ）

冬月清水或は草庵の傍に多く有 歸花

枯尾花（カレヲバナ）

貞享式 此外古名多し
みの古名多し 枯尾花

薫（クン）ニ冬物（フユモノ）

かる雪（ユキ）

北越雪譜 うんどきい古訓二里俗かしきといふ 淀二尺三寸摸七寸多雪方なり
ラ〳〵と云本の枝〳〵く作る鼻ハ及してうつ〳〵と云つ
又いかつラ〳〵と云愛をも重ふ山深の凌谷のはこ
こまぐるハ隔二尺もすすもる人雑摸一尺三寸
仮をたらめく作るかぎき、まぐるまこ二ツかちきつ
山仮もけ四人一足もおりうくし到る者皆をたきし

俗せいこくちたるれ 兆
さるの猿と世を經る秋の月 蕉
年々二年の猿子そろふ 来
五六年生木つけくる時 兆
足袋ふくもも黒をの 蕉
遅うまでつまさ俗るまつ 力松 来
てうちう前ふ水にほう 兆
戸障子も遮かな紙の蒙漆舗 蕉
天井守いろう竟ほく 来
も巻くと茅輪を作る月末は 兆
琴をるるこそ起し初秋 蕉
手俵さまろまで高る井前 来
ゆうみて蓋の河の西事雑 兆
茅屋く新く布ていおやう 蕉
今ももしき擬宝のさね 来
女句くこいりたる窓をして 眺
浮世の果るまで小町ン 蕉
何史ご謝まるまでこと 来

四季非諧歳時記新栞草

鐘（カネ）

數を遅ふまつ
をくるなしているなぐし

氷（コホリ）

紙子俗白く厚き紙をつまき被濃を白に
設まこと影夜ふるる者衣の姿ときいう裏を
もこまでまを稽ふしむ中古濃茶漉の坂の人芸を
ぎこまでまを聲ふしむ中古濃茶漉の坂の人芸を
裕ふ製ふ製ふ製

[illegible]
[illegible]
[illegible]

阿蘭陀

屠陽蓬太経中考るに人蔘子集を綴て名あり蘭陀人これを多く服用するをもて名を高くせるにやそもそも此人の書籍を好んで我国に舶来するもの多し

魚

東医宝鑑 大口魚俗名大和 和漢三才図会 大口魚北海に多し南海にはまれ

若狭

范至能梅譜に冬十至前巳発故得早名要非風

鶏卵酒

玉泉方

早春

雪車

蕎麦湯

大豆

蕎麦の花

無二冬物一

つらゝ

紫苑 母の花咲てよりて雪の雨おくるときたりて迚も蒼の趣(ギョウ)酷(ヨク)遠たゞ此頃まいをらし花の時若芝陵の脇まで見る花なれ本下の心けおもはれる実る花の時落芝法こまゝく美しまるゝ人の絵れ川山るの茎を夕日うれ小前おもゝ花まて咲鉄仕とりまゝ越人なるまでしや前もの物忘神駄まて女選ぶ山雪松おまでるまけら葬おる尾上不冬文首おして雪のむるよ親上雪若子

興のこ花まる人の絵く

月花まて咲鉄仕とりまゝ芭蕉

ゆる人の山家こくうて

持の来のまゝかま仕処海る記、

杜鵑 二十句

おくまゝんを御おくこのゝ

おゐて越もるこくき

綱貫(ツナヌキ)

漢語雑談 当世卑賤者のすく綱ぬきと称まるものい往古たちまの造風を称し て年の陵をふく造る屋産と鋏を以て釘せし物こゝ今云る帯くこゝの号有 袖以ゆ角以ゆ、キマツギン キトクツギン二名一物こ云い賞筆集ゝまくくあり

頭巾(ツキン)

五元集 冒そうをきゝまく神以ゆ一名沸る頭巾、きどく以ゆ、角以ゆ、

田舎鑑 神以ゆ一名沸る頭巾、きどく以ゆ、角以ゆ、

氷(コホリ)

雨 今 冬こたゞさゆうあるとこゝお四こあるに個し歌こうつまた月の白体あまい水辺の人の山家こくうて

持の来のまゝかま仕処海る記、

杜鵑 二十句

おくまゝんを御おくこのゝ

おゐて越もるこくき

雀鶏(ツミ)

和名まゝめ麿或ゝつく悦哉雀識い路

月(ツキ)

夏引(ナツビキ)

三冬物(ミフユノモノ)

生海鼠(ナマコ)

油煎、重油煎、油煎三或香合、油まゝる子

納豆汁(ナットウシル)

焼(ヤキ)

麦(ムギ)

蕎麦(ソバ)

葱(ネギ)

大根(ダイコン)

蕪(カブ)

三冬物(ミフユノモノ)

蒸海鼠(ムシコ)

納豆汁(ナットウシル)

焼(ヤキ)

麦(ムギ)

蕎麦(ソバ)

葱(ネギ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大津うろく

雪の日松影ひくし顔の色冬南
ゆき雪見ゆ冬雪見ゆ冬ゆきみて色褪
竹の雪雪見ゆ冬ゆきみて色褪
かき好る松雪の山茶の山
車雪雪きみの山茶の山
飾雪雪見てから髪を洗ひ乾を越人
飾雪雪ゆ冬雪の雪
ものうけ好ふ雪も雪の雪
そゝぎ来ゝ雪の雪の雪
雪降くゝ雪ゆ雪ゆ雪
来の雪雪ゆ雪ゆ雪
雪の日松川飾雪ゆ雪
雪雪の雪ゆ雪ゆ雪
雪雪の雪ゆ雪ゆ雪

十月

水官解厄

十五日

書言故事 正月上元ハ水官ノ厄ヲ解ク事文献通考 正一ニ曰ク天官ハ福ヲ賜ヒ地官ハ罪ヲ赦シ水官ハ厄ヲ解ク

冬至

大和本草 冬至ハ丹八月ヨリ冬至マデ陰ヲ採テ用ユ

冬至冬物

食 冬至ノ食。厚食。小食。教食。紙ふすま。

玄猪

女房詞 祝ヒ餅ヲ云

玄猪餅

祝事部類 茶ハ多子ノ者ヲ撰ミ十三子ヲ生ムヲ吉トス十三子ヲ生ムハ茶ノ子ノ数ヲ以テ也

下元

ヒトヒ 水官解厄

十五日

書言故事 正月上元ハ天官福ヲ賜ヒ七月中元ハ地官罪ヲ赦シ十月下元ハ水官厄ヲ解ク事文類聚 正一ニ曰ク天官ハ福ヲ賜ヒ地官ハ罪ヲ赦シ水官ハ厄ヲ解ク百司。人ノ善悪ヲ察シテ天

冬至冬物

食 冬至ノ食。厚食。小食。教食。紙ふすま。

冬牡丹

大和本草 冬牡丹八月ヨリ冬至マデ陰ヲ採テ用ユ

二百ヨリ始ル 舊ハ十一月ノ条ニ有

春芭蕉

古 梵語 漢名甘蕉

芭蕉布

本朝食鑑 芭蕉ノ皮ヲ績テ布ヲ織ル

芭蕉紙

文儒 芭蕉ノ皮ヲ以テ紙ヲ製ス

芭蕉実

和漢三才圖會 食療纂要 芭蕉ノ実ハ甘寒ニシテ毒無シ

芭蕉根

食療纂要 芭蕉ノ根ハ甘寒ニシテ毒無シ

柴漬

ツクダニ 二月ノ条ニ見ユ

河豚

フグ

河豚汁

河豚魚

河豚ノ肉ヲ細ニ切テ味噌ニ和シ煮ル

河豚乳

白氏文集 答客嘲河豚詩ノ自注ニ曰ク河豚ノ腹ニ乳アリ

河豚毒

本草綱目 河豚ノ毒ハ肝ト子ニ在リ其ノ他ノ肉ハ毒無シ

河豚腸

河豚子

河豚肝

河豚白子

河豚皮

河豚鰭

河豚尾

河豚骨

河豚煮凝

河豚味噌漬

河豚干物

河豚塩漬

河豚粕漬

河豚酢

河豚醤油

河豚煎酒

河豚煎酒煮

河豚煎酒酢

河豚煎酒醤油

河豚煎酒煮凝

河豚煎酒味噌漬

河豚煎酒干物

河豚煎酒塩漬

河豚煎酒粕漬

冬桜 フユザクラ

小春ノ頃ニ花ヲ開クヲイフ 花ヲ冬ニ咲ク盆ニ実ヲ結ブ秋ノ俤ヲ兼ヌト云ヘリ

冬木立 フユコダチ

冬木ノ立チ姿ヲイフ

冬の月 フユノツキ

源氏絵合ノ巻 冬ノ月ノ事ヲ論ジタル事アリ

更衣 コロモガヘ

公事根源 十月一日ニ綿ノ衣ヲ着カヘルヲ掃部寮ノ御装束ヲ献ズルヲイフ

寺法花會 テラホッケエ

南都興福寺ニテ修ス 元亨釈書 和銅二年十二月藤原不比等ノ建立ニ係ル

冬梅 フユウメ

寒梅 八朝詠ハ

冬籠 フユゴモリ

冬ノ風ヲ防ギテ閉籠ルヲイフ

冬構 フユカマヘ

寒ヲ防ギ風ヲ避ケンガ為ニ家ノ構ヲ厳ニスルヲイフ

冬の川 フユノカハ

水ノ涸スルヲイフ

冬枯 フユカレ

草木ノ枯レ尽スヲイフ

冬木の梢 フユキノコズエ

寒梢 八朝詠ハ

冬籠 フユゴモリ

冬ノ風ヲ防ギテ閉籠ルヲイフ 古今

冬構 フユカマヘ

寒ヲ防ギ風ヲ避ケンガ為ニ家ノ構ヲ厳ニスルヲイフ

冬の梅 フユノウメ

寒梅 八朝詠ハ

冬木立 フユコダチ

冬木ノ立チ姿ヲイフ 源氏絵合ノ巻

冬の月 フユノツキ

源氏絵合ノ巻 冬ノ月ノ事ヲ論ジタル事アリ

更衣 コロモガヘ

公事根源 十月一日ニ綿ノ衣ヲ着カヘルヲ掃部寮ノ御装束ヲ献ズルヲイフ

寺法花會 テラホッケエ

南都興福寺ニテ修ス 元亨釈書 和銅二年十二月藤原不比等ノ建立ニ係ル

山茶花 サザンクワ

茶ノ木ニ似テ葉ノ厚キヲ冬ノ間ニ花ヲ開ク

冬の川 フユノカハ

水ノ涸スルヲイフ

冬梅 フユウメ

寒梅 八朝詠ハ

冬桜 フユザクラ

小春ノ頃ニ花ヲ開クヲイフ 花ヲ冬ニ咲ク盆ニ実ヲ結ブ秋ノ俤ヲ兼ヌト云ヘリ

冬木立 フユコダチ

冬木ノ立チ姿ヲイフ

冬の月 フユノツキ

源氏絵合ノ巻 冬ノ月ノ事ヲ論ジタル事アリ

更衣 コロモガヘ

公事根源 十月一日ニ綿ノ衣ヲ着カヘルヲ掃部寮ノ御装束ヲ献ズルヲイフ

寺法花會 テラホッケエ

南都興福寺ニテ修ス 元亨釈書 和銅二年十二月藤原不比等ノ建立ニ係ル

山茶花 サザンクワ

茶ノ木ニ似テ葉ノ厚キヲ冬ノ間ニ花ヲ開ク

冬の川 フユノカハ

水ノ涸スルヲイフ

冬枯 フユカレ

草木ノ枯レ尽スヲイフ

冬木の梢 フユキノコズエ

寒梢 八朝詠ハ

黄昏に到候をおもひ知候而曙の
まくまでも夜ふかし候事に候
さまざますむ夕をまつのさうぶ
行くて程のうつり迄露ふかし
ろの人の簑をすかし雲雀文
枯芝やすき湯気の二三すじ
うけろやる秋眠のさうくさ
ふ他のつるるを寿ぎ
蝶々を待るけしきや梅の越
つきなど梁の抜てうるさし
はまの下ばしろくる稲穂ん
曙の初雁をめうる鶏う郎
簀ふろく蝶々事のつる処
事を面いやの空一うおもうる

白尾鷹

すやふさの尻はるくる白鷺
まりくと親手指うつくしき

蓑亭のうち人池を鶴をぬすまれ
うしけるを嘆ふ

金毘羅祭（コンピラ）

十日。渡口郡之郡と称する神二座或いは三座神
或いは五座神を勧請をと云

小春（コバル）

初冬の月 初学抄 十月の天
気和暖なる候をいふ

暁（コカラシ）

和訓栞 木葉の散あるべし
木枯すさまじき風をいふ

氷（コホリ）

月令 孟冬之月水始氷
仲冬之月氷益壮季冬
之月水方盛

氷の花（コホリ）

商陽詩題 冬城の朱欄池の氷花をめして瀬のてし

凝鮮（コリフナ）

書集 ゆ魚をとるものいと近むらしいてきまるもの
ゆ魚のまきに以ておいかものを庖うけてゆ魚を啖ふ

氷燵（コリタツ）

亜巨蜜。

兄鶏（コリ）

鷸の雄をいふ 白氏文集 風吹柘木晴天雨 冬の鷸衣 南越
志 猿猴人を鶏毛を編冬の鷸衣をきて木
の上にて人を招くと云

夷講（エビスカウ）

旧暦十月十日或いは家例により日定めも
商家の往而宮大神宮をまつる

本朝通紀 推古天皇元年三月聖徳太子始めて市を設
けて商人を招き給ふ 今の恵比須神これなり

鯛（タイ）

南蛮魚名 形の平偏なるもの
いひ色赤く鱗細かに味美
なり 和漢三才図会 鯛は魚の王
なり 其形美なり 其味美なり
其名美なり 故に祝事に之を用ゆ

杉苔（スギノリ）

冬月 州の

木の葉（コノハ）

落葉 冬之

落葉の花 冬の

凩（コガラシ）

冬の颪に葉の花るる風う郎 木嵐 落葉の花 冬の

神楽（カグラ）

冬の月より春の花まで毎夜神楽を奏す 其始は
詳ならず 古事記に天照大神天石屋戸に
入給ふ時天鈿女命神楽を奏し給ふと
あれば神代の始なるべし 今は
宮中并に諸社にて行ふ 神楽歌
催馬楽 東遊 風俗 久米舞 大和舞
倭舞 五節舞 駿河舞 隼人舞 吉志舞
大歌所御歌 内侍所御神楽 等あり

神寿

年玉（トシダマ）

年賀（ネンガ）

年始（ネンシ）

年礼（ネンレイ）

年忘（トシワスレ）

年男（トシヲトコ）

年越（トシコシ）

年籠（トシコモリ）

年木（トシギ）

年徳（トシトク）

年棚（トシダナ）

年玉（トシダマ）

年賀（ネンガ）

年始（ネンシ）

年礼（ネンレイ）

年忘（トシワスレ）

年男（トシヲトコ）

年越（トシコシ）

年籠（トシコモリ）

年木（トシギ）

年徳（トシトク）

年棚（トシダナ）

廣産二年うへし松ゐ年ゐ
ともにこ養千さくら咲ぐら
まのとくろおいおる一松
らしろ見まる四畑の松ゐ
ませんこと山ゐこまん金松一
事風ろくら疑ゐ雪産ゐ
ゐのみ十雨て見ゐ
ろまろ松ゐ一
けかる時滅解てゐ雑ろ
まをつくて手中ろ陳ゐ
ゐ立て入おまろ四陳ろ
ゐつまをむてそ吟陳
いくまん当ゐ陳ゐ
風入くまそしゐ
ろて流ゐ時ろ
夕雪の投網ろるいまろ
初陳ゐの見まを笑ゐ
摂松の梨ろ
うんそろの中を
うまおゐ

熱名
ある
蕪三冬物 **華臍魚** 老婆魚、綬魚、蹉
琶魚、の状名ゐも

摩波府志 綬魚盖を腹ゐ帯ある帽子の如く生して
ち上ゐ前く始ゐ名くその形ち斜斗の如くし大ある
その盤のごし 呉都賦 蹉跎子鬼鰣ゐてそくち
大和本草 田俗魅鰣ろ称ゐいます

ゐ
ゐ
ゐ

親もまれ〳〵終まれ松の酒 拳下
人舞む毎こゝ降この泊千ろ 友重
山里の雪見の窓の朗詠ろ卵し荷号

雪見 雪見、雪見風雪を雪見こゝ、雪見酒、北越雪譜 隈國こゝいふ雪見おあまで吾國ていふ雪見ふ者ハ九死一生ニ作詩おあまで吾國ていふ雪見ふ者ハ九死一生ニ

なうさ日れし油まめ木のこうこう春 聖武

初夏

おろもうくいきい物こをのつくり酒 通
雪ふ原踏もなくまれたくうなたに本下
こゝもうくカもさして見こさきう嵐 蘭坪

宵船老人のまち乳しはし
みとの雪をつゝみこをふむ什ニ
う雛こうまじやるとて雪の釵
船人う招まるを宿まこうくく
ろうるの雪のまろ文鱗トかし
聖こ燒雪ゆくし友誘もう〳〵 荷号

山雪ゆくく
夜更てもたこ一鄭の吐こつくう条 芭蕉
一八うあとこるるんかまつそる一井
樽の方待ひてうる若葉集誠人
切様のこゝ雪をこさきいさこうおギ初 重

雪 女、深山雪中一婦ニ女の貞を守こゝ女ニ
雪ふ、雪ふ、雪ふ、

十一月

末

十一月を過ぎて十日あまりの間は他方浄佛の國土に善をおもひ予歳に倍まりてこと更に十恵こと〻〇洛東誓願寺山内極楽寺真如堂をはじめ始まる氷室

聖一忌

十七日 洛陽東山東福寺開山忌 禅家 今日赤小豆粥を食す

修

時雨

冬の内しぐれ降ること多し 夕時雨 朝時雨

霜

雪

氷

魚を漁

柞の紅葉

酒

炭

助炭

埋火

榾

冬籠

夜学

夜寒

夜長

夜の雨

夜の雪

夜の霜

夜の月

夜の星

夜の風

夜の声

夜の鶴

夜の鹿

夜の狐

夜の狸

夜の猿

夜の蛙

夜の虫

夜の蚊

夜の蚤

夜の鼠

夜の蝙蝠

夜の蜘蛛

夜の蟹

夜の蝶

夜の蜂

夜の蜻蛉

夜の蟻

夜の蚯蚓

夜の蛍

夜の蝉

夜の蜩

夜の蟋蟀

夜の蟷螂

夜の蜘蛛

夜の蟹

夜の蝶

夜の蜂

夜の蜻蛉

夜の蟻

夜の蚯蚓

夜の蛍

夜の蝉

夜の蜩

夜の蟋蟀

夜の蟷螂

連句の席に待ちもて結ぶ清水哉 文果
引立てつるの群まる清水哉 月水
かくさくらには曇れども雨尚白
真葛原を明ぐる結ぶ清水哉 一晃
東かし此幕あるべくもさくら花 ト枝
鍋鐘多候て待つる名水哉 人
跡の花なれど今も水恵 同

初秋

さくら散れば跡の秋の風 ト枝
桂の雫地に入る月の涼 祥

新蕎麦を打ちたるに

一番まうけ蕎麦かしましき秋の夕 仙
かくれ家の主もや秋の夕けしき 芭蕉
郭公や湖水の霧を引ちぎる 芭蕉
郭公や垣根の雫ふり捨てる 文鳥
葬の心もとなき秋の雨 同

蕎麦

俳諧の一流蕎麦を云 大き水雀の如し蕎麦の花 文果
俗に蕎麦腸ともいふ 頓痴正風北野を蕎麦の花 月水
乱れ咲く蕎麦の花の白さかな 尚白
又蕎麦の籠もあり 貞享式 古郷や臍の緒に泣く蕎麦の秋 芭蕉
蕎麦の部へ入るべき句なれども秋の部へ入れたり

蕎麦の花

蕎麦の花に雲雀の声清らかに 文果
蕎麦の花に雲雀の声清らかに 文果
蕎麦の花に雲雀の声清らかに 文果

冬の部

冬旬

氷魚 まうをぬ

近江湖の名産なり

氷魚の使 延喜式

山城国より近江国へ氷魚調代一度を氷室へ送る

火鉢 桐多雑、掌

炭 小野炭、池田炭、すみや炭、備前炭、播磨炭、摂津炭、丹波炭、

甘炭、駿河の富士根の炭 同
十月之部続

秋

かまくらや三浦のこなたも秋の雲 芭蕉
谷川や筆も氷魚も秋のうれ 孟春
石切の音もまぎれず秋のうれ 童下

仲秋

廿日 神社便覧 宮者殿ハ京都の吉田家より許状を受て社神の名を書文起請教免の社と云 俗傳 社神ハ伏屋の詞を宮まもりといふ社ハ社と詰て焼き実の詞を略ス云々 十月廿日実備まで詰まるを祭ると云 此社何神ある共詳ならず一説に他人の霊を祭ると云 寸 五仙花 洪庵類書
この説さまざまし 他人の霊を祭ると云 寸 五仙花 洪庵類書
備前の冠者を祭ると云 寸 五仙花 洪庵類書
子の葉をはなの水仙てまだ青きうちより芽の葉 蕪二
の著を去ろ 此云 学の世事のを今盛紀著と云 蕪二

冬物

杉焼 スギヤキ

おの〳〵其家〳〵の囲炉裏にて焚く薪なり
ためし杉板のよろしく焼あり
焼る仕りどころ〇此る何をこしらへるにもよろしく焼
焼のこと季論焼と
属ものの

炭 スミ

斧の音や懐石の つま木の音 ト雲
雨の音く人の息をうかゞふ 一雲
雨と物をこたゝりおもはゆるおかしみ 一ヨ
鳥猟をこゝろみるまでもなくうき重五
初雪やまだ降つゞく夜の明 雪芝
初雪やまだ人間の数にいる 東明
菊の中に初雪ふるや菊の花 知足

季 秋

何ごとのおはしますかは知らねども
忝さに涙こぼるゝ秋の夕暮 拾遺
山路の菊折しもかくや姫 芭蕉
一重ねつゝく白菊の花 蕪村

初冬

今朝の雪根ごしに掃ん竹箒 梅翁
ふりしまるる音や竹の葉の雪の朝 拾遺
一刻の千秋の名人のつまる音 雪芝
秋の夜の花人のつまる音 雪芝
みの中やろうそくの灯ゆる雪の花 昌碧

陽月、良月、玄冬、秦正、初冬、時雨月、神無月。

十月

寒露節 赤間祭 神宮神嘗祭 書障中

十一月

Ⓘ 亥川祭 上酉日 夏の土用の丑の日 祖三枚祭

Ⓗ 初師 二月八日 初午 初満つ 戎講 神事 吹革 吹革祭

の事にて見るべし

Ⓗ 新嘗祭 公事根源 今年の初穂を神に奉らせ給ふ代の始めなる大嘗会ごとく今夜行はるゝ事也

Ⓗ 鞍馬の火祭 洛東鞍馬山にて毎年十一月廿七日に行ふ祭礼也 ○鞍馬山の麓に由岐大明神の社あり 此社の前に数千の篝火を焚き 神輿三基を渡御あり 其時の賑ひ筆紙に尽しがたし

Ⓗ 新嘗祭 公事根源 今年の初穂を神に奉らせ給ふ代の始めなる大嘗会ごとく今夜行はるゝ事也

Ⓗ 鞍馬の火祭 洛東鞍馬山にて毎年十一月廿七日に行ふ祭礼也 ○鞍馬山の麓に由岐大明神の社あり 此社の前に数千の篝火を焚き 神輿三基を渡御あり 其時の賑ひ筆紙に尽しがたし

歳徳序

此書を撰ぶの初、弘長壬戌孟冬の中旬、剞劂半ばに過ぎしほどに、不幸にして禁獄の身となり、行通これを見て、その命を奉じ、ことごとく終の字を改めて十冊の目となし、この字の如きをばことごとく改めまするなり。この二三年、風雨に侵されて、字体のけしきを失ひ、年来人の書写するに従ひて、誤謬ますます多し。ここに行通、重ねて命じて曰く、「この書、すでに世に流布す。今、改めざれば、後人いかでか知らん。速やかに改めよ」と。ここに、予、謹んで命を奉じ、改めおはりぬ。

一陽来復するを考経の説といへども、至と二義あり。一陽は極まるの至なり。二陽は始めて至るの義なり。仍て、一陽の日を以て冬至とす。

故に、豊明節會

小忌衣。日蔭蔓。日蔭糸。心葉。

江次第 新嘗會裏書に云、毎年十一月中の辰の日行之。豊の明の節會と云ふ。天子新穀を嘗む故に新嘗會と云ふ。

公事根源 今案ずるに、神を祭りおはりて、今日君もきこしめし、臣もたまふ故に節會行はるる歟。

新嘗の祭、宮主、卜部、掌相、辨、小忌衣を着る。

和訓類 小忌衣は忌籠りの義也。大忌衣を着るに対す。

小忌衣をつくる。[日上]古事記を案ずるに、神代巻に以麻為手縫とあり。心葉、大嘗會の巻に、冠の左右に垂るる白き布の上に懸るものの如くにして、木綿にあらず、麻なり。

代参、その他、道祖神祭

十六日、按ずるに天王寺村にあり。祭礼あり。

新撰陰陽書に云、毎年十一月中の酉の日、村里の童男童女集まりて、人形を作りて、祭る。礼の料とて、銭を出す。これを以て、種菓を調ふ。その事を終るの後、酒肴を調へ、飲食す。今日、此事あり。

通俗志に云、摂州東成郡一津屋村、道祖神祭、正月十六日、村の童男童女集まりて、人形を作りて、祭る。礼の料とて、銭を出す。これを以て、種菓を調ふ。その事を終るの後、酒肴を調へ、飲食す。今日、此事あり。

冬至梅

和漢三才図会 梅の葉の冬青なる事、松竹の如し。冬至の節、花を開く。故に冬至梅と名づく。

(り)立冬之節

素問注 立冬の節より初めて氷冷の五日を始めて、後五日ごとに氷冷ゆ。

(ち)炉火焼

庭火の遺風なり。

梅ヶ香の川と月の夜の山路哉 芭蕉
雪ぐゝり報子の笛も聞ゆる哉 野坡
家普請をまづのてまきとり持て 芭蕉
上の松よりとゞく帆の雲 野坡
雪のうちはりくせ〳〵の雲 野坡
初鰹いまだ銭にも成ぬ浦 野坡
御頭へ参るもうき世哉 芭蕉
娘をやるうれしさの朝寝哉 野坡
雪良うおれおれしつゝ翁寿を 芭蕉
毎年の雨のふくれ久月 芭蕉
新什を経師もうしる向川 芭蕉
みそこうこんおまち申候の手 芭蕉
張東花の時候を押へ〳〵 芭蕉
菊畑さそふ宮詣する 芭蕉
初雁を鉄砲打てさゝれ 芭蕉
あるをこゝろに任せ給へ 芭蕉
阿ゝ元のつくもと酔て花十景 芭蕉
門〻て押さる主はの高禅 芭蕉
東風うせて憂のきれを仰ぐ 芭蕉
たゞ有るまゝに狐もろこし 野坡
汐戸の左右むく〳〵喜主雪まそ 芭蕉

神祭（カンマツリ）

十月 日の儀、摂島。

廿七日、後日の能、北野。

[紀事] 摂部、春日の祭に真の御頭屋田楽ありし元禄の頃、一人両頭といふことを両人の者をもつて各川堂書写の社司より御頭へ参るもうき世哉 芭蕉
遍昭院の法にて法楽ありしを、今は神供のみをそなへて法楽場なり
夜寒の釘をうつ音の神祭 野坡
海を流し社家各神俗を接待もてなしぬ 芭蕉
[紀事] 摂部、春日の祭に真の御頭屋田楽ありし元禄の頃、一人両頭といふことを両人の者をもつて各

賀茂臨時祭（カモリンジマツリ）

下酉 [公事根源] 宇多天皇いまだ王侍従と

神楽（カグラ） 庭火。 [公事根源] 仍略之。

[紀事] 此月吉日を撰ま里院中三丈の誂三子御製

百禽

子ハ猿父をてらして里ぬ 利斗
雀のなくらの吉日よき 野坡
雨あがり雛の掛物のぼされて 弘屋

[紀事] 此月吉日を撰ま里院中三丈の誂三子御製

与力町より本所の方御組屋敷の前を通り業平橋を渡り
竿竹を業とする者の袖たるもの也 俗
つるゝ初めてもあらく人事屋
業の自慢の声かしまし 牛
掃い納めより掃き初むる迄 俗
ちゝめき合中てより出まで 類 来 屋
俗ちゝまきとやちりにごる 牛
初閻魔天川はゞ広き事通り 俗
いくら掃きつゞき雪の朝 屋
十二三才の市蔵の着たる乳 牛
あまそゝしき声いとうく 俗
四の字かきし赤ふんどし行のき 屋
思ひ切たる声なれど 牛
近所のうらの祖母を呼初て 俗
天一番のおとこ二月の朔 屋
生まれ出し子供の声 牛
嫁の実家へ帰る途中 俗
常盤の森の遠立ち 屋
鳴き初めの人待つ 牛
ほろくと二声のいかり鳥 俗
おろしとあらしの稽古する 屋

の降り方御組直しまで所謂地下の髪を垂れ常解
ら下し 俗 幼い五歳或いは七歳の女子ゝ初て帽衣を着
ぬ 牛 掃き納めより掃き初むるまで凡そ百日
假帰依の名ゝ文献通考ゝ見えたり今の俗ゝ舞妓ゝ作る
十月朔日京江戸女院ゝ始ゝ見ゆ顔見ゝ云ゝ云ゝ
目中村勘三郎ゝ来ゝ
て夜ゝ入ゝ
小春凪ゝ
後ゝ
夜ゝ
定ゝ
ゝく相談ゝ
ゝ
恵ゝ
一ゝ

寒苦鳥 カンクテウ

五雑組 五臺山ゝ奥ゝあり秋山雞ゝ如し
四足肉ゝ翅ゝあり夏ゝ変ゝ毛ゝ
ほろくと二声ゝいかり鳥 俗
風ゝ我ゝ
と風ゝ
社ゝ

大師講 ダイシカウ

智恵の鏡、智者大師の忘日ゝ当る
四季ゝ変ゝ法ゝ
智恵ゝ
比叡山ゝ
誦ゝ

漬製 ツケセイス

九十一月中旬より大根の漬ゝ漬製ゝ
ゝ変ゝ法ゝ初めて製ゝ
抽ゝ

鎮霊祭 シヅメマツリ

中ゝ寅、〇吉田八幡社

杜父魚 カジカ

山海名産図会 越前の鯉魚
い此国のみ
ゝ

雁渡し カリワタシ

雁ゝ来ゝ
ゝ

雁来紅 カリガネ

雁来花 カリガネ

雁来草 カリガネ

雁来葉 カリガネ

雁来黄 カリガネ

雁来蘇 カリガネ

雁来紫 カリガネ

雁来色 カリガネ

雁来風 カリガネ

雁来月 カリガネ

雁来雨 カリガネ

雁来雲 カリガネ

雁来霧 カリガネ

雁来雪 カリガネ

雁来霜 カリガネ

雁来露 カリガネ

雁来水 カリガネ

雁来山 カリガネ

雁来川 カリガネ

雁来海 カリガネ

雁来湖 カリガネ

雁来沼 カリガネ

雁来池 カリガネ

雁来井 カリガネ

雁来泉 カリガネ

雁来滝 カリガネ

雁来谷 カリガネ

雁来峰 カリガネ

雁来嶺 カリガネ

雁来坂 カリガネ

雁来道 カリガネ

雁来橋 カリガネ

雁来舟 カリガネ

雁来船 カリガネ

雁来車 カリガネ

雁来馬 カリガネ

雁来牛 カリガネ

雁来羊 カリガネ

雁来猪 カリガネ

雁来鹿 カリガネ

雁来狐 カリガネ

雁来狸 カリガネ

雁来兎 カリガネ

雁来猿 カリガネ

雁来犬 カリガネ

雁来猫 カリガネ

雁来鼠 カリガネ

雁来虎 カリガネ

雁来豹 カリガネ

雁来獅子 カリガネ

雁来象 カリガネ

雁来麒麟 カリガネ

雁来龍 カリガネ

雁来鳳凰 カリガネ

雁来亀 カリガネ

雁来蛇 カリガネ

雁来鶴 カリガネ

雁来鳥 カリガネ

雁来魚 カリガネ

雁来貝 カリガネ

雁来虫 カリガネ

雁来草木 カリガネ

雁来山水 カリガネ

雁来人物 カリガネ

雁来花鳥 カリガネ

雁来風月 カリガネ

雁来雨雪 カリガネ

雁来霜露 カリガネ

雁来水石 カリガネ

雁来山川 カリガネ

雁来海湖 カリガネ

雁来沼池 カリガネ

雁来井泉 カリガネ

雁来滝谷 カリガネ

雁来峰嶺 カリガネ

雁来坂道 カリガネ

雁来橋舟 カリガネ

雁来船車 カリガネ

雁来馬牛 カリガネ

雁来羊猪 カリガネ

雁来鹿狐 カリガネ

雁来狸兎 カリガネ

雁来猿犬 カリガネ

雁来猫鼠 カリガネ

雁来虎豹 カリガネ

雁来獅子象 カリガネ

雁来麒麟龍 カリガネ

雁来鳳凰亀 カリガネ

雁来蛇鶴 カリガネ

雁来鳥魚 カリガネ

雁来貝虫 カリガネ

雁来草木山水 カリガネ

雁来人物花鳥 カリガネ

雁来風月雨雪 カリガネ

雁来霜露水石 カリガネ

雁来山川海湖 カリガネ

雁来沼池井泉 カリガネ

雁来滝谷峰嶺 カリガネ

雁来坂道橋舟 カリガネ

雁来船車馬牛 カリガネ

雁来羊猪鹿狐 カリガネ

雁来狸兎猿犬 カリガネ

雁来猫鼠虎豹 カリガネ

雁来獅子象麒麟 カリガネ

雁来龍鳳凰亀 カリガネ

雁来蛇鶴鳥魚 カリガネ

雁来貝虫草木 カリガネ

雁来山水人物 カリガネ

雁来花鳥風月 カリガネ

雁来雨雪霜露 カリガネ

雁来水石山川 カリガネ

雁来海湖沼池 カリガネ

雁来井泉滝谷 カリガネ

雁来峰嶺坂道 カリガネ

雁来橋舟船車 カリガネ

雁来馬牛羊猪 カリガネ

雁来鹿狐狸兎 カリガネ

雁来猿犬猫鼠 カリガネ

雁来虎豹獅子 カリガネ

雁来象麒麟龍 カリガネ

雁来鳳凰亀蛇 カリガネ

雁来鶴鳥魚貝 カリガネ

雁来虫草木山 カリガネ

雁来水人物花 カリガネ

雁来鳥風月雨 カリガネ

雁来雪霜露水 カリガネ

雁来石山川海 カリガネ

雁来湖沼池井 カリガネ

雁来泉滝谷峰 カリガネ

雁来嶺坂道橋 カリガネ

雁来舟船車馬 カリガネ

雁来牛羊猪鹿 カリガネ

雁来狐狸兎猿 カリガネ

雁来犬猫鼠虎 カリガネ

雁来豹獅子象 カリガネ

雁来麒麟龍鳳 カリガネ

雁来凰亀蛇鶴 カリガネ

雁来鳥魚貝虫 カリガネ

雁来草木山水 カリガネ

雁来人物花鳥 カリガネ

雁来風月雨雪 カリガネ

雁来霜露水石 カリガネ

雁来山川海湖 カリガネ

雁来沼池井泉 カリガネ

雁来滝谷峰嶺 カリガネ

雁来坂道橋舟 カリガネ

雁来船車馬牛 カリガネ

雁来羊猪鹿狐 カリガネ

雁来狸兎猿犬 カリガネ

雁来猫鼠虎豹 カリガネ

雁来獅子象麒 カリガネ

雁来麟龍鳳凰 カリガネ

雁来亀蛇鶴鳥 カリガネ

雁来魚貝虫草 カリガネ

雁来木山水人 カリガネ

雁来物花鳥風 カリガネ

雁来月雨雪霜 カリガネ

雁来露水石山 カリガネ

雁来川海湖沼 カリガネ

雁来池井泉滝 カリガネ

雁来谷峰嶺坂 カリガネ

雁来道橋舟船 カリガネ

雁来車馬牛羊 カリガネ

雁来猪鹿狐狸 カリガネ

雁来兎猿犬猫 カリガネ

雁来鼠虎豹獅 カリガネ

雁来

…嘗の声と契り春の卵 …婚 …婚 …婚 …婚
…学ぬ門いたる日く亘る雲 …婚 …婚
…学の一夢も急まてる里 …婚 …婚
…離る数月のあれこれ新し …婚 …婚
五人扶持とりて春を新き …婚 …婚
…磐の尾いと仕き新うぬ 一夜
町中にまくる客のやあき新 …婚 …婚
…年に神さけ至る新 …婚 …婚
去連き春ころ山 …婚 …婚
村もく彼ら風明るき …婚 …婚
念ふ…あら蒸もはりさ新 …婚 …婚
…あの春を祝き家居の春 …婚 …婚
はき掃除して…ら …婚 …婚

…人 …婚 …婚
人と希おさりきつまのく春た
…そ…のおうは国くまりるる
おてそろ…のおろけをなのてく

四つ…の摺り風花見ん新 芭蕉
…ぶしや団て花見のはつめ…ち 杉風
…うくと…ていと春見の…花新 去来

天長節（テンチヤウセツ）

三日 今上帝御誕辰の日なり 詩国潘くこと…

相嘗祭（アヒナメノマツリ）

上の卯 …

里神楽（サトカグラ）

…連奇桃林 …の外春く里神
…村もく彼ら風明るき …
念ふ…あら蒸もはりさ …
…あの春を祝き家居の春 …
はき掃除して…ら …

添宮線（ソウヒセンヂ）

…神楽の内裡 …
…う本まて …

虎耳草（ユキノシタ）

…くうせん 一名キジン草 花 …

深山苔草（ミヤマシキミ）

…の…ゆを …
…つ…く …
四月…雪の下 …
…菌苔 …
…ぬる …

天長節（テンチヤウセツ）

今日国…を…建 …
…盃をそ…付お …

相嘗祭（アヒナメノマツリ）

上の卯 …

里神楽（サトカグラ）

連奇桃林 …の外春く里神
…村もく彼ら風明るき …
念ふ…あら蒸もはりさ …
…あの春を祝き家居の春 …
はき掃除して…ら …

添宮線（ソウヒセンヂ）

…神楽の内裡 …
…う本まて …

虎耳草（ユキノシタ）

…くうせん 一名キジン草 花 …

深山苔草（ミヤマシキミ）

…の…ゆを …
…つ…く …
四月…雪の下 …
…菌苔 …
…ぬる …

…何かし…雨中春を…待りて
中まそ…れお…の花見う新 嘉…
…花守や白きそ…らを実食を去 来
…新めしの湯を注…や…の花 孤…
…ものの花見の雪のそ…新 前…
…桜の盛…も…直や…小 枝
牡丹咲くや人も…花見て…き…
…ぬるおりしと花を立戒の越う …
…花いまも…雨宝…し …
…山越ちるれし小川のおそる …
…花僧を…裏ろきたる花見る家
…浪毎を花を…新…る意さ今
…おちて付い雲…任や …
…打そる越てろくや …
…おまて…のそ…て花見新
…隔を…く今ろ…越小舟う …
…まるめや…の来待る…新の …
…義のそろつ…しの…や二…来
…ほそくとまそ…つ…の…る新
鳥の…焼…の…風の…未…
…ま…ま…春…の…の…新

日吉詣（ヒヨシマウデ）

…時祭 …申 公事根源

新干大根（シンホシダイコン）

…干菜、凡…を…塩を …
…ら…ら…ら …
…義のそろつ…しの…や二…来
…ほそくとまそ…つ…の…る新
鳥の…焼…の…風の…未…
…ま…ま…春…の…の…新

晋十一月（シンジフイチグワツ）

…冬、周正、…月、暢月、雪見月、…月、天正月、
…神楽月、…月、

黄鍾律（クワウシヨウリツ）

大雪節（タイセツ）

…冬 節
…中

十一月之部終

行燈を点じてとらまる漆くれ 椎の友

時雨ふりて深し友待の夢 智月

深しさや初雪を頭巾の深く結ぶ 峰

深山より初雪ありて水の音 同

秋の部

明月 陰暦八月十五夜の月をいふ 清秋 秋の月 三五夜中の月 秋夜一片の月 秋月 秋の夜の月 秋宵の月 月前 月下 月夜 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

月見 陰暦八月十五夜の月を賞するをいふ 観月 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

十三夜 陰暦九月十三夜の月をいふ 後の月 名月 月見 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

十五夜 陰暦八月十五夜の月をいふ 名月 月見 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

十六夜 陰暦八月十六夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

立待月 陰暦八月十七夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

居待月 陰暦八月十八夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

寝待月 陰暦八月十九夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

更待月 陰暦八月二十夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

二十三夜 陰暦八月二十三夜の月をいふ 月の宴 月の会 月の友 月の客 月の連 月の主 月の宿 月の雫 月の光 月の前 月の友 月の夜 月の雫

年籠（トシコモリ）

[漢語雑談] 新俗大晦日の夜、家々仏灯灯火を点じ、諸人年を守る。これを年の籠と称す。

年木樵（トシキコリ）

専用る処の薪を多用意し置くをいふ。 年木（トシキ）

年の市（トシノイチ）

専用る物を売買するをいふ。

年内立春（トシノウチリッシュン）

[貞徳曰] 年内立春の題は、春の部にて代々の撰集あれども、寒気を入らるる事なれば、此題又多用ゆるし。

冬の部

凩（こがらし）　冷気凝結して霜雪を降らす北風なり　俗に木枯（こがらし）と書す　木の葉を吹き落すの意なり　又凩の字は木の葉を吹き落すの意なり　又凩の字は木の葉を吹き落すの意なり

霜夜（しもよ）　霜の降る夜なり　霜は冷気凝結して雪の如く降るものなり　霜夜は寒気厳しき夜なり

霜柱（しもばしら）　霜の降りた朝、地面に立つ氷の柱なり　霜柱は土の中の水分が凍結して膨張するものなり

霜焼（しもやけ）　霜柱の立つ頃、手足の皮膚が赤く腫れ痛むものなり　霜焼は寒気のために血行が悪くなるからなり

霜除（しもよけ）　霜の害を防ぐ為に藁などで囲いをすることなり　霜除は霜柱の害を防ぐ為なり

霜枯（しもがれ）　霜の降りた為に草木の葉が枯れることなり　霜枯は冬の景色なり

霜降（しもふり）　霜の降りる頃なり　霜降は二十四節気の一なり　霜降は十月下旬なり

霜月（しもつき）　十一月の異名なり　霜月は霜の降る月の意なり

雪（ゆき）　空中の水蒸気が凝結して白色の結晶となり降るものなり　雪は豊年の瑞なりといふ

雪見（ゆきみ）　雪の降る景色を見ることなり　雪見は風流なり

雪合戦（ゆきがっせん）　雪を丸めて投げ合ふ遊びなり　雪合戦は冬の遊びなり

雪達磨（ゆきだるま）　雪を丸めて達磨の形に作ることなり　雪達磨は子供の遊びなり

雪掻（ゆきかき）　降り積もった雪を掻き除けることなり　雪掻は雪国の冬の仕事なり

雪国（ゆきぐに）　雪の多く降る地方なり　雪国は冬の間交通が困難なり

雪隠（せっちん）　便所の異名なり　雪隠は昔禅寺の便所を雪隠と呼びしより起れり

雪洞（ぼんぼり）　紙を張った灯籠なり　雪洞は座敷飾りの一なり

雪駄（せった）　竹の皮で作った草履なり　雪駄は雨天に用ゐるものなり

雪解（ゆきげ）　春になって雪が解けることなり　雪解は水量の増す時なり

雪崩（なだれ）　山の雪が崩れ落ちることなり　雪崩は危険なものなり

雪見酒（ゆきみざけ）　雪を見ながら飲む酒なり　雪見酒は風流なり

雪見舞（ゆきみまい）　雪の降った時に見舞ふことなり　雪見舞は親切なり

雪明（ゆきあかり）　雪の反射で明るいことなり　雪明は夜の景色なり

雪女（ゆきおんな）　雪の精と伝へる女の姿をしたものなり　雪女は伝説なり

雪兎（ゆきうさぎ）　雪で兎の形を作ることなり　雪兎は子供の遊びなり

雪見障子（ゆきみしょうじ）　雪見の為に設けた障子なり　雪見障子は座敷の一なり

雪見船（ゆきみぶね）　雪見の為に出す船なり　雪見船は風流なり

雪見灯籠（ゆきみどうろう）　雪見の為に庭に置く灯籠なり　雪見灯籠は庭の飾り

…寺の梅いまだ…らも…
…寺のうぐひすおそき…

○

…殿の雪庭上の…
…まで一羽…
…雪…
…のころの四扉の門
…父…
…ければ…
…の字…
…ばの…
…之輔の…
…息吹…
…間の…
…行燈の…
…顔さ…
…弱縄…
…のした…
…賛之…

…修も神人一人これに従ふ 時證 …二月廿五日行法を…

㋐ 大徳寺 タイトクジ

大燈國師行状云師諱は妙超宗峯と号し播州…
…歳の…
…文字の…

山忌 サンキ

廿二日 大徳寺山門の開山大燈国師の忌日 …和漢…

朝味噌 チョウミソ

[泥土] 節分の夜画船を白紙に貼け波に…
…地下良賤と…

乾鮭 シンザケ

…夢を…
…辞…
…し市中を…

㋑ 追儺 ツイナ

鬼やらひ。 [周礼方相氏を…

高六 タカロク

…建武三年十二月廿二日寂…

㋒ 大燈忌 ダイトウキ

…

㋓ 涅槃会 ネハンエ

…

㋔ 節分 セツブン

…

㋕ 立春 リッシュン

…

㋖ 初午 ハツウマ

…

㋗ 針供養 ハリクヨウ

…

㋘ 初卯 ハツウ

…

㋙ 雛祭 ヒナマツリ

…

㋚ 上巳 ジョウシ

…

㋛ 彼岸 ヒガン

…

㋜ 社日 シャニチ

…

㋝ 年貢納 ネングノウ

[渭墨雑談] 秋…
…収とるをむかしいふ

㋞ 長崎の柱 ナガサキ

…

㋟ 朔日 ツイタチ

…

㋠ 餉 カテ

…

㋡ 温糟粥 ウンソウカユ

[和漢三才図会] 温糟粥、…
…焼栗、菜をまぜたきりぼしてゆでたる…

㋢ 朔日 ツイタチ

…

㋣ 餉 カテ

…

㋤ 温糟粥 ウンソウカユ

八日

…むかしの…
…さん…
…の…
…女…
…あもちゐ…
…の豆…
…常…
…雪の…
…押し…
…幸…
…小…
…小栗…
…孤座…
…孤座…
…卯の…
…上…
…小栗…
…ふみ…
…孤座…
…孤座…
…卯の…
…長の…
…秋月…
…その…
…餉 那の國…
…の餉 大…
…餉 …

…寺…
…のつるもち…
…指さ…
…今節…
…五山…
…餉焼栗…
…記…
…こうろ…

…寺…
…のつるもち…
…指さ…
…今節…
…五山…
…餉焼栗…
…記…
…こうろ…

…修も神人一人これに従ふ 時證 …二月廿五日行法を…

㋐ 大徳寺 タイトクジ

大燈國師行状云師諱は妙超宗峯と号し播州…
…歳の…
…文字の…

山忌 サンキ

廿二日 大徳寺山門の開山大燈国師の忌日 …和漢…

朝味噌 チョウミソ

[泥土] 節分の夜画船を白紙に貼け波に…
…地下良賤と…

乾鮭 シンザケ

…夢を…
…辞…
…し市中を…

㋑ 追儺 ツイナ

鬼やらひ。 [周礼方相氏を…

高六 タカロク

…建武三年十二月廿二日寂…

㋒ 大燈忌 ダイトウキ

…

㋓ 涅槃会 ネハンエ

…

㋔ 節分 セツブン

…

㋕ 立春 リッシュン

…

㋖ 初午 ハツウマ

…

㋗ 針供養 ハリクヨウ

…

㋘ 初卯 ハツウ

…

㋙ 雛祭 ヒナマツリ

…

㋚ 上巳 ジョウシ

…

㋛ 彼岸 ヒガン

…

㋜ 社日 シャニチ

…

㋝ 年貢納 ネングノウ

[渭墨雑談] 秋…
…収とるをむかしいふ

㋞ 長崎の柱 ナガサキ

…

㋟ 朔日 ツイタチ

…

㋠ 餉 カテ

…

㋡ 温糟粥 ウンソウカユ

八日

㋢ 朔日 ツイタチ

…

㋣ 餉 カテ

…

㋤ 温糟粥 ウンソウカユ

[和漢三才図会] 温糟粥、…
…焼栗、菜をまぜたきりぼしてゆでたる…

梅雪の一ト有れ共実溝芭蕉
浴ていやまさく咲雨まる鈴吐破
蕃匠の櫻の小歌をうたひて狐庵
にたゞ山に月をうたふ鈴斗
旧物の硯の海や風秋の風吐
剃事のやせもくこ雪の寒霜蕉
調の寒匠つきこ冊うたふて斗
墨さへ見へ処二十八日庵
法なるきいこゝ軍の大事二蕉
味そまのおうく雑談も処破
ほゝまくむ雑煙灯をかゝげて庵
肩と聴うる湯海の言葉斗
上雪の二十楽むそうりの越ら蕉
うに出ぬ間うう蕉まる
初冬のしのうちをうつまうう斗
婿三門初五十石庵庵
ほゝの鐘ゆまを掛ん去蕉
ゆすぬうこのうつるまう破
当ぬ雪ゆ庵

俳諧歳時記新題集 春

時候

年内立春　年内に立春の来るをいふ。

春浅し　春の初めをいふ。

春寒　春の寒きをいふ。

春暖　春の暖かなるをいふ。

春陰　春の陰るをいふ。

春雨　春の雨をいふ。

春霖　春の雨の降り続くをいふ。

春雷　春の雷をいふ。

春霜　春の霜をいふ。

春雪　春の雪をいふ。

春氷　春の氷をいふ。

春水　春の水をいふ。

春潮　春の潮をいふ。

春風　春の風をいふ。

春嵐　春の嵐をいふ。

春曙　春の曙をいふ。

春宵　春の宵をいふ。

春夜　春の夜をいふ。

春暁　春の暁をいふ。

春昼　春の昼をいふ。

春暮　春の暮をいふ。

春日　春の日をいふ。

春光　春の光をいふ。

春景　春の景をいふ。

春色　春の色をいふ。

春気　春の気をいふ。

春情　春の情をいふ。

春興　春の興をいふ。

春愁　春の愁をいふ。

春思　春の思をいふ。

春懐　春の懐をいふ。

春望　春の望をいふ。

春眺　春の眺をいふ。

春遊　春の遊をいふ。

春行　春の行をいふ。

春帰　春の帰をいふ。

春惜む　春の惜むをいふ。

春暮る　春の暮るをいふ。

春尽く　春の尽くをいふ。

春去る　春の去るをいふ。

春逝く　春の逝くをいふ。

春の別れ　春の別れをいふ。

春の名残　春の名残をいふ。

春の形見　春の形見をいふ。

春の余波　春の余波をいふ。

春の余寒　春の余寒をいふ。

春の余情　春の余情をいふ。

春の余韻　春の余韻をいふ。

春の余光　春の余光をいふ。

春の余香　春の余香をいふ。

春の余色　春の余色をいふ。

春の余気　春の余気をいふ。

春の余風　春の余風をいふ。

春の余雨　春の余雨をいふ。

春の余雪　春の余雪をいふ。

春の余霜　春の余霜をいふ。

春の余氷　春の余氷をいふ。

春の余水　春の余水をいふ。

春の余潮　春の余潮をいふ。

春の余嵐　春の余嵐をいふ。

春の余曙　春の余曙をいふ。

春の余宵　春の余宵をいふ。

春の余夜　春の余夜をいふ。

春の余暁　春の余暁をいふ。

春の余昼　春の余昼をいふ。

春の余暮　春の余暮をいふ。

春の余日　春の余日をいふ。

春の余光　春の余光をいふ。

春の余景　春の余景をいふ。

春の余色　春の余色をいふ。

春の余気　春の余気をいふ。

春の余情　春の余情をいふ。

春の余興　春の余興をいふ。

春の余愁　春の余愁をいふ。

春の余思　春の余思をいふ。

春の余懐　春の余懐をいふ。

春の余望　春の余望をいふ。

春の余眺　春の余眺をいふ。

春の余遊　春の余遊をいふ。

春の余行　春の余行をいふ。

春の余帰　春の余帰をいふ。

春の余惜　春の余惜をいふ。

春の余暮　春の余暮をいふ。

春の余尽　春の余尽をいふ。

春の余去　春の余去をいふ。

春の余逝　春の余逝をいふ。

春の余別　春の余別をいふ。

春の余名残　春の余名残をいふ。

春の余形見　春の余

日のおそく社寺さえ参詣の人なく孤家も
下着を一重減らすおりなれども
十二月を一年納めと云日なれば今日のくるまでを
知らず連歌師の名の付る
五條天神祭（ゴジョウテンジンマツリ） 節分 蹴の餅屋、おふの神、火已
夏にあらず風もなきに 白米製、貴み彦名
栗さかるまで寒き国地利斗
能登の堀きれる恐のうれ 俗小
名おもしろくて鰹売う 四時
二三遍さわがるふいの猫子 掛
るよの海物のさかる十一月 水
俗の使ふ語に語る名 菜
ありさま成ことなり 風
まであるさま成ことなり 雪
めくるさま風雪の語なり 到
着くの月をおこなって 記大立 麻
着年へのおくるさまの 桃 語
参詣方のきびつく上さ花 祭て
川うらまでにお詣ふまで 祭
新月雲隠ると言葉 お 風
着次へ迄ハみつゆくさ 俗小

○風雪事をいうくさして事納 山座 此辞
十二月を一年納と云日なれば今日のくるまでを
知らず連歌師の名の付る

五條天神祭（ゴジョウテンジンマツリ） 節分 蹴の餅屋、おふの神、火已
夏にあらず風もなきに 白米製、貴み彦名
栗さかるまで寒き雪地利斗
能登の堀きれる恐のうれ 俗小
名おもしろくて鰹売う 四時
二三遍さわがるふいの猫子 掛
るよの海物のさかる十一月 水
俗の使ふ語に語る名 菜
ありさま成ことなり 風
まであるさま成ことなり 雪
めくるさま風雪の語なり 到
着くの月をおこなって 記大立 麻
着年へのおくるさまの 桃 語
参詣方のきびつく上さ花 祭て
川うらまでにお詣ふまで 祭
新月雲隠ると言葉 お 風
着次へ迄ハみつゆくさ 俗小

勝寺灌頂（シャウジクワンチャウ） 十五日 名物 土人云寂滅寺の
旧跡に因まれ此日参詣良
鈴虫を捕て籠へ入て
やりくりせて代の礼物
語ふ事なかれと自慢こと
諸へ出てゆきかへる子
之さも仰の会て妙を
接もてなして
女房の人こまるる冬の月
西さ山すれハ祖母の
もくけ出るほの如の元かる
法のかぶ物ふてつもせる
勿来かくこそ
七夕の雨ふそふるまこと
花の雨ふそふるまこと

勝寺灌頂（シャウジクワンチャウ） 十五日 名物 土人云寂滅寺の
旧跡に因まれ此日参詣良
鈴虫を捕て籠へ入て
やりくりせて代の礼物
語ふ事なかれと自慢こと
諸へ出てゆきかへる子
之さも仰の会て妙を
接もてなして
女房の人こまるる冬の月
西さ山すれハ祖母の
もくけ出るほの如の元かる
法のかぶ物ふてつもせる
勿来かくこそ
七夕の雨ふそふるまこと
花の雨ふそふるまこと

男時しまに遣そろ一首

俚諺七部集終

四季非詩 戒撰 乙亥十月吉辰

男時しまに遣そろ一首

俚諺七部集終

四季非詩 戒撰 乙亥十月吉辰

七部集 十二月 きめみし 二百廿三

勝寺灌頂（シャウジクワンチャウ） 十五日 名物 土人云寂滅寺の旧跡に因まれ此日参詣良鈴虫を捕て籠へ入てやりくりせて代の礼物語ふ事なかれと自慢こと諸へ出てゆきかへる子之さも仰の会て妙を接もてなして女房の人こまるる冬の月西さ山すれハ祖母のもくけ出るほの如の元かる法のかぶ物ふてつもせる勿来かくこそ七夕の雨ふそふるまこと花の雨ふそふるまこと

め 和布刈の神事（メカリノシンジ） 晦日に門国文字崎のみて

ゐる年人の社と称する神事亜依照大火
々出見里多船、事甚合、阿夜日、依良、二祖の浪さ

き 衣配（キヌクバリ） 年の初の斟さ出くし
ま人こさう衣を賜るを云

勝寺灌頂（シャウジクワンチャウ） 十五日 名物 土人云寂滅寺の旧跡に因まれ此日参詣良鈴虫を捕て籠へ入てやりくりせて代の礼物語ふ事なかれと自慢こと諸へ出てゆきかへる子之さも仰の会て妙を接もてなして女房の人こまるる冬の月西さ山すれハ祖母のもくけ出るほの如の元かる法のかぶ物ふてつもせる勿来かくこそ七夕の雨ふそふるまこと花の雨ふそふるまこと

め 和布刈の神事（メカリノシンジ） 晦日に門国文字崎のみて

ゐる年人の社と称する神事亜依照大火
々出見里多船、事甚合、阿夜日、依良、二祖の浪さ

き 衣配（キヌクバリ） 年の初の斟さ出くし
ま人こさう衣を賜るを云

す 歳（サイ）

俳諧歳時記栞草 抄出 凡六百

例言

一 古今の季寄せ、俳諧の歳時記、数部ありといへども、或は題の多きを好み、或は題の少なきを欠く。或は題の出所を詳にせず、或は題の解釈を誤る。今此書は、題の多少を論ぜず、題の出所を詳にし、題の解釈を正し、題の用ひ方を示す。

俳諧之字義

史記滑稽傳 注姚察云滑譬猶俳諧也言諧語滑利其知計疾出故云滑譬也○まろく言ふ古今集に誹諧と書俳の誤なり誹諧とあるを寫誤とす誹と俳と通ずるなり

鋪理切 音牌 俳優雜戲也云々 正字通 俳ハ敷尾切 音斐 說文謗也云々 俳ハ候白字、君素、有捷、古爲優林即通俗不待威儀好考誹諧雜說まで世說新語補の注まで誹諧とあるは古し

逍遊亭 高砂 壽延十家集

うら帰て果ハ初まろり砂の霞 有節
侘のこと重ねもしさまの霜 翁點
池水菊も梅もうつのおぼろへ 梨白
おのが月も照しおのるや冬山 梅園
朝潮の差汐を見へて梅 春洪
庭井戸の砂簡ゆき着ぬ葉 福来
蘆川やうきの隙こ雪の下 有徳
隠の創ル升て砂る松の枝 文梅
梁のうき松のうえこ福海舟 九起
有ふと見へて降やむ雪う卵 芥舎

満尾

印つおふ紙ハ判しうまのを誹諧亭一調法ものゝ
もるせ鮮の扎甘南。●餅花。貝女小丸餅を枯枝
ようけて 七節分 豆打。おはしの頭挟。
数もつ数もまる 越。誹事 元節ふ立春の前日三十日の年内節分百
ときい越ふ理数豆を殿中撒せらまて渡廻之

逍遊亭 高砂 壽延十家集

十 煤掃 長明四季物語 此事陽成院の御時
さはまるとき 十二月の部終

奮十二月 大呂律 大寒中、季冬、臘月、涂月、窮月、
小寒節 殷正、凋年、嚴冬、窮月、

十二月 大雪節 大祓三十日
冬至中

俳と誹と通せしものあるべくしと云へる事一言半句も
世説の布文を侯白等俳諧と云へる事一笑七巻
引用せるも俳諧と云へるまゝ俳誹と誤まるべく徴し、
支考が十論と芭蕉家の書法と人扁の俳社を用ふ
るしと云へるも稽あるまじ

俳諧之連歌權輿

詩家に俳諧体あるを倣ひて和歌に俳体をまた
亦すまゝ倣ひて連歌にも俳諧体俳句俳諧連歌
の始をいふ 詩六ノ帰雁條引用ス 筑波問答に伊弉諾尊伊弉冉
尊はじめてこゝのまぐはひをし乃時伊弉諾尊のふれしえ
やうを俺しおもひぬとよみ給ひけるこゝろをいふ

あるをもてしるべし日本武尊東夷征伐の時
日髪の國酒折の宮にて御製ありけん日本武尊東夷征伐の時
底以久用加祢覧流、と給ひけるを連歌の始とす、珥比嚊利莵久波乎須擬
加感奈陪底用珥波虚々能用比珥波莵塢、と答へ給ふを
連歌はじめといへる事賜答の意を文字法師
さるものゝまぎれいでて連歌のもてはやしめといへる事
神代とはいへ八雲集等に八首
俊頼川に水平塞上而植之田平 尼作
前陸早飯者独苅倍思 家持續
是連歌あるをさへ續末句等一首と云へるを
八俳諧を二名あるを哥は一首を哥仙八今の連歌是

おのづから 乾玖波集 雜体連哥之部 奥山に [illegible] 俳諧といへる条の
もるもといへる哥を貫之こゝろふかく續てよ
らむ、又あやしくも勝ちぬ上のさまをかくいへる、実方
朝臣こゝろに、越のしらの雪やふるらんと附られしあく書
時なのりまさ俳諧発句のはし
男重戸のくこと音まもり 堀川院 古今 俳諧十論 文明の [illegible]
山寺宗鑑法師いまの世に俳諧の名のまもる守武堅一にと
そのをを学びて百韻をつゞまきて貞徳貞室ハ
宗匠の名のまく唯俳諧のこゝ [illegible] 同上 [illegible] 句連哥
世書 [illegible] 山の花を [illegible] よの [illegible] 花の雪 [illegible]
[illegible] 隅田川の亀を吟して
[illegible] 貞室 [illegible] 俳諧の心 [illegible] 野山 貞室
さしもやいまこんまで [illegible] 難波の [illegible] 宗因ハ武蔵に檀林の額をう

もて俳諧乃混氾ハ破りうまもとゝ耳に [illegible] 乃おもしろ我
得ぐく眼に姿情 [illegible] そしてさまを [illegible] 去
[illegible] 青の [illegible] 去 [illegible] 青原の [illegible] 流
[illegible] 従事の [illegible] 文庫 [illegible] 明の [illegible] 大 [illegible] 閣 [illegible] 採左右 [illegible] 出 [illegible] 別
[illegible] 芭蕉庵の [illegible] 一日 [illegible] 焉 [illegible] としてうた
[illegible] 日風雅の世に行まる
[illegible] 如し一回ハ皇物 [illegible] 一回
[illegible] 衣と [illegible] 毒を [illegible] 必中間の一
理 [illegible] 南を武江の北 [illegible] 閣 [illegible] 花の [illegible]
[illegible] 猛 [illegible] 波 [illegible] 風情 [illegible] 晋子 [illegible]

青の [illegible] 元禄五年印 水支考撰

山吟水の五文字を置くとしも
吟ずれば遥かに蜀の自己の眼を
移すに風の一帆ぞ勝れる

俳諧寂栞跋云 寛永二十七年十二月五日 松江重頼

於て俳諧の文章を立る事は中興祖也三条
西家の歌を楽に連歌は今の発句の
ごとく原は此歌より始まれども新古の
道の如く連ぐ句を神道のごとく俳諧は
仏法大小乗あるごとく俳諧体二三を挙ぐ

詩を按ずるに白氏長慶集に俳諧体二十三を挙ぐ

雨傘 怨 明

青漆の骨葉油紙の表
在門傍

俳諧 晩帰吹雪 明

吟雪集雪動添新雨
蓑中花

又以盗牛犯罪書上県平詩

洗面盆為鏡梳頭水当神
牛

俳諧体 和歌

古今

秋ごとに野辺の千草を
秋風ぞ吹きとかしける
露の玉の緒

俳諧之大意

俳諧の名は史記滑稽傳より古今集にはじまる連歌ざつつまるとより宗鑑を崇び守武を学び俳諧の泥を弘むるもの一座の興行にして今の俳諧の姿情となり且俳諧のみを傳へ多人あまた加へ筆を加へ人ごとに意訓乃秘文となりぬ其人ごとに虚実の有る世間の理屈を放り風雅超越の云爲三条の世情の人和を五倫の常法さしておろしきは俳諧の名と称べく滑稽の人ごとく此三ツを兼る時は千重の羅綾を錦るとも薦一枚のさまにおよばず八珍の菓者をはつものも一顆の飲の楽きを忘れ世上の憂を釈てしまふ笑言て耳を楽ましむる俳諧自在の人ごとくしてお世者計こそ世話ざまへくと俳諧ざなる時を違を破る業を意ふつくまさ名をなく帝て世話の一助ともへし

跋

世ノ偽書多シト雖モ本朝ノ実ニ偽書ノ梁山ノ如キ者ハ未ダ之有ラズ其ノ作ル者ノ意ハ蓋シ以テ古ヲ信ジ難キヲ知ラシメント欲スルニ在ルカ然レドモ其ノ書ヲ観ル者ハ或ハ之ヲ信ジ或ハ之ヲ疑ヒ或ハ半ヲ信ジ半ヲ疑ヒ其ノ説ノ一ニ帰スル能ハザルハ何ゾヤ

跋

世ノ偽書多シト雖モ本朝ノ実ニ偽書ノ梁山ノ如キ者ハ未ダ之有ラズ其ノ作ル者ノ意ハ蓋シ以テ古ヲ信ジ難キヲ知ラシメント欲スルニ在ルカ然レドモ其ノ書ヲ観ル者ハ或ハ之ヲ信ジ或ハ之ヲ疑ヒ或ハ半ヲ信ジ半ヲ疑ヒ其ノ説ノ一ニ帰スル能ハザルハ何ゾヤ

蓋シ偽書ノ作ル者ハ必ズ其ノ時ニ当リテ其ノ事ヲ実ニシ其ノ人ヲ実ニシ其ノ物ヲ実ニシ其ノ地ヲ実ニシ其ノ年ヲ実ニシ其ノ月ヲ実ニシ其ノ日ヲ実ニシ其ノ時ヲ実ニシ其ノ言ヲ実ニシ其ノ行ヲ実ニシ其ノ書ヲ実ニシ其ノ器ヲ実ニシ其ノ服ヲ実ニシ其ノ食ヲ実ニシ其ノ居ヲ実ニシ其ノ交ヲ実ニシ其ノ遊ヲ実ニシ其ノ学ヲ実ニシ其ノ師ヲ実ニシ其ノ友ヲ実ニシ其ノ門ヲ実ニシ其ノ戸ヲ実ニシ其ノ庭ヲ実ニシ其ノ園ヲ実ニシ其ノ池ヲ実ニシ其ノ山ヲ実ニシ其ノ水ヲ実ニシ其ノ風ヲ実ニシ其ノ雨ヲ実ニシ其ノ雪ヲ実ニシ其ノ月ヲ実ニシ其ノ花ヲ実ニシ其ノ鳥ヲ実ニシ其ノ獣ヲ実ニシ其ノ虫ヲ実ニシ其ノ魚ヲ実ニシ其ノ草ヲ実ニシ其ノ木ヲ実ニシ其ノ竹ヲ実ニシ其ノ石ヲ実ニシ其ノ金ヲ実ニシ其ノ玉ヲ実ニシ其ノ貨ヲ実ニシ其ノ財ヲ実ニシ其ノ産ヲ実ニシ其ノ業ヲ実ニシ其ノ家ヲ実ニシ其ノ国ヲ実ニシ其ノ郡ヲ実ニシ其ノ県ヲ実ニシ其ノ郷ヲ実ニシ其ノ里ヲ実ニシ其ノ村ヲ実ニシ其ノ町ヲ実ニシ其ノ丁ヲ実ニシ其ノ番ヲ実ニシ其ノ組ヲ実ニシ其ノ隣ヲ実ニシ其ノ族ヲ実ニシ其ノ親ヲ実ニシ其ノ兄弟ヲ実ニシ其ノ夫婦ヲ実ニシ其ノ子ヲ実ニシ其ノ孫ヲ実ニシ其ノ曾孫ヲ実ニシ其ノ玄孫ヲ実ニシ其ノ来裔ヲ実ニシ其ノ先祖ヲ実ニシ其ノ墳墓ヲ実ニシ其ノ碑銘ヲ実ニシ其ノ行状ヲ実ニシ其ノ伝記ヲ実ニシ其ノ系図ヲ実ニシ其ノ譜牒ヲ実ニシ其ノ官位ヲ実ニシ其ノ職掌ヲ実ニシ其ノ法令ヲ実ニシ其ノ制度ヲ実ニシ其ノ儀式ヲ実ニシ其ノ典礼ヲ実ニシ其ノ文章ヲ実ニシ其ノ詩歌ヲ実ニシ其ノ管絃ヲ実ニシ其ノ舞踏ヲ実ニシ其ノ遊戯ヲ実ニシ其ノ武芸ヲ実ニシ其ノ兵法ヲ実ニシ其ノ軍陣ヲ実ニシ其ノ合戦ヲ実ニシ其ノ攻伐ヲ実ニシ其ノ城郭ヲ実ニシ其ノ関塞ヲ実ニシ其ノ道路ヲ実ニシ其ノ橋梁ヲ実ニシ其ノ舟楫ヲ実ニシ其ノ港湾ヲ実ニシ其ノ海岸ヲ実ニシ其ノ島嶼ヲ実ニシ其ノ風土ヲ実ニシ其ノ産物ヲ実ニシ其ノ貢賦ヲ実ニシ其ノ租税ヲ実ニシ其ノ倉庫ヲ実ニシ其ノ市廛ヲ実ニシ其ノ交易ヲ実ニシ其ノ貨幣ヲ実ニシ其ノ度量衡ヲ実ニシ其ノ暦数ヲ実ニシ其ノ天文ヲ実ニシ其ノ地理ヲ実ニシ其ノ医薬ヲ実ニシ其ノ本草ヲ実ニシ其ノ博物ヲ実ニシ其ノ考証ヲ実ニシ其ノ訓詁ヲ実ニシ其ノ字書ヲ実ニシ其ノ音韻ヲ実ニシ其ノ仏教ヲ実ニシ其ノ神道ヲ実ニシ其ノ儒学ヲ実ニシ其ノ国学ヲ実ニシ其ノ蘭学ヲ実ニシ其ノ洋学ヲ実ニシ其ノ和漢ノ古今ヲ実ニシ其ノ東西ノ古今ヲ実ニシ其ノ内外ノ古今ヲ実ニシ其ノ遠近ノ古今ヲ実ニシ其ノ上下ノ古今ヲ実ニシ其ノ前後ノ古今ヲ実ニシ其ノ左右ノ古今ヲ実ニシ其ノ表裏ノ古今ヲ実ニシ其ノ精粗ノ古今ヲ実ニシ其ノ本末ノ古今ヲ実ニシ其ノ終始ノ古今ヲ実ニシ其ノ巨細ノ古今ヲ実ニシ其ノ軽重ノ古今ヲ実ニシ其ノ厚薄ノ古今ヲ実ニシ其ノ深浅ノ古今ヲ実ニシ其ノ広狭ノ古今ヲ実ニシ其ノ長短ノ古今ヲ実ニシ其ノ高下ノ古今ヲ実ニシ其ノ遅速ノ古今ヲ実ニシ其ノ難易ノ古今ヲ実ニシ其ノ疎密ノ古今ヲ実ニシ其ノ清濁ノ古今ヲ実ニシ其ノ軟硬ノ古今ヲ実ニシ其ノ寒暖ノ古今ヲ実ニシ其ノ乾湿ノ古今ヲ実ニシ其ノ明暗ノ古今ヲ実ニシ其ノ彩色ノ古今ヲ実ニシ其ノ香臭ノ古今ヲ実ニシ其ノ味ノ古今ヲ実ニシ其ノ触ノ古今ヲ実ニシ其ノ声ノ古今ヲ実ニシ其ノ形ノ古今ヲ実ニシ其ノ数ノ古今ヲ実ニシ其ノ理ノ古今ヲ実ニシ其ノ気ノ古今ヲ実ニシ其ノ神ノ古今ヲ実ニシ其ノ霊ノ古今ヲ実ニシ其ノ魂ノ古今ヲ実ニシ其ノ魄ノ古今ヲ実ニシ其ノ心ノ古今ヲ実ニシ其ノ意ノ古今ヲ実ニシ其ノ志ノ古今ヲ実ニシ其ノ情ノ古今ヲ実ニシ其ノ性ノ古今ヲ実ニシ其ノ命ノ古今ヲ実ニシ其ノ道ノ古今ヲ実ニシ其ノ徳ノ古今ヲ実ニシ其ノ仁ノ古今ヲ実ニシ其ノ義ノ古今ヲ実ニシ其ノ礼ノ古今ヲ実ニシ其ノ智ノ古今ヲ実ニシ其ノ信ノ古今ヲ実ニシ其ノ忠ノ古今ヲ実ニシ其ノ孝ノ古今ヲ実ニシ其ノ悌ノ古今ヲ実ニシ其ノ貞ノ古今ヲ実ニシ其ノ節ノ古今ヲ実ニシ其ノ操ノ古今ヲ実ニシ其ノ廉ノ古今ヲ実ニシ其ノ潔ノ古今ヲ実ニシ其ノ恥ノ古今ヲ実ニシ其ノ勇ノ古今ヲ実ニシ其ノ剛ノ古今ヲ実ニシ其ノ柔ノ古今ヲ実ニシ其ノ温ノ古今ヲ実ニシ其ノ良ノ古今ヲ実ニシ其ノ恭ノ古今ヲ実ニシ其ノ倹ノ古今ヲ実ニシ其ノ譲ノ古今ヲ実ニシ其ノ寛ノ古今ヲ実ニシ其ノ容ノ古今ヲ実ニシ其ノ忍ノ古今ヲ実ニシ其ノ勤ノ古今ヲ実ニシ其ノ敏ノ古今ヲ実ニシ其ノ慎ノ古今ヲ実ニシ其ノ思ノ古今ヲ実ニシ其ノ慮ノ古今ヲ実ニシ其ノ謀ノ古今ヲ実ニシ其ノ断ノ古今ヲ実ニシ其ノ果ノ古今ヲ実ニシ其ノ毅ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ訥ノ古今ヲ実ニシ其ノ言ノ古今ヲ実ニシ其ノ行ノ古今ヲ実ニシ其ノ文ノ古今ヲ実ニシ其ノ質ノ古今ヲ実ニシ其ノ兼ヲ咲ノ古今ヲ実ニシ其ノ雑ノ古今ヲ実ニシ其ノ純ノ古今ヲ実ニシ其ノ駁ノ古今ヲ実ニシ其ノ醇ノ古今ヲ実ニシ其ノ疵ノ古今ヲ実ニシ其ノ瑕ノ古今ヲ実ニシ其ノ玷ノ古今ヲ実ニシ其ノ汚ノ古今ヲ実ニシ其ノ垢ノ古今ヲ実ニシ其ノ塵ノ古今ヲ実ニシ其ノ穢ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ罪ノ古今ヲ実ニシ其ノ過ノ古今ヲ実ニシ其ノ失ノ古今ヲ実ニシ其ノ咎ノ古今ヲ実ニシ其ノ責ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ刑ノ古今ヲ実ニシ其ノ獄ノ古今ヲ実ニシ其ノ訟ノ古今ヲ実ニシ其ノ争ノ古今ヲ実ニシ其ノ闘ノ古今ヲ実ニシ其ノ戦ノ古今ヲ実ニシ其ノ敗ノ古今ヲ実ニシ其ノ死ノ古今ヲ実ニシ其ノ葬ノ古今ヲ実ニシ其ノ祭ノ古今ヲ実ニシ其ノ祀ノ古今ヲ実ニシ其ノ福ノ古今ヲ実ニシ其ノ禍ノ古今ヲ実ニシ其ノ吉ノ古今ヲ実ニシ其ノ凶ノ古今ヲ実ニシ其ノ善ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ是ノ古今ヲ実ニシ其ノ非ノ古今ヲ実ニシ其ノ可ノ古今ヲ実ニシ其ノ否ノ古今ヲ実ニシ其ノ賞ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ褒ノ古今ヲ実ニシ其ノ貶ノ古今ヲ実ニシ其ノ毀ノ古今ヲ実ニシ其ノ誉ノ古今ヲ実ニシ其ノ称ノ古今ヲ実ニシ其ノ譏ノ古今ヲ実ニシ其ノ議ノ古今ヲ実ニシ其ノ論ノ古今ヲ実ニシ其ノ弁ノ古今ヲ実ニシ其ノ説ノ古今ヲ実ニシ其ノ解ノ古今ヲ実ニシ其ノ釈ノ古今ヲ実ニシ其ノ疑ノ古今ヲ実ニシ其ノ問ノ古今ヲ実ニシ其ノ答ノ古今ヲ実ニシ其ノ対ノ古今ヲ実ニシ其ノ応ノ古今ヲ実ニシ其ノ酬ノ古今ヲ実ニシ其ノ唱ノ古今ヲ実ニシ其ノ和ノ古今ヲ実ニシ其ノ賦ノ古今ヲ実ニシ其ノ比ノ古今ヲ実ニシ其ノ興ノ古今ヲ実ニシ其ノ雅ノ古今ヲ実ニシ其ノ頌ノ古今ヲ実ニシ其ノ風ノ古今ヲ実ニシ其ノ雨ノ古今ヲ実ニシ其ノ雪ノ古今ヲ実ニシ其ノ月ノ古今ヲ実ニシ其ノ花ノ古今ヲ実ニシ其ノ鳥ノ古今ヲ実ニシ其ノ獣ノ古今ヲ実ニシ其ノ虫ノ古今ヲ実ニシ其ノ魚ノ古今ヲ実ニシ其ノ草ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ竹ノ古今ヲ実ニシ其ノ石ノ古今ヲ実ニシ其ノ金ノ古今ヲ実ニシ其ノ玉ノ古今ヲ実ニシ其ノ貨ノ古今ヲ実ニシ其ノ財ノ古今ヲ実ニシ其ノ産ノ古今ヲ実ニシ其ノ業ノ古今ヲ実ニシ其ノ家ノ古今ヲ実ニシ其ノ国ノ古今ヲ実ニシ其ノ郡ノ古今ヲ実ニシ其ノ県ノ古今ヲ実ニシ其ノ郷ノ古今ヲ実ニシ其ノ里ノ古今ヲ実ニシ其ノ村ノ古今ヲ実ニシ其ノ町ノ古今ヲ実ニシ其ノ丁ノ古今ヲ実ニシ其ノ番ノ古今ヲ実ニシ其ノ組ノ古今ヲ実ニシ其ノ隣ノ古今ヲ実ニシ其ノ族ノ古今ヲ実ニシ其ノ親ノ古今ヲ実ニシ其ノ兄弟ノ古今ヲ実ニシ其ノ夫婦ノ古今ヲ実ニシ其ノ子ノ古今ヲ実ニシ其ノ孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ曾孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ玄孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ来裔ノ古今ヲ実ニシ其ノ先祖ノ古今ヲ実ニシ其ノ墳墓ノ古今ヲ実ニシ其ノ碑銘ノ古今ヲ実ニシ其ノ行状ノ古今ヲ実ニシ其ノ伝記ノ古今ヲ実ニシ其ノ系図ノ古今ヲ実ニシ其ノ譜牒ノ古今ヲ実ニシ其ノ官位ノ古今ヲ実ニシ其ノ職掌ノ古今ヲ実ニシ其ノ法令ノ古今ヲ実ニシ其ノ制度ノ古今ヲ実ニシ其ノ儀式ノ古今ヲ実ニシ其ノ典礼ノ古今ヲ実ニシ其ノ文章ノ古今ヲ実ニシ其ノ詩歌ノ古今ヲ実ニシ其ノ管絃ノ古今ヲ実ニシ其ノ舞踏ノ古今ヲ実ニシ其ノ遊戯ノ古今ヲ実ニシ其ノ武芸ノ古今ヲ実ニシ其ノ兵法ノ古今ヲ実ニシ其ノ軍陣ノ古今ヲ実ニシ其ノ合戦ノ古今ヲ実ニシ其ノ攻伐ノ古今ヲ実ニシ其ノ城郭ノ古今ヲ実ニシ其ノ関塞ノ古今ヲ実ニシ其ノ道路ノ古今ヲ実ニシ其ノ橋梁ノ古今ヲ実ニシ其ノ舟楫ノ古今ヲ実ニシ其ノ港湾ノ古今ヲ実ニシ其ノ海岸ノ古今ヲ実ニシ其ノ島嶼ノ古今ヲ実ニシ其ノ風土ノ古今ヲ実ニシ其ノ産物ノ古今ヲ実ニシ其ノ貢賦ノ古今ヲ実ニシ其ノ租税ノ古今ヲ実ニシ其ノ倉庫ノ古今ヲ実ニシ其ノ市廛ノ古今ヲ実ニシ其ノ交易ノ古今ヲ実ニシ其ノ貨幣ノ古今ヲ実ニシ其ノ度量衡ノ古今ヲ実ニシ其ノ暦数ノ古今ヲ実ニシ其ノ天文ノ古今ヲ実ニシ其ノ地理ノ古今ヲ実ニシ其ノ医薬ノ古今ヲ実ニシ其ノ本草ノ古今ヲ実ニシ其ノ博物ノ古今ヲ実ニシ其ノ考証ノ古今ヲ実ニシ其ノ訓詁ノ古今ヲ実ニシ其ノ字書ノ古今ヲ実ニシ其ノ音韻ノ古今ヲ実ニシ其ノ仏教ノ古今ヲ実ニシ其ノ神道ノ古今ヲ実ニシ其ノ儒学ノ古今ヲ実ニシ其ノ国学ノ古今ヲ実ニシ其ノ蘭学ノ古今ヲ実ニシ其ノ洋学ノ古今ヲ実ニシ其ノ和漢ノ古今ヲ実ニシ其ノ東西ノ古今ヲ実ニシ其ノ内外ノ古今ヲ実ニシ其ノ遠近ノ古今ヲ実ニシ其ノ上下ノ古今ヲ実ニシ其ノ前後ノ古今ヲ実ニシ其ノ左右ノ古今ヲ実ニシ其ノ表裏ノ古今ヲ実ニシ其ノ精粗ノ古今ヲ実ニシ其ノ本末ノ古今ヲ実ニシ其ノ終始ノ古今ヲ実ニシ其ノ巨細ノ古今ヲ実ニシ其ノ軽重ノ古今ヲ実ニシ其ノ厚薄ノ古今ヲ実ニシ其ノ深浅ノ古今ヲ実ニシ其ノ広狭ノ古今ヲ実ニシ其ノ長短ノ古今ヲ実ニシ其ノ高下ノ古今ヲ実ニシ其ノ遅速ノ古今ヲ実ニシ其ノ難易ノ古今ヲ実ニシ其ノ疎密ノ古今ヲ実ニシ其ノ清濁ノ古今ヲ実ニシ其ノ軟硬ノ古今ヲ実ニシ其ノ寒暖ノ古今ヲ実ニシ其ノ乾湿ノ古今ヲ実ニシ其ノ明暗ノ古今ヲ実ニシ其ノ彩色ノ古今ヲ実ニシ其ノ香臭ノ古今ヲ実ニシ其ノ味ノ古今ヲ実ニシ其ノ触ノ古今ヲ実ニシ其ノ声ノ古今ヲ実ニシ其ノ形ノ古今ヲ実ニシ其ノ数ノ古今ヲ実ニシ其ノ理ノ古今ヲ実ニシ其ノ気ノ古今ヲ実ニシ其ノ神ノ古今ヲ実ニシ其ノ霊ノ古今ヲ実ニシ其ノ魂ノ古今ヲ実ニシ其ノ魄ノ古今ヲ実ニシ其ノ心ノ古今ヲ実ニシ其ノ意ノ古今ヲ実ニシ其ノ志ノ古今ヲ実ニシ其ノ情ノ古今ヲ実ニシ其ノ性ノ古今ヲ実ニシ其ノ命ノ古今ヲ実ニシ其ノ道ノ古今ヲ実ニシ其ノ徳ノ古今ヲ実ニシ其ノ仁ノ古今ヲ実ニシ其ノ義ノ古今ヲ実ニシ其ノ礼ノ古今ヲ実ニシ其ノ智ノ古今ヲ実ニシ其ノ信ノ古今ヲ実ニシ其ノ忠ノ古今ヲ実ニシ其ノ孝ノ古今ヲ実ニシ其ノ悌ノ古今ヲ実ニシ其ノ貞ノ古今ヲ実ニシ其ノ節ノ古今ヲ実ニシ其ノ操ノ古今ヲ実ニシ其ノ廉ノ古今ヲ実ニシ其ノ潔ノ古今ヲ実ニシ其ノ恥ノ古今ヲ実ニシ其ノ勇ノ古今ヲ実ニシ其ノ剛ノ古今ヲ実ニシ其ノ柔ノ古今ヲ実ニシ其ノ温ノ古今ヲ実ニシ其ノ良ノ古今ヲ実ニシ其ノ恭ノ古今ヲ実ニシ其ノ倹ノ古今ヲ実ニシ其ノ譲ノ古今ヲ実ニシ其ノ寛ノ古今ヲ実ニシ其ノ容ノ古今ヲ実ニシ其ノ忍ノ古今ヲ実ニシ其ノ勤ノ古今ヲ実ニシ其ノ敏ノ古今ヲ実ニシ其ノ慎ノ古今ヲ実ニシ其ノ思ノ古今ヲ実ニシ其ノ慮ノ古今ヲ実ニシ其ノ謀ノ古今ヲ実ニシ其ノ断ノ古今ヲ実ニシ其ノ果ノ古今ヲ実ニシ其ノ毅ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ訥ノ古今ヲ実ニシ其ノ言ノ古今ヲ実ニシ其ノ行ノ古今ヲ実ニシ其ノ文ノ古今ヲ実ニシ其ノ質ノ古今ヲ実ニシ其ノ兼ヲ咲ノ古今ヲ実ニシ其ノ雑ノ古今ヲ実ニシ其ノ純ノ古今ヲ実ニシ其ノ駁ノ古今ヲ実ニシ其ノ醇ノ古今ヲ実ニシ其ノ疵ノ古今ヲ実ニシ其ノ瑕ノ古今ヲ実ニシ其ノ玷ノ古今ヲ実ニシ其ノ汚ノ古今ヲ実ニシ其ノ垢ノ古今ヲ実ニシ其ノ塵ノ古今ヲ実ニシ其ノ穢ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ罪ノ古今ヲ実ニシ其ノ過ノ古今ヲ実ニシ其ノ失ノ古今ヲ実ニシ其ノ咎ノ古今ヲ実ニシ其ノ責ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ刑ノ古今ヲ実ニシ其ノ獄ノ古今ヲ実ニシ其ノ訟ノ古今ヲ実ニシ其ノ争ノ古今ヲ実ニシ其ノ闘ノ古今ヲ実ニシ其ノ戦ノ古今ヲ実ニシ其ノ敗ノ古今ヲ実ニシ其ノ死ノ古今ヲ実ニシ其ノ葬ノ古今ヲ実ニシ其ノ祭ノ古今ヲ実ニシ其ノ祀ノ古今ヲ実ニシ其ノ福ノ古今ヲ実ニシ其ノ禍ノ古今ヲ実ニシ其ノ吉ノ古今ヲ実ニシ其ノ凶ノ古今ヲ実ニシ其ノ善ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ是ノ古今ヲ実ニシ其ノ非ノ古今ヲ実ニシ其ノ可ノ古今ヲ実ニシ其ノ否ノ古今ヲ実ニシ其ノ賞ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ褒ノ古今ヲ実ニシ其ノ貶ノ古今ヲ実ニシ其ノ毀ノ古今ヲ実ニシ其ノ誉ノ古今ヲ実ニシ其ノ称ノ古今ヲ実ニシ其ノ譏ノ古今ヲ実ニシ其ノ議ノ古今ヲ実ニシ其ノ論ノ古今ヲ実ニシ其ノ弁ノ古今ヲ実ニシ其ノ説ノ古今ヲ実ニシ其ノ解ノ古今ヲ実ニシ其ノ釈ノ古今ヲ実ニシ其ノ疑ノ古今ヲ実ニシ其ノ問ノ古今ヲ実ニシ其ノ答ノ古今ヲ実ニシ其ノ対ノ古今ヲ実ニシ其ノ応ノ古今ヲ実ニシ其ノ酬ノ古今ヲ実ニシ其ノ唱ノ古今ヲ実ニシ其ノ和ノ古今ヲ実ニシ其ノ賦ノ古今ヲ実ニシ其ノ比ノ古今ヲ実ニシ其ノ興ノ古今ヲ実ニシ其ノ雅ノ古今ヲ実ニシ其ノ頌ノ古今ヲ実ニシ其ノ風ノ古今ヲ実ニシ其ノ雨ノ古今ヲ実ニシ其ノ雪ノ古今ヲ実ニシ其ノ月ノ古今ヲ実ニシ其ノ花ノ古今ヲ実ニシ其ノ鳥ノ古今ヲ実ニシ其ノ獣ノ古今ヲ実ニシ其ノ虫ノ古今ヲ実ニシ其ノ魚ノ古今ヲ実ニシ其ノ草ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ竹ノ古今ヲ実ニシ其ノ石ノ古今ヲ実ニシ其ノ金ノ古今ヲ実ニシ其ノ玉ノ古今ヲ実ニシ其ノ貨ノ古今ヲ実ニシ其ノ財ノ古今ヲ実ニシ其ノ産ノ古今ヲ実ニシ其ノ業ノ古今ヲ実ニシ其ノ家ノ古今ヲ実ニシ其ノ国ノ古今ヲ実ニシ其ノ郡ノ古今ヲ実ニシ其ノ県ノ古今ヲ実ニシ其ノ郷ノ古今ヲ実ニシ其ノ里ノ古今ヲ実ニシ其ノ村ノ古今ヲ実ニシ其ノ町ノ古今ヲ実ニシ其ノ丁ノ古今ヲ実ニシ其ノ番ノ古今ヲ実ニシ其ノ組ノ古今ヲ実ニシ其ノ隣ノ古今ヲ実ニシ其ノ族ノ古今ヲ実ニシ其ノ親ノ古今ヲ実ニシ其ノ兄弟ノ古今ヲ実ニシ其ノ夫婦ノ古今ヲ実ニシ其ノ子ノ古今ヲ実ニシ其ノ孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ曾孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ玄孫ノ古今ヲ実ニシ其ノ来裔ノ古今ヲ実ニシ其ノ先祖ノ古今ヲ実ニシ其ノ墳墓ノ古今ヲ実ニシ其ノ碑銘ノ古今ヲ実ニシ其ノ行状ノ古今ヲ実ニシ其ノ伝記ノ古今ヲ実ニシ其ノ系図ノ古今ヲ実ニシ其ノ譜牒ノ古今ヲ実ニシ其ノ官位ノ古今ヲ実ニシ其ノ職掌ノ古今ヲ実ニシ其ノ法令ノ古今ヲ実ニシ其ノ制度ノ古今ヲ実ニシ其ノ儀式ノ古今ヲ実ニシ其ノ典礼ノ古今ヲ実ニシ其ノ文章ノ古今ヲ実ニシ其ノ詩歌ノ古今ヲ実ニシ其ノ管絃ノ古今ヲ実ニシ其ノ舞踏ノ古今ヲ実ニシ其ノ遊戯ノ古今ヲ実ニシ其ノ武芸ノ古今ヲ実ニシ其ノ兵法ノ古今ヲ実ニシ其ノ軍陣ノ古今ヲ実ニシ其ノ合戦ノ古今ヲ実ニシ其ノ攻伐ノ古今ヲ実ニシ其ノ城郭ノ古今ヲ実ニシ其ノ関塞ノ古今ヲ実ニシ其ノ道路ノ古今ヲ実ニシ其ノ橋梁ノ古今ヲ実ニシ其ノ舟楫ノ古今ヲ実ニシ其ノ港湾ノ古今ヲ実ニシ其ノ海岸ノ古今ヲ実ニシ其ノ島嶼ノ古今ヲ実ニシ其ノ風土ノ古今ヲ実ニシ其ノ産物ノ古今ヲ実ニシ其ノ貢賦ノ古今ヲ実ニシ其ノ租税ノ古今ヲ実ニシ其ノ倉庫ノ古今ヲ実ニシ其ノ市廛ノ古今ヲ実ニシ其ノ交易ノ古今ヲ実ニシ其ノ貨幣ノ古今ヲ実ニシ其ノ度量衡ノ古今ヲ実ニシ其ノ暦数ノ古今ヲ実ニシ其ノ天文ノ古今ヲ実ニシ其ノ地理ノ古今ヲ実ニシ其ノ医薬ノ古今ヲ実ニシ其ノ本草ノ古今ヲ実ニシ其ノ博物ノ古今ヲ実ニシ其ノ考証ノ古今ヲ実ニシ其ノ訓詁ノ古今ヲ実ニシ其ノ字書ノ古今ヲ実ニシ其ノ音韻ノ古今ヲ実ニシ其ノ仏教ノ古今ヲ実ニシ其ノ神道ノ古今ヲ実ニシ其ノ儒学ノ古今ヲ実ニシ其ノ国学ノ古今ヲ実ニシ其ノ蘭学ノ古今ヲ実ニシ其ノ洋学ノ古今ヲ実ニシ其ノ和漢ノ古今ヲ実ニシ其ノ東西ノ古今ヲ実ニシ其ノ内外ノ古今ヲ実ニシ其ノ遠近ノ古今ヲ実ニシ其ノ上下ノ古今ヲ実ニシ其ノ前後ノ古今ヲ実ニシ其ノ左右ノ古今ヲ実ニシ其ノ表裏ノ古今ヲ実ニシ其ノ精粗ノ古今ヲ実ニシ其ノ本末ノ古今ヲ実ニシ其ノ終始ノ古今ヲ実ニシ其ノ巨細ノ古今ヲ実ニシ其ノ軽重ノ古今ヲ実ニシ其ノ厚薄ノ古今ヲ実ニシ其ノ深浅ノ古今ヲ実ニシ其ノ広狭ノ古今ヲ実ニシ其ノ長短ノ古今ヲ実ニシ其ノ高下ノ古今ヲ実ニシ其ノ遅速ノ古今ヲ実ニシ其ノ難易ノ古今ヲ実ニシ其ノ疎密ノ古今ヲ実ニシ其ノ清濁ノ古今ヲ実ニシ其ノ軟硬ノ古今ヲ実ニシ其ノ寒暖ノ古今ヲ実ニシ其ノ乾湿ノ古今ヲ実ニシ其ノ明暗ノ古今ヲ実ニシ其ノ彩色ノ古今ヲ実ニシ其ノ香臭ノ古今ヲ実ニシ其ノ味ノ古今ヲ実ニシ其ノ触ノ古今ヲ実ニシ其ノ声ノ古今ヲ実ニシ其ノ形ノ古今ヲ実ニシ其ノ数ノ古今ヲ実ニシ其ノ理ノ古今ヲ実ニシ其ノ気ノ古今ヲ実ニシ其ノ神ノ古今ヲ実ニシ其ノ霊ノ古今ヲ実ニシ其ノ魂ノ古今ヲ実ニシ其ノ魄ノ古今ヲ実ニシ其ノ心ノ古今ヲ実ニシ其ノ意ノ古今ヲ実ニシ其ノ志ノ古今ヲ実ニシ其ノ情ノ古今ヲ実ニシ其ノ性ノ古今ヲ実ニシ其ノ命ノ古今ヲ実ニシ其ノ道ノ古今ヲ実ニシ其ノ徳ノ古今ヲ実ニシ其ノ仁ノ古今ヲ実ニシ其ノ義ノ古今ヲ実ニシ其ノ礼ノ古今ヲ実ニシ其ノ智ノ古今ヲ実ニシ其ノ信ノ古今ヲ実ニシ其ノ忠ノ古今ヲ実ニシ其ノ孝ノ古今ヲ実ニシ其ノ悌ノ古今ヲ実ニシ其ノ貞ノ古今ヲ実ニシ其ノ節ノ古今ヲ実ニシ其ノ操ノ古今ヲ実ニシ其ノ廉ノ古今ヲ実ニシ其ノ潔ノ古今ヲ実ニシ其ノ恥ノ古今ヲ実ニシ其ノ勇ノ古今ヲ実ニシ其ノ剛ノ古今ヲ実ニシ其ノ柔ノ古今ヲ実ニシ其ノ温ノ古今ヲ実ニシ其ノ良ノ古今ヲ実ニシ其ノ恭ノ古今ヲ実ニシ其ノ倹ノ古今ヲ実ニシ其ノ譲ノ古今ヲ実ニシ其ノ寛ノ古今ヲ実ニシ其ノ容ノ古今ヲ実ニシ其ノ忍ノ古今ヲ実ニシ其ノ勤ノ古今ヲ実ニシ其ノ敏ノ古今ヲ実ニシ其ノ慎ノ古今ヲ実ニシ其ノ思ノ古今ヲ実ニシ其ノ慮ノ古今ヲ実ニシ其ノ謀ノ古今ヲ実ニシ其ノ断ノ古今ヲ実ニシ其ノ果ノ古今ヲ実ニシ其ノ毅ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ訥ノ古今ヲ実ニシ其ノ言ノ古今ヲ実ニシ其ノ行ノ古今ヲ実ニシ其ノ文ノ古今ヲ実ニシ其ノ質ノ古今ヲ実ニシ其ノ兼ヲ咲ノ古今ヲ実ニシ其ノ雑ノ古今ヲ実ニシ其ノ純ノ古今ヲ実ニシ其ノ駁ノ古今ヲ実ニシ其ノ醇ノ古今ヲ実ニシ其ノ疵ノ古今ヲ実ニシ其ノ瑕ノ古今ヲ実ニシ其ノ玷ノ古今ヲ実ニシ其ノ汚ノ古今ヲ実ニシ其ノ垢ノ古今ヲ実ニシ其ノ塵ノ古今ヲ実ニシ其ノ穢ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ罪ノ古今ヲ実ニシ其ノ過ノ古今ヲ実ニシ其ノ失ノ古今ヲ実ニシ其ノ咎ノ古今ヲ実ニシ其ノ責ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ刑ノ古今ヲ実ニシ其ノ獄ノ古今ヲ実ニシ其ノ訟ノ古今ヲ実ニシ其ノ争ノ古今ヲ実ニシ其ノ闘ノ古今ヲ実ニシ其ノ戦ノ古今ヲ実ニシ其ノ敗ノ古今ヲ実ニシ其ノ死ノ古今ヲ実ニシ其ノ葬ノ古今ヲ実ニシ其ノ祭ノ古今ヲ実ニシ其ノ祀ノ古今ヲ実ニシ其ノ福ノ古今ヲ実ニシ其ノ禍ノ古今ヲ実ニシ其ノ吉ノ古今ヲ実ニシ其ノ凶ノ古今ヲ実ニシ其ノ善ノ古今ヲ実ニシ其ノ悪ノ古今ヲ実ニシ其ノ是ノ古今ヲ実ニシ其ノ非ノ古今ヲ実ニシ其ノ可ノ古今ヲ実ニシ其ノ否ノ古今ヲ実ニシ其ノ賞ノ古今ヲ実ニシ其ノ罰ノ古今ヲ実ニシ其ノ褒ノ古今ヲ実ニシ其ノ貶ノ古今ヲ実ニシ其ノ毀ノ古今ヲ実ニシ其ノ誉ノ古今ヲ実ニシ其ノ称ノ古今ヲ実ニシ其ノ譏ノ古今ヲ実ニシ其ノ議ノ古今ヲ実ニシ其ノ論ノ古今ヲ実ニシ其ノ弁ノ古今ヲ実ニシ其ノ説ノ古今ヲ実ニシ其ノ解ノ古今ヲ実ニシ其ノ釈ノ古今ヲ実ニシ其ノ疑ノ古今ヲ実ニシ其ノ問ノ古今ヲ実ニシ其ノ答ノ古今ヲ実ニシ其ノ対ノ古今ヲ実ニシ其ノ応ノ古今ヲ実ニシ其ノ酬ノ古今ヲ実ニシ其ノ唱ノ古今ヲ実ニシ其ノ和ノ古今ヲ実ニシ其ノ賦ノ古今ヲ実ニシ其ノ比ノ古今ヲ実ニシ其ノ興ノ古今ヲ実ニシ其ノ雅ノ古今ヲ実ニシ其ノ頌ノ古今ヲ実ニシ其ノ風ノ古今ヲ実ニシ其ノ雨ノ古今ヲ実ニシ其ノ雪ノ古今ヲ実ニシ其ノ月ノ古今ヲ実ニシ其ノ花ノ古今ヲ実ニシ其ノ鳥ノ古今ヲ実ニシ其ノ獣ノ古今ヲ実ニシ其ノ虫ノ古今ヲ実ニシ其ノ魚ノ古今ヲ実ニシ其ノ草ノ古今ヲ実ニシ其ノ木ノ古今ヲ実ニシ其ノ竹ノ古今ヲ実ニシ其ノ石ノ古今ヲ実ニシ其ノ金ノ古今ヲ実ニシ其ノ玉ノ古今ヲ実ニシ其ノ貨ノ古今ヲ実ニシ其ノ財ノ古今ヲ実ニシ其ノ産ノ古今ヲ実ニシ其ノ業ノ古今ヲ実ニシ其ノ家ノ古今ヲ実ニシ其ノ国ノ古今ヲ実ニシ其ノ郡ノ古今ヲ実ニシ其ノ県ノ古今ヲ実ニシ其ノ郷ノ古今ヲ実ニシ其ノ里ノ古今ヲ実ニシ其ノ村ノ古今ヲ実ニシ其ノ町ノ古今ヲ実ニシ其ノ丁ノ

第十 242

明治十四年十二月廿四日出版々權御願
同　十五年二月四日版權免許
同　年六月刻成發兌
明治二十年一月補刻

定價金七拾五錢

編輯者　京都府平民　山口素楊
京都府平民　風月庄右衛門

出版人　上京区第二十八組大恩寺町廿一番戸　中村風祥堂

專賣所　御幸町通三條北江九屋町